

一般国道49号  
阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 I

庚 塚 遺 跡  
狐 塚 遺 跡

2 0 0 9

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号  
阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 I

かのえ づか 遺 跡  
庚 塚 遺 跡  
きつね づか 遺 跡  
狐 塚 遺 跡

2 0 0 9

新潟県教育委員会  
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

一般国道49号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路です。同路線は、国道49号沿線市町村と新潟市を結び、日常生活や地域経済を支える重要な基盤道路としての役割を果たしています。

しかし、現道は阿賀野市市街地での幅員狭少等の問題を抱え、近年の著しい交通量の増加に十分に対応できておりません。その結果、交通混雑、交通騒音、交通事故の増加など、生活環境に悪影響を与える様々な問題が生じています。

そこで、阿賀野市六野瀬から同市下黒瀬を結ぶ延長13.7kmの阿賀野バイパスの建設が計画されました。同バイパスは、安全で円滑な交通の確保と都市機能活性化のために重要な役割を果たすものと大いに期待されています。

本書は阿賀野バイパス建設に先立ち、平成19年度に実施した庚塚遺跡、狐塚遺跡の発掘調査報告書です。

調査によって、庚塚遺跡では古代の溝と旧阿賀野川の河川跡が見つかりました。狐塚遺跡では、上層で14世紀を主体とする中世の掘立柱建物や井戸が見つかったことから、集落の一部であったと考えられ、下層では弥生時代の土坑墓が見つかり、副葬品と考えられる小型の壺・甕等が出土しています。土坑墓から出土した土器は、そのほとんどが高い完形率を誇り、北陸地方や東北地方の文化の影響を受けていることが分かりました。弥生時代の土坑墓は、県内でも調査例が少なく貴重な事例となりました。

今回の調査結果が地域の歴史を解明するための研究資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大なご支援とご協力をいただいた阿賀野市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご高配をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成21年2月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

## 例　　言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市大字寺社字庚塚3221-1番地ほかに所在する庚塚遺跡、および同市大字熊野新田字狐塚742番地ほかに所在する狐塚遺跡の発掘調査記録である。
- 2 調査は、一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委が、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社帆舟組に委託し、平成19年度に調査を実施した。
- 4 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成19年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあつた。
- 5 出土遺物及び調査・整理・自然科学分析等に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。
- 6 遺物の註記は、庚塚遺跡の略記号を「カノエ」とし、出土地点や層位等を記した。また狐塚遺跡は略記号を「キツネ」とし、出土地点や層位等を記した。
- 7 本書の図中で記す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標のX軸方向を示す。
- 8 本書に掲載した遺物番号は、遺物の種類ごとに通し番号とし、本文・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 9 本書の執筆は、高橋保雄（埋文事業団調査課　課長代理）の指導のもと、佐藤友子（同　班長）、杉田和宏（同主任調査員）、安西雅希（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課調査員）がこれにあたり、編集は佐藤が担当した。執筆分担は、佐藤：Ⅲ章4・5、Ⅳ章4B・6、杉田：I章、II章、Ⅲ章1～3、Ⅳ章1～3・6、安西：Ⅳ章4A、高橋：Ⅳ章3である。
- 10 自然科学分野に係る分析は、以下の機関に委託して行い、了解を得て再編集しⅣ章5に記した。  
　　リン酸・カルシウム分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 11 遺物・遺構図の各種図版作成・編集に関しては、株式会社セピアスに委託してDTPソフトにより実施し、デジタルデータから直接印刷した。
- 12 引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 13 調査成果の一部は狐塚遺跡現地説明会（平成19年12月8日）等で公表しているが、本報告書の記述をもって正式な報告とする。
- 14 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々および機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）  
阿賀野市教育委員会　阿部 泰之　石川日出志　金子 拓男　眞澤 正史　閑 雅之　高濱 信行  
田中 耕作　中島 栄一　野田 豊文　古澤 義史　増子 正三　水澤 幸一　渡邊 朋和

# 目 次

## 第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	4

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	6
2 歴史的環境	8
A 弥生時代の遺跡	8
B 生産遺跡	8
C 古代以降の遺跡	9
D 堀越館跡との関連	11

## 第Ⅲ章 庚塚遺跡

1 グリッドの設定	12
2 基本層序	12
3 遺構	14
A 概要	14
B 遺構各説	14
4 遺物	17
A 概要	17
B 各説	17
5 まとめ	17

## 第Ⅳ章 狐塚遺跡

1 グリッドの設定	20
2 基本層序	20
3 遺構	21
A 概要	21
B 中世遺構各説	22
C 弥生時代遺構各説	30
4 遺物	37
A 中世遺構出土物	37
B 弥生時代の土器	38

5 リン酸・カルシウム分析	42
A はじめに	42
B 試 料	42
C 結 果	42
D 考 察	44
6 ま と め	46
A 弥生時代中期後半の遺構について	46
B 弥生時代の墓制	49
C リン酸・カルシウム分析結果について	51
《要 約》	53
《引用・参考文献》	54
《別 表》	
孤塚遺跡弥生土器観察表	56

### 挿 図 目 次

第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置	2	孤塚遺跡	
第2図 試掘調査の結果	3	第12図 基本順序	20
第3図 調査区の名称	4	第13図 SE236井戸側・水溜模式図	25
第4図 庚塚・孤塚遺跡と周辺の地形	7	第14図 包含層掘削作業	30
第5図 庚塚・孤塚遺跡と土地利用図	7	第15図 弥生時代遺構の検出方法分類	30
第6図 周辺の遺跡	10	第16図 SK12検出状況	31
庚塚遺跡		第17図 試料採取地点及び土壤理化学分析結果	43
第7図 グリッド設定図	12	第18図 リン酸・カルシウム含量分布図	44
第8図 小グリッド模式図	12	第19図 土坑の規模	46
第9図 基本順序	13	第20図 土坑の長軸方向	47
第10図 遺構の平面形態と断面形態の分類	14	第21図 土坑底面からの土器出土レベル	48
第11図 庚塚遺跡出土遺物	18	第22図 弥生時代主要遺跡と墓制	50

### 表 目 次

第1表 調査・整理の経過	5	第3表 SE236井戸側部材計測値	25
第2表 周辺の遺跡	11	第4表 弥生時代遺構観察表	47

## 図版目次

### 【庚塚遺跡図面図版】

- 図版 1 調査範囲図
- 図版 2 造構全体図
- 図版 3 造構分割図（1）
- 図版 4 造構個別図（1）
- 図版 5 造構分割図（2）
- 図版 6 造構個別図（2）

### 【狐塚遺跡図面図版】

- 図版 7 造構全体図・中世
- 図版 8 造構分割図・中世
- 図版 9 造構個別図・中世（1）
- 図版 10 造構分割図・中世（2）
- 図版 11 造構個別図・中世（2）
- 図版 12 造構分割図・中世（3）
- 図版 13 造構個別図・中世（3）
- 図版 14 造構分割図・中世（4）
- 図版 15 造構個別図・中世（4）
- 図版 16 造構全体図・弥生時代
- 図版 17 造構分割図・弥生時代
- 図版 18 造構個別図・弥生時代（1）
- 図版 19 造構個別図・弥生時代（2）
- 図版 20 中世遺構出土遺物（土器・石製品・金属製品）  
　　弥生時代の土器（1）  
　　図版 21 弥生時代の土器（2）  
　　図版 22 弥生時代の土器（3）  
　　図版 23 弥生時代の土器（4）  
　　図版 24 弥生時代の土器（5）  
　　図版 25 中世の木製品（SE236）

### 【庚塚遺跡写真図版】

- 図版 26 遺跡の位置、B区完掘、B区基本層序、B区  
　　造構（1）SD14・15
- 図版 27 B区造構（2）SD3・14・15、SX11、C区完  
　　掘、C区基本層序、C区造構SD28・40、SK30
- 図版 28 古代・中世の土器・石製品

### 【狐塚遺跡写真図版】

- 図版 29 上層完掘
- 図版 30 中世の造構（1）SB165・P102、SB194・  
　　P197、SB208・P214、SB222・P128
- 図版 31 中世の造構（2）SB223、SB225・P111、  
　　SB318、SE173・176
- 図版 32 中世の造構（3）SE193・SX174、SE236、  
　　SK238、SD132・133
- 図版 33 弥生土器、下層完掘
- 図版 34 弥生時代の造構（1）SK6・25
- 図版 35 基本層序、弥生時代の造構（2）SK7・  
　　14・11・12・29、土器集中4
- 図版 36 下層完掘、弥生時代の造構（3）SK5・6
- 図版 37 弥生時代の造構（4）SK7・14・11
- 図版 38 弥生時代の造構（5）SK12・25
- 図版 39 弥生時代の造構（6）SK32・26・29
- 図版 40 弥生時代の造構（7）SK29・30、SX2、  
　　土器集中4・10・31
- 図版 41 弥生時代の土器（1）
- 図版 42 弥生時代の土器（2）
- 図版 43 弥生時代の土器（3）
- 図版 44 弥生時代の土器（4）
- 図版 45 弥生時代の土器（5）
- 図版 46 中世の遺物

# 第Ⅰ章 序 説

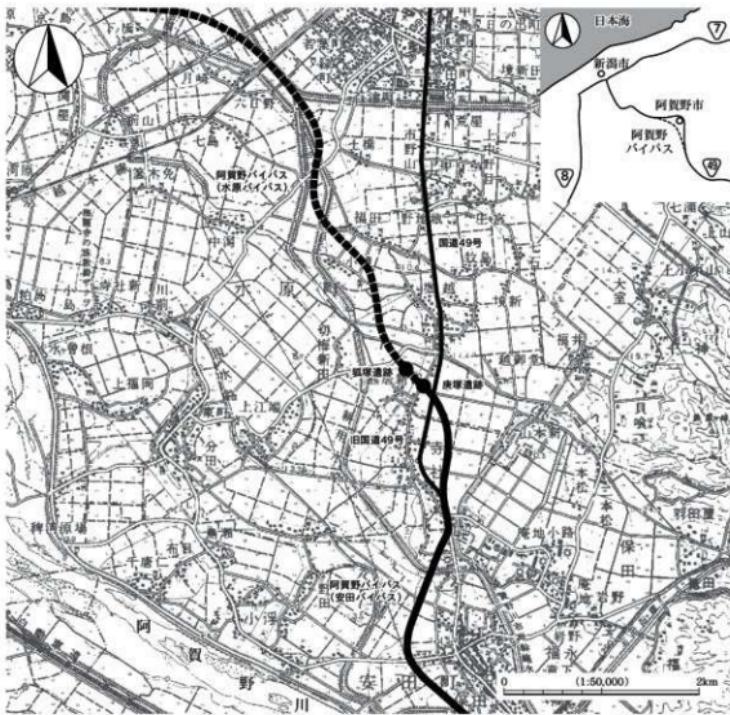
## 1 調査に至る経緯

一般国道49号（福島県いわき市～新潟市）は、太平洋側と日本海側を結ぶ重要な幹線道路である。新潟県内では、沿線の阿賀野市と新潟市を結ぶ地域幹線道路として重要な役割を果たしている。同路線は阿賀野市の市街地部（旧水原町・旧安田町・旧京ヶ瀬村）を通過している。この区間の道路幅員が狭小なため、近年の交通量増加に十分対応できず、交通混雑や交通騒音・交通事故等、生活環境に与える影響が問題となってきた。これらの問題を解消し、安全で円滑な交通を目標に掲げ、「一般国道49号安田バイパス」（阿賀野市六野瀬～同市寺社間 5.6km）と「一般国道49号水原バイパス」（阿賀野市寺社～同市下黒瀬間 8.1km）が計画された。平成16年の市町村合併に伴う阿賀野市の誕生を機に、これら2つのバイパスを合わせて「阿賀野バイパス」と呼称することになった。

阿賀野バイパスのうち水原バイパス部分は、平成11年3月に都市計画が決定、翌12年4月に事業化、平成15年度から用地着手が行われた。これを受け、国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、建設用地内における埋蔵文化財の試掘確認調査に関する協議が本格化した。

国土交通省から試掘調査実施の依頼を受けた県教委は、平成17年度に財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託した。平成17年度試掘調査によって、遺構と古代の遺物を検出し、小字名から「庚塚遺跡」として新遺跡登録した。本発掘調査必要面積は4,850m<sup>2</sup>とした。平成18年度には、前年度調査範囲の西側へ進み試掘調査をしたところ、弥生時代の遺物が一括して出土し、小字名から「狐塚遺跡」として新遺跡登録した。本発掘調査必要面積は5,470m<sup>2</sup>とした。

その後、国土交通省、県教委、埋文事業団の三者で取扱い協議を行い、平成19年度にこれらの新遺跡の発掘調査を行うこととなった。本発掘調査対象面積は工事用道路（農道）部分を除き、庚塚遺跡2,910m<sup>2</sup>、狐塚遺跡2,964m<sup>2</sup>とした。国土交通省から委託を受けた県教委は埋文事業団に本発掘調査を依頼し、平成19年8月に本発掘調査に着手した。その後、狐塚遺跡については遺跡が調査区外に拡大することが判明し、550m<sup>2</sup>の拡張調査を行った。



第1図 阿賀野バイパスの路線と遺跡の位置

(国土地理院発行「鷹川」[新津] 1:50,000原図)

## 2 調査と整理作業

### A 試掘調査

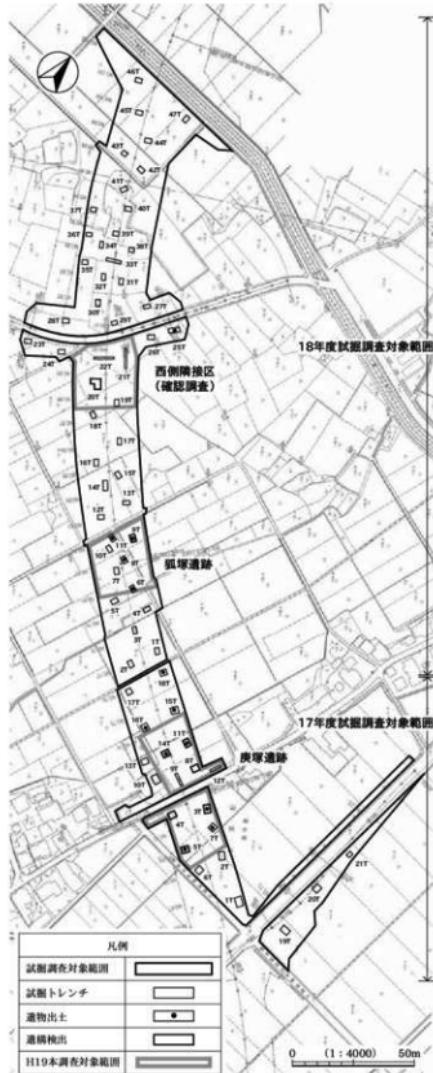
#### 1) 調査の体制

調査年度	平成17年度試掘調査	平成18年度試掘調査
調査期間	平成17年9月13日～22日	平成18年9月11日～9月22日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）	
調査機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団	
管 理	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長） 長谷川二三夫（同 総務課長） 藤巻 正信（同 調査課長）	斎藤 栄（同 総務課長）
庶 務	長谷川 靖（同 総務課班長）	
調査指導	寺崎 裕助（同 調査課担当課長代理）	田海 義正（同 調査課担当課長代理）
調査担当	滝沢 規朗（同 調査課班長）	田海 義正（同 調査課担当課長代理）
調査員	齊藤 準（同 調査課嘱託員）	田中 一徳（同 調査課嘱託員）

## 2) 調査の結果と取扱い

庚塚遺跡・狐塚遺跡の試掘調査は、平成17年度と18年度に行った。平成17年度は、大字寺社地内のバイパス予定路線内12,080m<sup>2</sup>を対象に、任意の地点に21か所のトレンチを設定し、639m<sup>2</sup>（確認率5.3%）調査した。調査によって、削平された部分は多いが、古代の遺物包含層を複数トレンチで確認した。また、溝・土坑等の遺構を検出し、これらは遺物を伴わないが、周辺トレンチの出土遺物から古代の遺構の可能性が高いと判断した。この結果を踏まえ、小字名から新遺跡「庚塚遺跡」として新登録し、本調査必要面積は4,850m<sup>2</sup>とした。

平成18年度には、調査範囲を更に西側に進め、大字熊居新田地内のバイパス予定路線内32,770m<sup>2</sup>を対象に任意地点47か所にトレンチを設定し、820m<sup>2</sup>（確認率2.5%）調査したところ、6・8・9・11・25トレンチで遺物が出土した。中でも8トレンチでは弥生時代中期の土器3個体分と破片がまとまって出土し、その一括した出土状況が注目された。試掘調査の段階では、遺物が出土した土層に特徴が見られず、遺物包含層を明確に捉えることはできなかった。また、20トレンチからは2本の並行した溝が検出された。遺物を伴わず、遺構の時期は特定できないが、道路状遺構の可能性があると考えられたことから20トレンチ周辺はより詳細な遺構の情報を得るため、本発掘調査時に確認調査を行うこととした。この結果、「狐塚遺跡」として新登録し、本調査必要面積は8トレンチを中心とした5,470m<sup>2</sup>と報告した。



第2図 試掘調査の結果

## B 本発掘調査

### 1) 調査・整理の体制

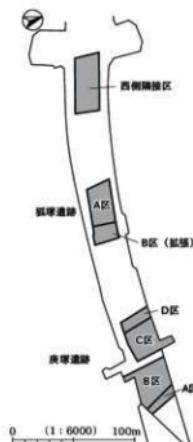
調査期間	庚塚遺跡 平成19年8月6日～10月22日 狐塚遺跡 平成19年10月1日～12月26日
整理期間	平成19年12月15日～平成20年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正明（財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）
管理	斎藤 栄（同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（同 総務課班長）
調査總括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査指導	高橋 保雄（同 調査課担当課長代理）
調査担当	佐藤 友子（同 調査課班長）
職員	杉田 和宏（同 調査課主任調査員）
支援組織	株式会社帆舟組
現場代理人	伊藤 啓（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課 主任） 村上 章久（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課）
調査員	谷岡 康孝（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課）＊平成19年10月2日まで 安西 雅希（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課）＊平成19年10月4日から
補助員	鈴巻奈美子 大瀧 明美 田中加代子（以上、株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課）

### 2) 調査・整理の経過

本発掘調査は、平成19年8月後半から着手することで調整を進めた。まず、8月上旬に庚塚、狐塚遺跡で共通して使用する事務所設置等の準備工を行い、これと並行して8月6日から庚塚遺跡の表土掘削を開始した。調査班が同年4月から8月まで糸魚川市田伏山崎遺跡の調査を担当したため、表土掘削は調査員1名が先行して行った。本格的な作業員投入は田伏山崎遺跡の調査終了を待ち、8月下旬からとなった。東から西に向かい、庚塚遺跡A～D区、狐塚遺跡A区・西側隣接区の順に調査を進めていくこととした。

庚塚遺跡は、耕地整理の削平から遺物包含層の残存状況が良好でなく、遺物の出土は限られたものとなった。大小の溝や土坑を検出したが、遺構に伴う遺物が少なく時期確定に困難を伴った。すべての遺構を断割り調査したが、結果的に近世以降の可能性の高いものが多かった。A・B区は9月27日に調査を終了し、引き続きC区の調査に移行した。C区では古代の旧河川跡が確認され、期間短縮のため重機を効果的に用いて掘削作業を行い、10月10日に完掘写真撮影を行った。なおD区は、C区の旧河川跡の続きであることが表土掘削時に確認できていたが、川底から近世陶磁器が1点出土したのみであり、湧水も著しいことから表土掘削のみで調査を終了した。

狐塚遺跡はA区より着手し、10月1日に表土掘削を開始した。中世の遺構は試掘調査で検出されており、遺物が伴わず時期が不明であったが、本発掘調査で珠洲焼1点が遺構内から出土したことから、



第3図 調査区の名称

中世と弥生時代の二層となることが判明した。A区中世面は多数の掘立柱建物、井戸等を検出し、11月6日に完掘写真を撮影し調査を終了した。しかし、遺跡は更に東側に延びる可能性が高く、国土交通省との協議を待つこととなった。最終的にB区550m<sup>2</sup>の拡張が決定し、11月19日～28日にかけて調査を行った。

この間、11月6日～16日にかけて、狐塚遺跡西側隣接区の確認調査を行った。18年度の試掘調査では2本の並行した溝が検出され、道路状構造の可能性を考えたが、遺物の出土が全く見られず、詳細な時期を確定することはできなかった。そこで前回のトレーニング調査に対し、今回は調査対象面積2,830m<sup>2</sup>中1,650m<sup>2</sup>を重機で表土掘削し、その後人力で遺構確認、遺構掘削を行うという確認調査を行った。その結果、複数の溝状遺構や土坑を検出したが、もっとも古いと見られた遺構から近世磁器が出土したことから、近世の遺跡と判断した。

狐塚遺跡A区の弥生面の調査は、中世面の調査と並行して行った。中世の遺構確認面が弥生時代の包含層であったため、中世面遺構確認の段階で弥生土器が出土し始めた。土器の残存状態が非常に良好で、出土状況も特殊なため、土器の周辺には土坑墓等の遺構が存在する可能性が当初から指摘されていた。そこで、小グリッドの外周に剖面確認ベルトを残し、内部を少しづつ掘り下げる方法で包含層掘削を行った。その結果、土器の出土範囲は調査区中央の100m<sup>2</sup>ほどに限定された。しかし、弥生時代の包含層、及び遺構の覆土、確認面の判別が極めて難しく、調査は難航した。12月8日には現地説明会を行い159名の来場者を見た。その後、遺構測量や後始末等を行い、12月26日に現地調査を終了した。

図面・写真的整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。現場終了後、支援業者整理所にて、本格的な整理作業を実施した。整理作業の主な流れは、第1表のとおりとなる。なお、整理作業は同じく19年度に調査した糸魚川市田伏山崎遺跡と合わせ、3遺跡同時並行で行った。

工種	月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
狐塚遺跡	*準備工								
	調査								
	現場撤収								
	図面整理								
	遺物水洗・注記								
	遺物接合・実測								
	遺物トレース								
	遺物写真撮影								
	図版作成								
	原稿執筆								
糸魚川市田伏山崎遺跡	編集・校正								
	*準備工								
	調査								
	現場撤収								
	図面整理								
	遺物水洗・注記								
	遺物接合・実測								
	遺物トレース								
	遺物写真撮影								
	図版作成								
中世面	原稿執筆								
	編集・校正								

第1表 調査・整理の経過

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 位置と環境

今回報告する庚塚遺跡・狐塚遺跡は、平成16年に安田バイパス関係で発掘調査を行った鶴深甲遺跡と隣接している。したがって、本報告の第Ⅱ章については『新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集 鶴深甲遺跡』[高橋ほか2006]を引用し、本文・挿図・表の一部を改変・加筆した。

本遺跡の所在する阿賀野市は、新潟県の北東に位置する。平成16年4月に安田町・水原町・笠神村・京ヶ瀬村の四町村が合併して新潟県内で21番目の市として誕生した。県都新潟市から南東へ約20kmの位置にあり、東は新発田市・阿賀町、西は新潟市、南は五泉市・阿賀町、北は新潟市・新発田市にそれぞれ接する。国道49号・290号が南北に、磐越自動車道、国道460号、JR羽越本線がほぼ東西に走る。東西約18.5km、南北約15.3kmで、面積は192.7km<sup>2</sup>を有する。地目別に見ると農地が73.2km<sup>2</sup>、宅地が12.1km<sup>2</sup>、山林が64.8km<sup>2</sup>となっている。人口は47,430名、世帯数は13,572世帯である（阿賀野市2008.3.1現在）。

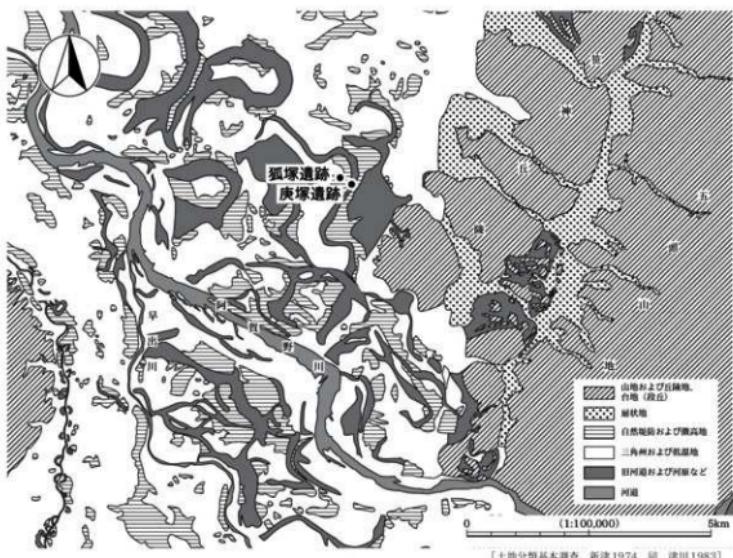
主産業は稻作を主体とした農業であるが、明治に始まった酪農も盛んである。工業では、「庵地層」を原料粘土とし、江戸時代末期から始まった瓦の生産が隆盛を極め、鈍い灰銀色の光沢を帯びる「安田瓦」として県内外に出荷されてきた。笠神丘陵北西面（平野側）に存する第四期更新世後期に形成された庵地層は疊や砂・粘土の互層で、この粘土が焼き物に適する。この粘土は笠神丘陵全体に存在し、古代以来の焼き物の原料になっていたものと考えられる。新建材等の出現によって以前ほどの活況は見られなくなつたが、県内唯一の瓦生産地であり、また、庵地焼陶器、水田暗渠用の陶管等の生産が行われている一大窯業地として、地場産業を支えていることに変わりはない。

阿賀野川は広大な冲積地である越後平野を形成する一級河川である。市の中心部及び、現集落は、阿賀野川が流路を変遷して形成した自然堤防上に立地している。

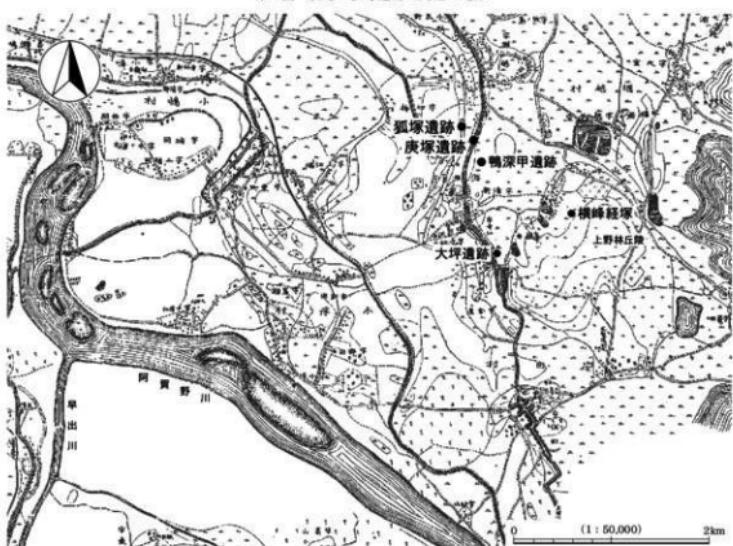
阿賀野川は、福島県会津盆地から飯豊山地と越後山脈間の山間地を越える先行川として流れ、その後、阿賀野市草水・五泉市馬下付近から平野に流れ出し、扇状地を形成する。この扇状地は村松方面から流れる早出川の扇状地と合せて複合扇状地をなし、平均勾配1,000分の2.3の緩傾斜をなす[小田ほか2002]。

この扇状地にほど重なる阿賀野市草水から稗河原場付近に至る12km程の間は川の流れが比較的急で、砂礫の広い河原を枝分かれしながら流れている。これより下流では流れは大きく蛇行しながら緩やかになり、流路も安定する。阿賀野川が流れる越後平野は、海岸線に沿って砂丘群が発達し、河川の海への出口を狭くしている。この地形のため、洪水になると河川の水が海に流出しづらく氾濫を起こしやすい。阿賀野川は氾濫を繰り返すことによって流路を変え、自然堤防や三日月湖（河跡湖）を作り、旧河道の痕跡を残してきた。庚塚・狐塚遺跡も阿賀野川により形成されたと思われる標高約11.1～12.3mの自然堤防上に位置する。

現況は水田で周辺一帯には田園が広がる。遺跡の発掘調査区は国道49号に隣接し、国道の西には旧国道に沿って寺社集落が形成される。寺社集落の西には阿賀野川の流れの一つの旧河道がある（第4図参照）。現在は水田に姿を変えているが1897年（明治30）の安田村の土地利用状況をみると（第5図参照）寺社集



第4図 庚塚・狐塚遺跡と周辺の地形



第5図 庚塚・狐塚遺跡と土地利用図

落の西には未だ水田化されていない荒蕪地も残る。このことは遺跡が営まれていた頃は川が流れ、河川交通の利用に適した地であったとも推測できる。また現在の阿賀野川は遺跡の南4km付近を流れている。

阿賀野市の地勢は東に五頭山地、笛神丘陵と村杉低地帯、西には阿賀野川沿いの段丘地形、沖積平野から成り立っている。五頭山地は菱ヶ岳断層に沿って南北に延びる標高912.5mの五頭山、標高974.2mの菱ヶ岳や標高559mの宝珠山等を主峰とする峰々が連なる。五頭山地に添うようにして西麓には、高い所で標高100m前後の山々（北から真木山、本田山、真光寺山、陣ヶ峰、福永山、久保山、細山、赤坂山ほか）が約18kmに渡って続く笛神丘陵が連なる。笛神丘陵は第三紀層の上に堆積した第四紀洪積層によって形成され【五頭山のおいたち編集委員会1984】。中新世～鮮新世と中期更新世の新発田一小出構造線の活動によって五頭山地から分離した丘陵で【高濱・野崎1981】、五頭山地から流出する河川により11の単位に分断されている。村杉低地帯は五頭山地と笛神丘陵の間に山地と並行する形で存在する。村杉低地帯には、五頭山地からの土石流により形成された扇状地が発達する【鈴木1986】。

## 2 歴史的環境

本遺跡の位置する阿賀野川右岸は、五頭山麓と笛神丘陵裾部の緩斜面や五頭山麓から流れ出す小河川が形成した谷口扇状地によって、古くから安定した地形がもたらされた。旧石器の出土を始めとして、縄文時代の遺跡・古代窯跡・中世館跡・中世窯跡・製鉄遺跡・経塚・城址・墓址・石仏等、数多くの遺跡の存在が報告されている（第6図・第2表）。

### A 弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡にはまず猫山遺跡（6）が挙げられる。1958年の調査では県内で2例目の再葬墓が発見され注目を集めた。また2001年の調査では土坑墓6基・掘立柱建物3棟・遺物1万点以上が検出され、弥生時代前期～中期にかけての遺跡であることがわかった【古澤2003】。物見山（大曲）遺跡（4）からは、土坑内から弥生中期の土器が並んで見つかっており、再葬墓の可能性が指摘された。同様に六野瀬遺跡（5）では、弥生中期の再葬墓が検出されている。ほかにも下金田遺跡（7）からは弥生初期の土器が、山下A遺跡（3）からは弥生時代中期の土器が出土している。

### B 生産遺跡

第6図をもとに周辺の遺跡を概観すると、笛神丘陵から五頭山麓にかけて南北に生産遺跡が連なることがわかる。このことは、本遺跡周辺において最も特徴的なこととして位置づけることができる。

笛神丘陵では9世紀から窯業が盛んになる。1933（昭和33）年立教大学教授中川成夫氏等によって学術調査された清見寺窯跡A遺跡（24）は、焼成部長7.2m、窯床幅1.5m、床面の傾斜約28度を測り、須恵器杯、甕等を生産している【中川ほか1962】。猿浜窯址（26）も同氏等が1972（昭和47）年に発掘調査し、食膳具や貯蔵具、窯道具が出土している【中川ほか1973】。これら笛神丘陵に存在した古代窯跡は現在10遺跡確認されているが、総称して五頭山麓古窯跡群と呼び、その胎土は粗く、石英・長石・金雲母を多く含んでいることが共通している。

焼き物の生産は中世にも継がれ、窯跡を総称して笛神古窯とよばれる。この窯跡群は石川県能登半島から珠洲焼が越後へ大量にもたらされた中世にあっても、須恵器系陶器と壺器系陶器の両方を生産した全国

的にも類例を見ない窯群である。同窯群は13世紀初頭に須恵器系陶器窯として成立し、13世紀中頃に瓷器系陶器の技術が導入されたと考えられる。須恵器系の窯として代表的なものに北沢遺跡（25）を挙げることができる。検出された5基の窯跡は、丘陵部の小さな沢の南西向き斜面に築かれ、すべて地下式窯窯である。遺物は壺と瓶が主体となり、大甕は見られない〔吉岡1994〕。背中炙窯址（28）は未発掘ではあるが灰原と考えられる部分から須恵器系の遺物が表採されている。壺が少なく、片口鉢が多い。時期的には、珠洲編年表と対比して珠洲II新期、13世紀第2四半期と捉えられている〔吉岡前掲〕。

瓷器系陶器窯としては、赤坂山中世窯跡（33）が挙げられる。五頭山麓の南端、阿賀野川に接近する西側斜面に位置し、瓷器系の陶器窯2基と木炭窯1基が検出された。器種は、壺・壺・片口鉢が主体であり、常滑焼のほか石川県加賀焼・珠洲焼や在地の陶器の影響が見られる。遺物は常滑編年の5・6a型式に相当し、窯は13世紀第3四半期に操業されたと考えられる〔小田ほか前掲〕。また、權兵衛塚窯跡（27）からは知多窯や常滑窯に近い製品が生産されていた〔中川ほか前掲〕。これら笛神古窯の操業形態は、長期にわたって築かれた珠洲焼や常滑焼等とは異なり、1群数基程度のかなり小規模な生産形態であったと考えられる。したがって、製品の流通は比較的小規模で、山形県寒河江市三条遺跡で一例出土の報告がある〔高桑1998〕以外は、阿賀北を中心に出土している。本遺跡との関連を見ると、時期の一一致は考えられるが、笛神古窯のものと見られる遺物は出土していない。

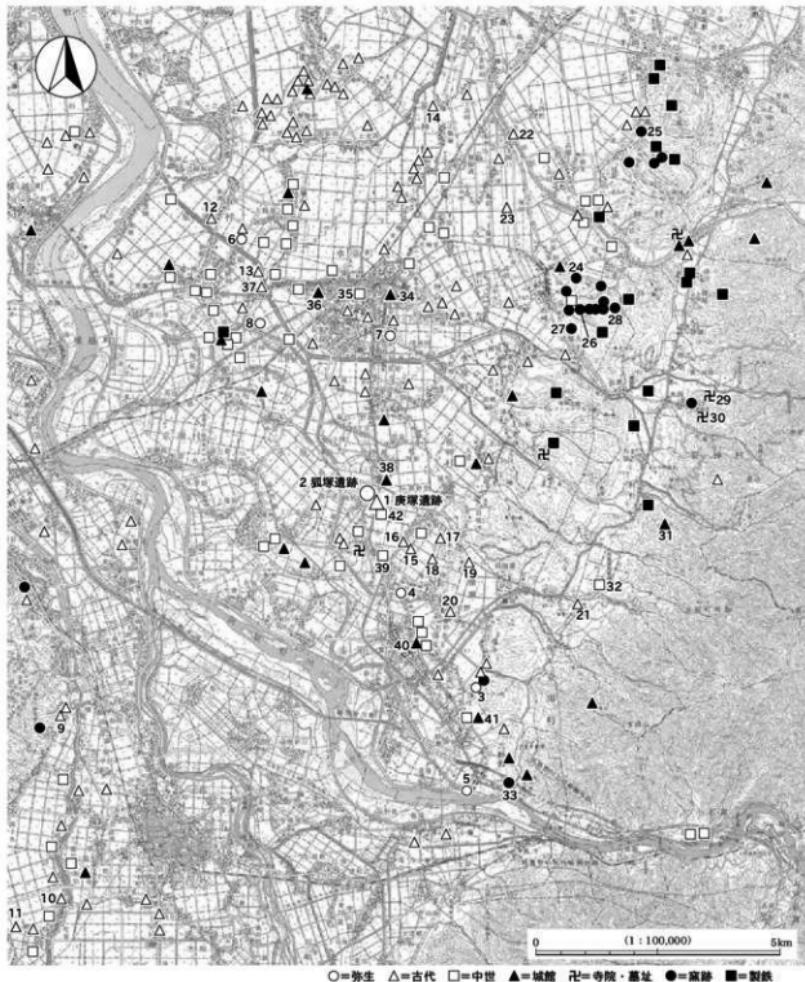
ほかの生産遺跡としては、同じ笛神丘陵で陶器窯よりも多い数の製鉄遺跡が検出されている。これらは排水場の鉄滓から発見されることが多く、時代を確定する遺物がほとんど伴わないと所属時期の不明なものが多いた。

### C 古代以降の遺跡

8世紀から9世紀の遺跡を概観する。阿賀野市の発久遺跡（23）は四足の異形横瓶が出土した遺跡として早くから注目を集めていた遺跡である。1988（昭和63）年道路改良工事に伴い調査が行われ、多量の須恵器・土師器が出土した。更に同年秋、「延暦十四」（795）年の月朔干支が書かれた暦様木簡や返抄木簡のほか、多数の墨書き器が出土した〔川上1991〕。1999（平成11）年の本発掘調査では、公に属す職業的な軍人「健兒」の宿直報告木簡が出土した。『類聚三才格』延暦十一年六月十四日太政官符には、健兒の守備する施設の一つに兵庫がある。先の暦様木簡、墨書き器の大量出土等を合わせみると国が掌握する官衙があったものと見られる〔相沢2003〕。腰廻遺跡（22）〔川上ほか2002〕は弥生時代終末から中世までの遺物が見られる複合遺跡である。古墳時代の須恵器蓋杯・高杯・提瓶等5世紀末から6世紀代の陶器系の土器がまとまって出土しており、滑石製の勾玉や手持ち勾玉も出土したことから有力者が居住していた可能性が高いと見られている。古代では「宝龜五」（774）年の紀年銘のある荷札木簡、長さ60cm以上の県下最大級の斎串も出土した。小山崎遺跡（16）では、9世紀から10世紀にかけての鉄滓、フイゴ羽口、炉壁が出土し、製鉄あるいは鍛冶を行っていたことがわかる。

12世紀後半には、阿賀野川右岸も荘園制が敷かれるようになった。後述するが、この時期白川庄と呼ばれる当地域一帯は攝閥家領であり、平維茂（余五将軍）の末裔、城四郎長茂が荘官として領有していたと考えられる。横峰経塚群（15）では、2基の経塚から陶製経筒、短刀、和鏡等のほか、墨書きも出土した。その墨書きの一つに「長口（茂か）」の文字が認められ、これは城四郎長茂を指していると推測されている。

経沢中世墓域（29）、目洗沢中世墓址（30）は五頭山麓華報寺周辺に位置する。14世紀初頭の華報寺墓



跡出土品として経沢の龍泉窯四耳壺・景德鎮白磁水注、目洗沢の正安元年銘青銅製経筒・徳治3年銘青銅製骨蔵器が新潟県有形文化財（考古資料・工芸品）に指定されている。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	庚塚	古代・中世	22	腰越	弥生・古墳・古代・中世
2	瓢塚	弥生・中世	23	発久	古代
3	山下A	弥生	24	清見寺窯跡A	古代
4	物見山（大曲）	弥生	25	北沢	中世
5	六野瀬	縄文・弥生	26	鍋沢中世窯址	中世
6	鶴山	弥生	27	權兵衛沢窯址	中世
7	下金田	弥生	28	背中糞窯址	中世
8	山口	弥生・古代・中世	29	鍋沢中世墓域	中世
9	小美山	古代	30	目洗沢中世墓址	中世
10	新保	古代	31	村杉城	中世
11	住吉田	古代	32	魂山	中世
12	村下	古代	33	赤坂山中世窯址	中世
13	大曲川端	古代	34	水原館跡	中世
14	小曾根	古代	35	七面堂	中世
15	櫛峯經塚	古代	36	下条館跡	中世
16	小山崎	古代	37	羽宜場	中世
17	上野林J	古代	38	堀越館跡	中世
18	上野林L	古代	39	大坪	中世
19	上野林C	古代	40	安田城跡	中世
20	岩野A	古代	41	六野瀬館跡	中世
21	ツバタB	古代	42	鷹深甲	古代・中世

## D 堀越館跡との関連

堀越館跡（38）は、本遺跡から北北東に約500mの地点に位置する。遺物は、2:1の割合で貿易陶磁器が国産品に優越し、白磁の碗や皿、青磁の碗・皿・盤・香炉等希少価値の高いものが多く含まれている。館として中心の時期は、14世紀後半から15世紀前半と考えられているので、本遺跡と時期的な一致が見られる。また、永正年間（1504年～1521年）の『蒲原郡白川庄等段錢帳』<sup>1)</sup>によれば、館に關係したと思われる堀越孫六の所領は、水原氏に次ぐものと記されている〔小田ほか2001〕。

位置・時期・所領からしてみて本遺跡が堀越館の勢力下の集落と考えることはできる。しかし、堀越館自体が独立した勢力であったのか、ほかの勢力（大見水原氏または大見安田氏）に屬していたのかという点についての明確な資料は確認されていない。

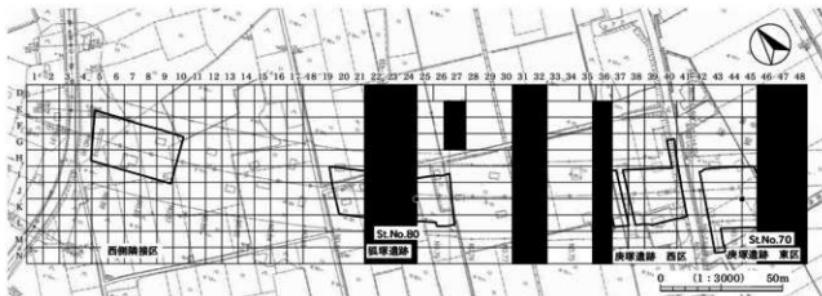
1) 段鉄は15世紀になると朝廷や幕府ではなく、守護が自己的領国に独自に賦課するようになり領国支配の重要な位置を持つようになった。各所領は、水原氏百拾陸町式段・堀越孫六百拾町、以下安田但馬守伍拾町・觀音寺町六段等の記録がある〔田村1989〕。

## 第III章 庚塚遺跡

### 1 グリッドの設定

調査区周辺の阿賀野バイパス建設予定法線は、南東一北西方向に伸びている。方位とは必ずしも一致しないため、現場作業での明確さを重視し、法線方向を優先するグリッド設定とした。また、庚塚遺跡と狐塚遺跡が近接するため、両遺跡共通のグリッド設定とすることとした。

設定は、バイパス法線センター杭No.70（国家座標X座標=200018.804、Y座標=64017.641）を基点とし、同杭No.80（X=200144.045、Y=63861.818）と結んだ直線を横軸とした。グリッド横軸は真北から51.1235度西偏する。これを基に調査範囲を覆う形で、縦横10mの方眼を組み、大グリッドとした。大グリッドの表示は、横軸にそって北西から南東方向へ算用数字、縦軸にそって北東から南西方向へアルファベット大文字を付し、两者を組み合わせて「26K」等と表した。小グリッドは、各大グリッドを縦横2m単位で25分割し、北西隅を基点に1～25までの番号を付し、大グリッドと組み合わせ「26K4」等と表した。44Kグリッドの座標値はX=199675.577、Y=64291.8926である。



第7図 グリッド設定図

### 2 基本層序

遺跡周辺はかつて自然堤防または微高地であったものと推定されるが、現代の耕地整理でほとんどが水田化されている。標高はA・B区では11.2m、C・D区では10.8mを測る。したがって周辺より高い土地は堆積土が削平されたと考えられる。調査区北東側壁、南東側壁の任意の地点で基本土層を検討し、以下のように設定した。

- I 層 褐灰色土（現水田耕作土）
- I' 層 黒褐色土（水田底土）
- II 層 黑色粘質土（古代遺物包含層）

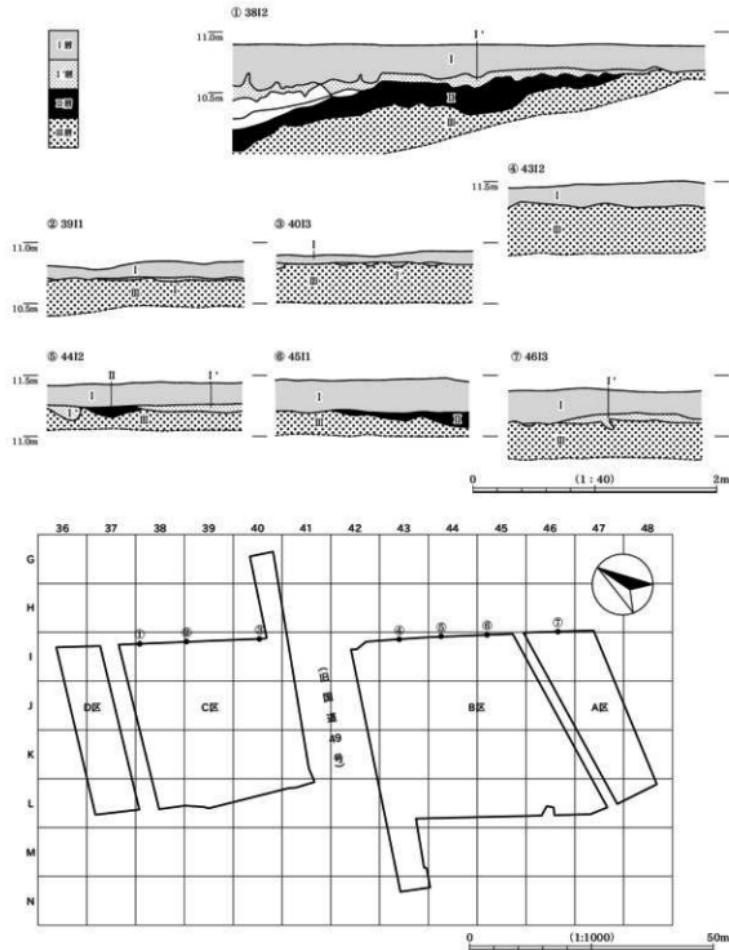
1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

0 (1 : 400) 10m

第8図 小グリッド模式図

## III層 黄褐色土～灰オリーブ粘質土(遺構確認面)

削平によりII層は残存状況が希薄で、大部分はI層直下がIII層という状況であった。A・B区では、II層は431, 451の一部にしか残っておらず、平成17年度試掘調査3T周辺が最も残存状況が良好であった。地形は北東から南西方向に微高しているが、道路(旧国道49号)を挟みC・D区では逆に北西方向に少しずつ下がっていく。II層は北西隅の38I周辺で再び検出され、調査区西端に向かって大きく落ち込む様相が見られた。これは遺構の概要で記載するが、古代以降の阿賀野川旧河道跡と考えられる。



第9図 基本層序

### 3 遺構

#### A 概要

試掘調査で古代の遺物包含層とされたII層の残存状況は非常に希薄であり、II層を覆土とする遺構はわずかしか検出されなかつた。

A・B区では、調査初期に多くの遺構が検出されたが、その大半は褐灰色粘質土を覆土とする溝やビットであった。遺構に伴う遺物は少量であったが、この覆土の遺構からは瓦やガラス、近世陶磁器等を含むものがあつた。覆土や切合い関係を整理していくと、大半の遺構が近世以降のものと判断され、中世以降と考えられる遺構は、溝状遺構3条、性格不明遺構2基であった。古代の遺構はビット2基であった。

C区もII層の残存状況は希薄であった。しかし調査区西側38~39グリッドで、II層が明確に残っている溝状遺構1条、旧河川跡1条、土坑3基を検出した。そのほか、中世以降と考えられる溝状遺構1条を検出した。

遺構名は、遺構の種類を示す略号と検出した順に付した番号の組合せで表記することとした。略号については、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝状遺構：SD、ビット・柱穴：P、不明遺構：SXとした。

#### B 遺構各説 (図版3~6・26・27)

##### 1) 溝状遺構

6条の溝状遺構を検出した。A・B区では南北方向に一直線に平行して走るSD3・14・15を検出した。C区ではSD3・14・15と粗砂を主体とする覆土と共に通性が見られるSD28と、II層の落込みが見られる旧河川跡SD40、その縁に沿うII層を覆土とするSD41の3条の溝状遺構を検出した。すべての溝状遺構の検出面はII層である。

##### SD3 (図版3・4・27)

45I~48Lグリッドにかけて、調査区をほぼ南北方向に一直線に貫くように検出した。長さ42.2m、幅2.3m、深さ0.44mと長大である。方向は南北方向に長いが、断面形はどのか所もほぼ同一の弧状であった。土師器・須恵器の小片が3点出土したが、覆土が黄褐色砂を主体とすることから中世以降の溝状遺構であると考えられる。

##### SD14 (図版3・4・26・27)

44I~46Jグリッドにかけて検出した。規模・方向性とともにSD3に類似する。長さ25.5m、幅1.75m、深さは0.23mである。断面形は袋状であるが、SD3とは違い、底部は凸が激しい。覆土は砂を多く含む褐灰色シルトを主体とする。SD3のように明るい色調の粗砂は含まない。覆土からは土師器の小片が5点出土している。方向性や規模・形状の相似性からSD3と近い時代の遺構と考えられる。

##### SD15 (図版3・4・26・27)

43I~46Kグリッドにかけて検出した。SD3・14と同様に南北方向に伸びる。長さ35.0m、幅1.6m、深さ0.18mである。断面は弧状である。覆土は粗砂主体のにびい黄褐色砂が主体であり、SD3との近似



第10図 遺構の平面形態と  
断面形態の分類

[第93集『和泉A遺跡』から転載]

性があげられる。覆土下位からは土師器、須恵器の小片が3点出土している。

SD15は46KグリッドでSX7と合流する。合流部の断面を検討した結果、明瞭な切合い関係は確認できなかった。共に黄褐色系の粗砂を主体とするので、平面状でも明瞭なプランの違いは確認できなかった。

SD15は44I11グリッド周辺で試掘3Tに切られている。同トレンチ周辺は局地的にⅡ層の残存状況が良好で、3T断面でSD15の覆土が古代の遺物包含層Ⅱ層を掘込んでいる状況が確認できた。Ⅱ層を切る状況から、SD15は中世を主体とする溝状遺構と考えられる。同様に、規模・方向性・砂主体の覆土等近似性が見られるSD3・14についても中世を主体とする溝状遺構と考えられる。

SD3・14・15の3条の溝状遺構は、形状・方向性・砂主体の覆土に共通性が見られる。調査区内で検出できた範囲では、等高線とほぼ平行に走っており、傾斜はほとんど見られない。若干南から北に微傾斜していると言えるが、溝状遺構の調査区南端（SD15はSX7との合流地点）と調査区北端の比高差は、SD3は4.5cm、SD14は5.3cm、SD15は1.6cm程度であり、途中傾斜が逆転している部分も見受けられた。なお後述のSX7はSD15よりもやや低くなっている。

#### SD28（図版5・6・26）

39K～41Kグリッドにかけて北西～南東方向に直線状に伸びる溝状遺構である。途中途切れて検出されたものの、方向性、覆土の共通性等から一本の溝状遺構と考えられる。長さ21.2m、幅0.98m～2.4m、深さ0.15m～0.64mであり、断面は弧状である。土師器、須恵器の小片が86点出土しているが、覆土がにぶい黄褐色砂が主体であることから中世以降の溝状遺構であると考えられる。周辺の地形は南西側に向かって緩やかに傾斜しており溝の方向とも一致する。しかし、溝状遺構の傾斜は一番深い地点が溝の中央部40K11グリッド辺りで、西側と東側は共に浅くなっている。SD3・14・15とは覆土で共通部分があるものの、方向性、溝状遺構の縁が不整形で底面も凹凸が目立つ点、傾斜が一方向に傾かない点で異なっている。

#### SD40（図版5・6・27）

38I～39Lグリッドにかけて、ほぼ南北方向に伸びる旧河川跡である。38I3グリッド周辺から西側に向かい、Ⅲ層が急激に落込み始める。それに伴い削平されていたⅡ層が現れ始め、Ⅲ層と平行して落ち込んでいく。調査区内で測定できる長さは34.0m、幅8.5m、深さ0.82～1.1mであるが、用水路を挟み西側のD区まで旧河川跡が延伸している事が表土掘削時に確認されているので、より大きな河川跡であることは間違いない。Ⅱ層からは9世紀後半から10世紀初頭の土師器・須恵器がわずかではあるが7点出土したことから、古代の河川跡と考えられる。黒色粘質土が主体で植物遺体等が数層にわたって堆積し、掘削は困難を極めた。そこで掘削深度の深い部分は重機掘削を、溝状遺構の外縁部や底面部は人力掘削を用いるというように調査の効率化を図った。

検出されたSD40の南部分と北部分では、38J21～24グリッドを境に傾斜の様相が異なる。まず南部分であるが、C区南西隅38Lグリッドから北方向に向かって緩やかに傾斜しており、この間の比高差は77cm程度である。38K1周辺で西方向へ一気に流路を変え、かつ傾斜が急になる。これに対し北部分では、調査区北西端37I14グリッドから南方向に緩やかに傾斜し、38J21周辺で西方向への流路変換部分に合流している。

#### SD41（図版5・6）

38I～39Kグリッドにかけて位置し、SD40の東側の川縁に沿う形で南北方向に一直線に伸びる溝状遺構である。長さ21.0m、幅1.2m、深さ0.3mであり、南端でSK30に切られている。溝状遺構の北端と

南端の比高差は12.8cmであり、緩やかに南に向かいSK30方向に傾斜している。Ic層に相当する1層から土師器・珠洲焼が各1点出土している。しかし、覆土の主体である2層はII層に相当することから、古代の遺構と考えられる。SD40の河川縁に沿って形成されていることから、旧河川跡に関わりのある機能を持たせた遺構であった可能性が考えられる。

## 2) 土 坑

### SK29 (図版6)

41K17グリッドに位置するが、開渠に切られているため平面形は半円状で検出した。幅72cm、深さ22cmである。覆土はII層の黒色土である。SD28と近接し、切合い関係は捉えられなかつたが、SD28の上層の粗砂を精査している途中で確認したため、溝より古い可能性が高い。覆土から土師器の小片が出土している。

### SK30 (図版6・27)

39K6グリッドに位置し、長軸55cm、短軸46cm、深さ31cmで平面形は楕円形の土坑である。長軸は南北方向を向いている。断面形は箱状である。覆土はII層相当の黒色シルトであり、SD41がIII層をブロック状に含むのに対してSK30はIII層を含んでおらず、平面プラン上でSD41を切ると判断できた。出土遺物は見られなかつたが、覆土から古代の遺構と推定できる。

### SK43 (図版6)

39L8グリッドに位置し、長軸92cm、短軸83cm、深さ33cm、平面形は円形の土坑である。断面形は浅い弧状をなす。覆土はII層相当の黒色粘質土である。SK30と同様に古代の遺構と考えられる。SD40に近接する形で見つかった点や、覆土、形状にSK30との共通性が見られる。

## 3) ピ ッ ト

B区で2つのピットを検出した。どちらも古代の遺物を伴い検出面はIII層である。

### P24 (図版4)

43J24グリッドに位置し、幅26cm深さ55cmの円形のピットである。覆土はにぶい黄褐色シルトを主体とする。ピット中位から土師器が出土している。掘込みが深く、III層をブロック状に含んでいる。検出面のIII層と覆土の色調が似ているため注意深く周辺を遺構確認したが、同様のピットは検出されなかつた。

### P39

42K5グリッドに位置し、幅32cm、深さ16cmの円形のピットである。覆土はP24と同様ににぶい黄褐色シルトでIII層と判別がつきにくかつたが、遺構確認中に須恵器が見つかり、そこからピットのプランを検出された。ピットは調査区西端の開渠に半分以上切られており、調査中の崩落により平面測量を行うことができなかつた。

## 4) 性格不明遺構

A・B区で、溝状遺構に伴う性格不明遺構を2基検出した。

### SX7 (図版4)

46K・47K・47Lグリッドに位置し、長軸12.7m、短軸9.8mの方形の遺構で深さは25cmである。

SD15と46K9グリッド付近で合流するが、切り合い関係は明確に把握できなかった。覆土はにぶい黄褐色砂を主体とし、土師器の小片が2点出土している。SD15と合流するが、深さはSX7の方が若干深くなる。

#### SX11（図版4）

47J21グリッドに位置する長軸2.5m、短軸1.13m、深さ15cmの遺構である。SD3に切られ、半円状で検出した。断面はほぼ梢円形である。覆土は暗灰黄色シルトや黄褐色シルトを主体とする。出土遺物は伴わないが、切り合い関係からSD3以前の中世遺構の可能性が考えられる。

## 4 遺 物（第11図・図版28）

### A 概 要

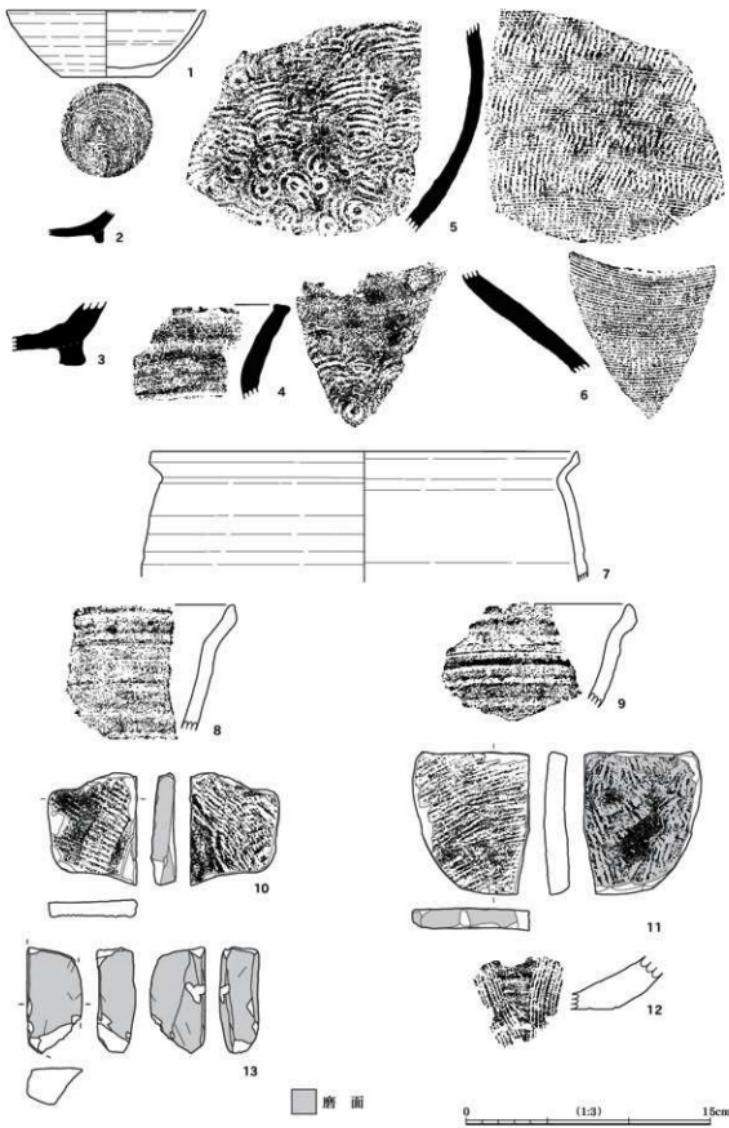
出土遺物は、平安時代の須恵器（112点）、土師器（990点）、土器片利用研削具、珠洲焼（2点）、砥石である。遺物は、44・45Iグリッドにやや集中するが、明確な遺構出土遺物は少なく、わずかに削平を免れた遺物包含層からと表土からの散発的な出土である。小片が多く、実測できたものは第11図の土器12点、砥石1点のみである。平安時代の無台杯に佐渡小泊産の須恵器が一定量含まれる（小片のため未報告）こと、報告番号1のような土師器無台碗も一定量あること等を総合すると、時期的には春日編年〔春日1999〕のVI期、9世紀後半から10世紀初頭のものが主体と考えられる。

### B 各 説

1は阿賀野川の旧流路SD40（38J18・II層）から出土した土師器の無台碗である。口径12.2cm、底径5.6cm、高さ4.1cm、底部は糸切りである。焼成は軟質で浅い黄橙色である。2は45K9・I層出土の須恵器の有台杯の底部である。底部はヘラ切り、高台は貼付けである。胎土に長石が含まれ、焼成は軟質である。3はSD40（38L）・II層出土の壺の底部である。内面の全面に自然釉が付着することから広口の壺と見られる。4は壺の口縁部である。口縁端部はわずかに肥厚する。5（P39・I層）、6（43L17・I層）は須恵器の壺の体部で同一個体の可能性がある。外面はカキメ調整後、平行線文タタキで形成している。内面の当て具痕は同心円文である。7はSD28（40K16）・4層出土の土師器長壺で、口縁端部は上につままれる。8はP24（43J24）5層出土の鍋の口縁部である。9は44I7・II層出土の鍋の口縁部である。10・11は須恵器の壺の破片を用いた「土器片利用研削具」〔藤巻1989〕である。10（34L8・I層）は断面及び表面のタタキ痕に磨痕が残る。11（42K5・I層）は断面のみに磨痕が残る。12（SD41・I層）は珠洲焼の擂鉢の底部から体部にかけての破片である。体部が膨らみをもって立上がり、鉗目は8条である。吉岡編年〔吉岡1994〕のII期（13世紀前半）に見られる要素であるが、小片のため詳細は不明である。13はSD28（40K12）1層出土の砥石である。凝灰岩製である。

## 5 ま と め

本遺跡周辺の堀越、寺社の集落は旧阿賀野川の右岸の自然堤防上に立地し、旧国道49号線はこの集落に沿って通っている（第1・6図参照）。堀越は室町期の堀越館〔小田ほか2001〕が所在することから中世に遡ることが知られている。本遺跡の調査で旧阿賀野川（又は支流）の流路（SD40）が西側で検出され、



第11図 庚塚遺跡出土遺物

流路の底には9世紀後半から10世紀初頭の土器を含む層が良好に残っていた。このことから平安時代にこの流路が存在したことが判明した。9世紀～10世紀の遺跡には自然流路から多数の遺物が出土する例<sup>1)</sup>が知られているが、庚塚遺跡では流路から出土した土器はわずかで、積極的に祭祀等で利用していた、あるいは遺物を廃棄した様子はまったく見られなかった。流路以外に平安時代の遺構もわずかなことから、集落は調査区外に存在するものと考えられる。東に隣接する鶴深甲遺跡では同時期の遺構・遺物が出土しているがわずかなことから、集落の中心は北あるいは南側に存在する可能性が高い。

1) 柏崎市・箕輪遺跡〔中澤 1998〕、胎内市・蘿ノ坪遺跡〔高橋保 2002〕同市・船戸川崎、船戸桜田遺跡〔水澤幸一ほか 2001・2002〕等である。

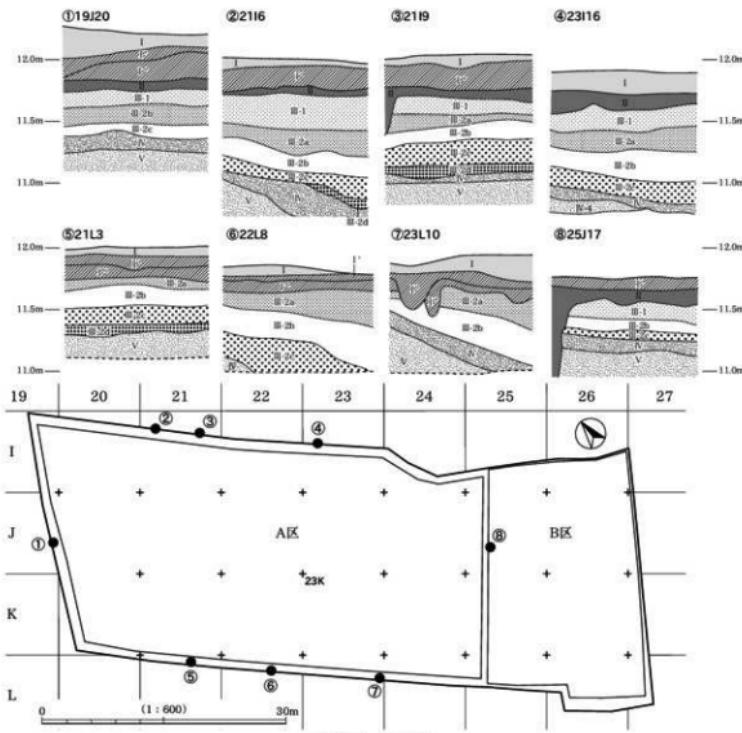
## 第IV章 狐塚遺跡

### 1 グリッドの設定

狐塚遺跡は、庚塚遺跡の西側約110mに位置し同遺跡と近接している。したがって、第III章1で示したように、グリッドは庚塚遺跡と共に設定とした。23Kグリッドの座標値はX=199807.1371、Y=64128.2037である。

### 2 基本層序

遺跡周辺は庚塚遺跡と同様、現況面は水田である。現代以降の耕地整理で微高部分は削平され、平地化されている。現地表面標高は約11.7～12.3mである。調査範囲は幅の狭い長方形となるため、調査区外周の任意の壁面で基本上層を検討し、次のように基本層序を設定した。



以下、基本層序のI～V層を説明する。

- |          |                        |
|----------|------------------------|
| I 層      | 暗褐色土（現水田耕作土）           |
| I' 層     | 褐灰色土（水田底土）             |
| I'' 層    | 灰褐色土（水田底土）             |
| II 層     | 黒褐色シルト～暗褐色シルト（中世遺物包含層） |
| III-1 層  | 黄褐色シルト（中世遺構確認面）        |
| III-2a 層 | 暗オリーブシルト               |
| III-2b 層 | 明黄褐色粘質シルト（弥生時代遺構確認面）   |
| III-2c 層 | にぶい黄色粘質シルト             |
| III-2d 層 | にぶい黄色砂質シルト             |
| IV 層     | 暗オリーブ褐色砂～黒褐色砂          |
| V 層      | 浅黄色砂～オリーブ黒色砂           |

調査当初、III-1層とIII-2a層を併せて1層とし、II層とIII層の漸移層と考えていた。しかし詳細に観察すると、III-2a層はIII-1層に比べ、潤って見えた砂質シルトが暗オリーブ色の強い傾向にあり、明確に分層することができた。また、弥生時代の遺物の出土状況をよく観察すると、上位出土の遺物の出初めはIII-2a層であることが分かった。やや砂質がかかったIII-2a層に比べ、III-2b・III-2c層は粘性の高い土質であった。III-2b層とIII-2c層を比べると、III-2b層はより明るみを増す色調で、対するIII-2c層は暗みを増す色調である。やや離れた地点から両層を眺めると、III-2bとIII-2c層の色調の違いが際立ったが、場所により明確に分層できない地点もある。III-2d層は、色調がIII-2c層と似るもの砂の混入が顕著であることから分層できた。そのIII層以下のIV層ないしV層は、粗砂層となっている。

### 3 遺構

#### A 概要

中世を主体とする上層と、弥生時代中期後半を主体とする下層の2面で遺構を検出した。

当初II層の遺物が希薄なことから、中世の遺物包含層の存在を認識できずにいたが、II層を覆土とする遺構を半蔵したところ、数基の遺構から中世遺物が出土した。中世遺構の確認面はIII-1層であるが、実際にはより明確に遺構の確認ができるIII-2b層直上で遺構検出作業を行った。その結果、掘立柱建物7棟、井戸6基、土坑17基、溝状遺構14条、性格不明遺構6基、ビット340基を検出した。20～22列グリッドを中心とする北西エリア、24～26列グリッドを中心とする南東エリアの2か所で遺構が密になる傾向にある。

対する下層は、平成18年度試掘調査時から弥生時代中期後半の遺物出土が報告されていた。しかし、弥生時代の遺物包含層と遺構確認面が明確に認識できなかったため、慎重な調査を要した。最終的に土坑11基、土器集中3か所、性格不明遺構1基を検出した。

遺構は中世の遺構、弥生時代の遺構の順に記述した。遺構名は、遺構の種類を示す略号と検出した順に付した番号の組み合わせで表記することとした。上層の遺構はNo.100から、下層の遺構はNo.1から通し番号を付した。略号については、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝状遺構：SD、ビット・柱穴：P、不明遺構：SXとした。遺構の平面形態及び断面形態の分類は、庚塚遺跡の分類（第10図）と同一である。

## B 中世遺構各説（図版7～15・29～32）

## 1) 挖立柱建物

## SB165（図版9・30）

北部の211グリッドに所在する側柱建物である。北西に1m離れSB223が存在する。またSD132と重複するが、溝の覆土を切ってピットが構築されていることからSB165の方が新しい。

北東側は調査区外に延伸する可能性がある。現況確認できる限りにおいては、桁行3間（6.76m）、梁行2間（4.24m）、面積は $28.66\text{m}^2$ である。長軸方向はN-67°-Wを示し、やや北西一南東方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の南側で西から2.16・2.48・2.12mの間隔となる。北側は西から2.22・2.46・不明となるが、桁行南側とほぼ同間隔になると予想される。梁行柱筋は西側で南から2.02・2.22mの間隔となりやや異なる。東側は1間目のピットが開渠に切られ検出できないため、柱間は明らかではない。

柱穴の掘形はしっかりととした掘り込みを持ち、径22～36cmの円形・楕円形で、確認面からの深さ0.27～0.51mである。柱穴の掘形覆土は暗褐色シルト、または灰黄褐色シルトで構成される。遺物は出土していない。

## SB194（図版13・30）

中央部の24～25J～Kグリッドに所在する側柱建物である。南に1.5m離れSB318、西に0.5m離れSB208が存在する。また、ほぼ中央でSE176、南東隅でSE193と重複するが、新旧関係は明らかでない。桁行3間（7.50m）、梁行2間（3.90m）、面積は $28.85\text{m}^2$ である。長軸方向はN-54°-Wを示し、やや北西一南東方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の北側で2.50mの等間隔、南側で東から2.4・2.6・2.5mとほぼ等間隔となる。梁行柱筋は西側で北から1.95mの等間隔となるものの、東側は1間目の柱穴が検出されず明らかでない。柱穴の掘形はしっかりととした掘込みを持ち、径36～66cmの円形・楕円形で、確認面からの深さ35～61cmである。柱穴の掘形覆土は暗褐色砂質シルト、または暗褐色砂質シルトと黄褐色砂の混合土で構成され、いずれも炭化粒を少量含む。遺物はP215覆土上層から珠洲焼の擂鉢（6）が出土している。時期は出土遺物から14世紀代と推定される。

なお、桁行の南側柱筋にはピットが多く認められる。ほかの建物との重複、あるいは改築も想定したが明らかでない。

## SB208（図版13・30）

中央部の23・24Kグリッドに所在する側柱建物である。東に0.5m離れSB194、南東に2.5m離れSB318が存在する。また、東側でSD180と重複するが、新旧関係は明らかでない。桁行3間（7.20m）、梁行2間（3.50～4.00m）、面積は $27.24\text{m}^2$ である。長軸方向はN-64°-Wを示し、やや北西一南東方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の北側で東から2.5・2.2・2.5m、南側で東から2.5・2.3・2.4mと2間目がやや短くなるものの、1・3間目はほぼ等間隔となる。梁行柱筋は東側で北から2.0mの等間隔となるものの、西側は1間目の柱穴が検出されず明らかでない。柱穴の掘形はしっかりととした掘込みを持ち、径40～110cmの円形・楕円形・不整形で、確認面からの深さ30～70cmである。柱穴の掘形覆土は暗褐色砂質シルトを主体とし、いずれも炭化粒を少量含む。遺物は出土していない。

なお、東側で検出されたSD180は長さも梁行とほぼ同じく、長軸方向も梁行方向と一致する。更に溝内部から4基のピットが認められた。布掘りを想定したが、明らかではなかった。また、P210・341・342はピット並びが梁行方向と一致し、桁行の東側1間目のほぼ中間に位置する。したがって、SB208

となんらかの関係があるものと思われる。

#### SB222 (図版11・30)

中央部やや北西寄りの22J、23Jグリッドに所在する側柱建物である。

桁行3間(7.50~7.60m)、梁行1間(3.94~4.02m)、面積は30.55m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-64°-Wを示し、やや北西-南東方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の北側で西から2.40・2.78・2.42m、南側で西から2.32・2.78・2.40mと2間目がやや長く、1・3間目はほぼ等間隔となる。

柱穴の掘形はしっかりと掘り込みを持ち、径26~41cmの円形・楕円形であり、確認面からの深さ36~47cmである。柱穴の覆土は暗褐色シルトと黄褐色シルトの混合土で構成される。遺物は出土していない。

#### SB223 (図版9・31)

北部の20Iグリッドに所在する。南東に1m離れSB165が存在する。また、SD133・132・145とは重複する。SD132・133の覆土を切ってP159が構築されており、新旧関係は(新)SB223>SD133>SD132(旧)と判断できる。SD145とは直接切合い関係が見られないので、新旧関係は不明である。しかし、全体的な傾向として溝の覆土を切ってピットが構築されるため、(新)ピット>溝(旧)という新旧関係が推定される。

本遺構は調査区東側に延伸すると見られ、全体は明らかではない。現況で確認できる範囲では、桁行3間(7.96m)、梁行2間(3.94m)の側柱建物と推定され、面積は24.26m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-59°-Wを示し、北西-南東方向を向く。

柱間寸法は桁行柱筋の南側で西から2.16・3.32・2.48mの間隔で、2間目が長く1・3間目が短くなる。北側は調査区外のため確認できない。梁行柱筋は西側で南から1.62・2.32mで大きく異なる。東側は1間目のみ確認でき1.72mである。

柱穴の掘形はしっかりと掘り込みを持ち、径22~52cmの円形・楕円形で確認面からの深さは21~49cmである。柱穴の覆土は暗褐色シルトと褐色砂で構成される。遺物は出土していない。

#### SB225 (図版9・31)

北西部寄りの20Jグリッドに所在する総柱建物である。桁行2間(5.08m)、梁行2間(3.48m)、面積は17.68m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-59°-Wを示し、やや北西-南東方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の北側で西から2.52・2.56m、南側で西から2.44・2.54mとほぼ等間隔となる。梁行柱筋は西側で1.74mの等間隔、東側で南から1.82・1.52mとやや異なる。

柱穴の掘形はしっかりと掘り込みを持ち、径20~32cmの円形・楕円形で、確認面からの深さ28~49cmである。柱穴の覆土は暗褐色シルトや灰黄褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

#### SB318 (図版13・31)

南東部の25J、24K・25Kグリッドに所在する側柱建物である。北に1m離れSB194が、西に3m離れSB208が存在する。また、北にSX174・SE193、南にSK239が隣接する。

SK240と重複するが新旧関係は不明である。桁行4間(10.97~11.06m)、梁行2間(4.40~4.44m)、面積は48.16m<sup>2</sup>である。長軸方向はN-79°-Eを示し、ほぼ東西方向を向く。柱間寸法は桁行柱筋の北側で西から1.67・2.87・3.46・2.97m、南側で西から1.54・3.00・3.41・3.11mとそれぞれの柱間は大きく異なるものの、北側・南側のピットはほぼ対応する。梁行柱筋は西側で南から2.12・2.28m、東側で南から2.23・2.21mとなる。

柱穴の掘形はしっかりと掘り込みを持ち、径20～55cmの円形・楕円形で、確認面からの深さは26～62cmである。柱穴の覆土は暗褐色シルトを主体とし、黄褐色シルトを少量含む。

## 2) 井 戸

### SE173 (図版11・31)

中央部の24J7～9・12～14グリッドで検出した井戸側・水溜を伴う井戸である。掘形は不整円形で、径2.90～2.95m、深さ1.84mである。底面はほぼ平坦、側壁はほぼ垂直に立上がるが、西側にテラス状の段を持つ。覆土・埋土は12層に識別され、土層状況から井戸側は南東隅に寄せて据えられている。井戸側板は腐食して遺存しないが、掘形埋土との境に明確な土質の違いが見られる。また、四隅に打ち込まれた杭の一部が確認できることから、井戸側は一辺75cm程度の方形と推定できる。水溜には腐食が進んでいるものの径50cm程度の円形曲物が据えられている。遺物は前述の杭、水溜に使用された円形曲物のほか、覆土上層から珠洲焼甕(4)、古瀬戸瓶子(7)が一緒に出土している。井戸廃棄に伴い、埋納されたものと推定される。時期は出土遺物から13世紀代以降と推定される。

### SE176 (図版11・31)

中央部の24J24・25、24K4・5グリッドで検出した素掘りの井戸である。SB194のはば中央で重複するが、新旧関係は明らかでない。掘形は不整円形で、径1.66～1.96m、深さは1.30mである。底面は緩く崖み、側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側にテラス状の段を持つ。覆土は10層に識別され、下層は砂、上層は砂質シルトを主体とし、上層と下層の境(覆土5・6層)には炭化粒が多く含む。遺物は出土していない。

### SE192 (図版11)

21K24・25、21L4・5グリッドで検出した。遺構南側の一部分が開渠に切られるが、幅1.2mの円形である。断面形はおむねV字状であるが、東壁中位に階段状の崖みが見られる。深さは0.92mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、暗褐色シルト、褐色シルト、褐色砂を含む。覆土から土師器片が1点出土している。

### SE193 (図版15・32)

南東部の25J21・22、25K1・2グリッドで検出した素掘りの井戸である。SX174と重複し、上部はSX174に破壊されていることから、これより古くなる。掘形はほぼ円形で、径1.05m、深さはSX174底面から1.37mである。底面は緩く崖み、側壁はほぼ垂直に立上がる。覆土は2層に識別され、下層は灰色砂、上層は暗褐色砂質シルトと黄橙色砂で、土層状況から短期間に埋戻されたことがわかる。遺物は出土していない。

なお、SX174の覆土とは全く異なるため、関連性は認められない。

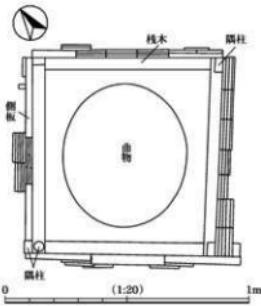
### SE236 (図版15・32)

26J17グリッドで検出した円形の井戸である。直径は2.3mである。検出された井戸の中で最も井戸側が良好な状態で残存していた。湧水によって周囲の土の崩落の危険性が高く埋土の記録は出来なかつた。深さは約2.3mである。

埋土の中位層から古瀬戸と見られる平碗の破片が2点出土している。掘形の北側に偏って方形の井戸側と水溜の円形曲物が出土している。各部材の計測値は第3表参照。井戸側は上部が腐食し全体の長さは不明だが、最も高いところで1.17m以上はあったと考えられる。側板は長さ97.5～117.7cm、幅18.0～

33.0cm、厚さ2.2~4.1cmまでの厚い1枚板を並べるものと、長さ48.4cm~82.3cm、幅10.3cm~13.0cm、厚さ0.2~1.0cmの薄い板を2~12枚重ねているものがある。薄板を重ねたものには、南東側1・2のように間に小片を挟んで隙間を埋めているものもある。桟木は3段検出したが、最上段の桟木は腐食が著しい。最も残りのよい南東の桟木が長さ76cmあり、2段、3段目よりやや小さい。2段目の桟木は約80cm四方である。3段目の桟木は縦板の下から45cm前後、2段目の桟木は90cm前後の位置に痕跡が残る。桟木の2段目と3段目の間に長さ30cm前後の隅柱を入れている。西と南の外側にも長さ30cm前後の隅柱が入っている。水溜の曲物は長径58cm、短径50.8cmとやや梢円形で、深さ31.6cmである。

出土した古瀬戸（8・9）の年代から井戸の年代は14世紀後半~15世紀前半世纪ころのものと見られる。SD228、SD233より新しい井戸である。



第13図 SE236 井戸側・水溜模式図

出土位置	部材名	番号	長さ	幅	厚さ	備考
北東・内	側板	1	101.6	18.0	3.0	1枚板、上部腐食、厚み不均等。
北東・内	側板	2	72.4	12.3	0.4	縫合12枚組、上部腐食。
北東・内	側板	3	97.5	21.8	2.2	1枚板、上部腐食、下から51.4cmに両端に切り込みあり。
北東・外	側板	4	48.4	12.6	0.4	縫合2枚組、上部腐食。
北・内	側板	5	34.6	4.7	2.9	角材。
北・西・内	側板	1	110.6	35.0	3.3	1枚板、上部腐食、下から42.5cm、90.0cm位置に桟木の痕跡あり。節穴にNo.8の角材入る。
北・西・内	側板	2	72.6	12.2	0.2	縫合2枚組、上部腐食。
北・西・外	側板	3	111.6	23.0	2.9	1枚板、上部腐食、下から46.5cm位置に桟木の痕跡あり。節穴にNo.8の角材入る。厚み不均等。
北・西・外	側板	4	59.6	11.4	0.5	縫合2枚組、上部腐食。
北・西・外	側板	5	50.6	11.8	0.6	縫合2枚組、上部腐食。
北・西・外	側板	6	45.8	10.2	0.4	縫合3枚組、上部腐食。
北・西・外	側板	7	57.0	11.6	0.7	縫合2枚組、上部腐食。
北・西・外	側板	8	113.3	1.9	1.6	角材、側板か、No.1の板の節穴に入っていた。
西・内	隅柱	31.8	4.6	—	丸柱。	
西・外	隅柱	32.4	5.2	2.7	角材。	
西南・内	側板	1	112.0	28.0	2.8	1枚板、上部腐食、下から43.0cm位置に桟木跡あり。
西南・内	側板	2	117.7	30.0	4.1	1枚板、上部腐食、下から46.6cm位置に桟木跡あり。
西南・内	側板	3	114.3	31.3	3.3	1枚板、上部腐食。
西南・外	側板	4	74.0	13.0	1.0	縫合3枚組、上部腐食。
西南・外	側板	5	75.6	12.0	1.0	縫合2枚組、上部腐食。
南・内	隅柱	33.2	4.2	2.7	角材。	
南・外	隅柱	34.1	4.8	3.6	角材。	
南東・外	側板	1	59.6	12.0	0.3	縫合12枚組、上部腐食、小穴4枚。
南東・外	側板	2	82.3	10.2	0.4	縫合7枚組、上部腐食、小穴8枚。
南東・外	側板	3	73.2	11.5	0.4	縫合10枚組、上部腐食。
南東・内	側板	4	30.3	1.5	—	直溝1.5cmの側面の付いた桟木。埋戻しの儀式に使った桟木（梅か）の可能性もあり。
東・内	隅柱	33.6	5.7	3.4	角材。	
北・東・1段目	桟木凸	68.0	5.6	4.3	西側腐食。	
北・東・2段目	桟木凸	78.0	5.8	5.1	—	
北・東・3段目	桟木凸	76.8	7.4	5.6	ねじれあり。	
北・東・1段目	桟木凹	73.4	5.8	2.5	両端腐食。	
北・東・2段目	桟木凹	79.7	7.4	4.6	—	
北・東・3段目	桟木凹	80.8	6.4	4.5	—	
西・東・1段目	桟木凸	69.6	4.8	4.2	一端腐食。	
西・東・2段目	桟木凸	74.8	7.8	3.8	—	
西・東・3段目	桟木凸	75.8	7.8	5.6	—	
南東・1段目	桟木凹	76.0	7.4	3.0	状態良好。	
南東・2段目	桟木凹	80.6	7.6	4.5	—	
南東・3段目	桟木凹	79.6	8.3	4.6	—	
水溜	曲物	58.0	50.8	51.2	—	

第3表 SE236 井戸側部材計測値

法量の単位はcmである。

## 3) 土 坑

## SK101 (図版9)

2018グリッドで検出した。平面形は長軸0.71m、短軸0.52mの梢円形である。断面形は台形状で、深さは0.62mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルト、褐灰色細砂を含む。覆土から鉄製品1点が出土している。

## SK127 (図版8)

19I20グリッドで検出した。平面形は直径0.7mの円形である。断面形は半円状で深さは0.28mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色砂、褐色砂等を含む。SD133と重複し、これを切っている。

## SK134 (図版8)

20I11・16グリッドで検出した。平面形は長軸0.74m、短軸0.64mの梢円形である。断面形はやや不整形な弧状で、深さは0.11mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルト、褐灰色細砂等を含む。SD133と重複し、これを切っている。覆土から土師器小片2点が出土している。

## SK163 (図版11)

中央部の23I11・16・17グリッドで検出した。東0.4mにSK220が存在する。平面形は不整円形であり、径1.37～1.58m、深さ0.78mである。底面は南側が緩く窪むため、北側はテラス状にやや高くなる。側壁は南壁が急傾斜に、北壁は緩傾斜となり、断面形は不整な弧状を示す。覆土は暗褐色砂質シルトと黄橙色砂で構成され、3層に識別される。堆積状況から自然堆積と考えられる。遺物は底面から被熱礫を含む礫5点が出土している。なお、底面が被熱された痕跡は認められなかった。

## SK172 (図版12)

中央部の24J15・20、15J11・16グリッドで検出した。南西約1mにSB194が存在する。また、南西側にピット2基と重複するが、新旧関係は明らかでない。平面形はほぼ円形で、径1.44～1.70m、深さ8cmを測る。底面はやや凹凸があるもののおおむね平坦で、側壁は緩傾斜に立ち上がる。断面形は弧状を呈する。覆土は暗褐色シルトに炭化粒が少量混入する上に単層である。遺物は出土していない。

## SK175 (図版11)

中央部の24J16・17・21・22グリッドで検出した。南1.4mにSB194が、西0.3mにSD179が存在する。平面形は不整円形で、径2.14～2.20m、深さ0.54mである。底面・側壁は凹凸が激しく一定しない。断面形は不整形である。覆土は暗褐色砂質シルトと黄橙色砂で構成され、3層に識別される。堆積状況を見る限り、倒木痕の可能性を考えられる。遺物は出土していない。

## SK189 (図版11)

21K25グリッドで検出した。平面形は長軸0.55m、短軸0.41mの梢円形である。断面形は弧状で、深さは0.14mである。覆土は暗褐色シルトを主体とし、焼土ブロックや炭化材を多量に含む。また細かい焼骨片も含む。遺物は焼骨片以外、出土していない。

## SK220 (図版10)

23I12グリッドで検出した。北東側は開渠に切られているため全体の平面形は不明であるが、ほぼ梢円形と推定され、実測できる範囲の長軸は1.20m、短軸0.58mである。断面形は台形状で、深さは0.34mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトや褐色シルトを含む。遺物は出土

していない。

#### SK235 (図版15)

26K1・2・6・7グリッドで検出した。平面形は長軸1.5m、短軸0.97mの楕円形である。断面形は弧状で、深さは0.21mである。覆土は暗褐色シルトを主体とし、褐色シルト、黄褐色シルトを含む。覆土から磁石が出土している。

#### SK237 (図版15)

26L2・3グリッドで検出した。平面形は長軸2.08m、短軸1.09mの楕円形である。断面形は半円状で、深さは0.54mである。覆土は暗褐色シルトを主体とする。遺物は覆土1層から珠洲焼1点、須恵器1点が出土している。

#### SK238 (図版15)

26K14・19グリッドで検出した。平面形は長軸1.92m、短軸1.52mの楕円形である。断面形は箱状で深さは0.32mである。覆土は暗褐色シルトを主体とする。遺物は出土していない。

#### SK239 (図版15)

25K14・15・19・20、26K11・16グリッドで検出した。平面形は長軸3.6m、短軸2.4mの方形である。断面形は浅い箱状で、深さは0.16mである。覆土は黒褐色シルトの単層である。竪穴住居等の可能性も検討したが、柱穴の可能性のあるピットは検出できなかった。覆土から珠洲焼小片1点が出土している。

#### SK240 (図版15)

25J24グリッドで検出した。平面形は長軸1.77m、短軸1.36mの不整形な楕円形である。断面形は階段状で深さは0.14～0.62mである。覆土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色シルトを含む。遺物は出土していない。

#### SK294 (図版15)

26L7グリッドで検出した。平面形は長軸1.03m、短軸0.92mの楕円形である。断面形は漏斗状で深さは0.7mである。覆土は黒褐色シルトを主体とし、黄褐色シルト、灰褐色粘土等を含む。遺物は出土していない。

### 4) 溝状遺構

#### SD131 (図版8)

19I・20Iグリッドで検出した。平面形は長さ7.65m、幅0.78mの溝状遺構で、北西から南東方向に直線的に伸びる。後述のSD132・133・145とほぼ方向を同じくする。断面形は弧状で深さは0.18mである。覆土は黒褐色砂を主体とし、褐色砂を含む。覆土から土師器小片が20点ほど出土している。

#### SD132・133 (図版8・9・32)

SD132は19I・20I・21I・22Iグリッドで検出した。溝の両端が調査時の開渠で切られるため全長は不明であるが、検出された範囲は、長さ25.2m、幅1.47mである。溝方向は北西から南東方向に直線的に伸びる。断面形は半円状で、深さは0.50mである。覆土は暗褐色シルトを主体とし、にぶい褐色砂、黄褐色砂等を含む。覆土から土師器小片が8点出土している。

SD133は19I・20Iグリッドで検出した、長さ12m、幅0.68mの溝である。SD132の北側に平行して直線状に走り、SD132を切っている。断面形は半円状で深さは0.38mである。覆土は黒褐色シルトを

主体とし、暗褐色砂、にぶい褐色砂、黄褐色砂を含む。遺物は覆土から珠洲焼1点、土師器小片2点が出土している。

この2つの溝状造構は幅や深さが異なるものの、方向や断面形、覆土に共通性が見られる。SD132はSD133に先行し、新旧関係が見られるが、両造構の時期差はそれほどないものと考えられる。

またSD132・133の覆土上層でビットを検出したことから、溝が埋まりきってからビット群が形成されたものと考えられる。したがって、SD132はSB165・223より古く、SD133はSB223より古くなるものと判断した。

#### SD145 (図版8)

19I・20Iグリッドで検出した。長さ4.3m、幅0.68mの溝で、SD133等とほぼ同方向に直線的に伸びる。断面形は半円形で、深さは0.21mである。覆土は暗褐色シルトを主体とし褐色砂を含む。遺物は出土していない。

#### SD171 (図版10・11)

中央部の22L～J、23・24J、24Iグリッドで検出した。東から西に調査区を斜めに横断する溝状造構である。長さ33.2m、幅約0.6m、深さ約0.4mである。断面形は弧状を呈する。覆土は暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄橙色砂の3層に識別され、炭化粒がやや多く含まれる。遺物は出土していない。

#### SD177 (図版10・12)

中央部の23・24Jグリッドで検出した。SD179と交差し、北約2mにSD178が存在する。方向はN-51°-Wを示し、SD178とほぼ同方向となる。幅・深さに凹凸があり、一定しないものの長さ5.4m、幅約0.3～0.7m、深さ約0.1m前後である。断面形は不整形を呈する。覆土は暗褐色シルトと黄橙色砂のブロック状混合土の単層で、SD178・179と同じである。遺物は出土していない。

#### SD178 (図版10)

中央部の23Jグリッドで検出した。南約1～2mにSD177・179が存在する。方向はやや蛇行気味であるもののN-47°-Wを示し、SD177とほぼ同方向となる。深さに凹凸があり、一定しないものの長さ4.8m、幅約0.4m、深さ約0.1m前後である。断面形は不整形である。覆土は暗褐色シルトと黄橙色砂のブロック状混合土の単層で、SD177・179と同じである。遺物は出土していない。

#### SD179 (図版12)

中央部の23J・Kグリッドで検出した。SD177と交差し、北約1mにSD179が存在する。方向はN-63°-Eを示し、SD177とは66°のズレとなる。深さに凹凸があり、一定しないものの長さ2.9m、幅約0.4m、深さ約0.1m前後である。断面形は不整形である。覆土は暗褐色シルトと黄橙色砂のブロック状混合土の単層で、SD177・178と同じである。遺物は出土していない。

なお、SD177～179は形状・覆土から同一の性格を持つものと考えられ、覆土の堆積状況は搅乱状を示す。検出範囲が狭いことから断定はできないが、耕作溝等の痕跡を想定している。

#### SD180 (図版12)

中央部の24Kグリッドで検出した。SB208の梁行東側の柱筋の内側に沿って存在するが、新旧関係は明らかでない。方向はN-27°-Eを示し、SB208の梁行東側の柱筋と一致する。また溝内部に4基のビットが認められる。長さ5.2m、幅約0.3～0.6m、深さ約0.15m前後である。断面形は弧状である。覆土は暗褐色シルトと黄橙色砂のブロック状混合土の単層である。遺物は出土していない。

なお、SB208の梁行東側の柱筋と長さ・方向もほぼ同じことや4基のビットが認められたことから、

布掘を想定したが明らかではない。

**SD227** (図版15)

26J・26Gグリッドで検出した。長さ5.0m、幅0.75mの溝で、南北方向に直線的に伸びる。西隣にはほぼ同形状のSD234が平行する。断面形は弧状で、深さは0.14mである。覆土は暗褐色シルトと黄褐色シルトの2層に識別される。遺物は出土していない。

**SD228** (図版15)

25J・26Jグリッドで検出した。L字型を成し、南北方向に6.8m、東西方向に3.6mの溝である。断面形は弧状で、深さは0.15mである。覆土は褐色砂と黄色砂の2層に識別される。重複関係は25JグリッドでSD290を切り、26JグリッドでSE236に切られている。遺物は、覆土から土師器小片1点が出土している。

**SD233** (図版15)

26Jグリッドで検出した。長さ2.1m、幅0.5mの溝で、東西方向に伸びる。断面形は箱状で、深さは0.18mである。覆土は暗褐色シルトの単層である。SE236と重複し、これに切られている。遺物は出土していない。

**SD234** (図版15)

26Jグリッドで検出した。長さ5.4m、幅0.5mの溝で南北方向に伸びる。東隣に位置するSD227と平行する。また約4.5m西側に位置するSD228とも平行関係にある。断面形は弧状で深さは0.11mである。覆土は暗褐色シルトと黄褐色シルトの2層に識別される。26J13グリッドでSD233と接続するが、両者は交わらない状態で検出された。覆土に共通性が見られるが、断面形状はSD233が浅い弧状でやや幅が広いのに対し、SD233は溝底面から側面にかけての立上がりが急な箱状であり、共通性が見られない。したがって両者を別々の溝として判断した。

**SD290** (図版15)

25J・Jグリッドで検出したL字型の溝である。南北方向に1.82m、東西方向に1.78m、幅は0.3～0.54mである。断面形は半円状で、深さは0.17mである。覆土は暗褐色シルトの単層である。SD228と同様のL字型が特徴だが、25J5グリッドでSD228に切られている。遺物は覆土から土師器小片1点が出土している。

## 5) 性格不明遺構

**SX174** (図版15・32)

南東部の25J21・22、25K1・2グリッドで検出し、SB194・SE193と重複する。SB194との新旧関係は明らかでないが、SE193の上部に構築されている。したがって、SE193より新しい。平面形は不整形の竪穴状遺構であり、長さ3.10m、幅2.00m、深さ約0.2mである。底面はほぼ平坦で、側壁はやや緩傾斜に立ち上がり、断面形は台形状である。覆土は極暗褐色シルト、黒褐色砂質シルト、極暗褐色シルトと黄橙色砂の混合土の3層に識別される。堆積状況から自然堆積と推定される。なお、SE193とは覆土の違いから関連性はないものと思われる。遺物は出土していない。

## C 弥生時代遺構各説

### 1) 遺構検出状況

#### a 調査の概要

平成18年度の試掘報告では、弥生時代中期後半の土器が出土し、その一括した出土状況が注目された。しかし、遺物包含層は明確に認識できなかった。本発掘調査開始にあたり、調査区の外周開闢部分の壁面や調査区中央に設定した層位確認トレンチで遺物包含層及び遺構確認面の把握に努めたが、基本層序Ⅲ層の分層及びその解釈が難しく、包含層及び確認面の把握に時間を要した。

そのため小グリッド単位の境に厚さ15cmほどの層位確認ベルトを残しながら、小グリッド内を面的に少しずつ下げ、慎重に調査を進めることとした。その結果、遺物が出土し始める層位はⅢ-2a層下部、あるいはⅢ-2b層直上であり、出土エリアは21J・22Jグリッドを中心とする10m四方に集中することが分かった。

出土した土器は大半の部位が残存し、状態の良好なものは多少の割れを伴うもののほとんど欠損が見られなかった。これら土器が出土した地点の周囲は遺構が存在する可能性が極めて高いと判断し、土器出土地点を中心に層位観察ベルトやトレントを設定し、調査を進めた。しかし、土器出土地点と周辺の土質や土色に大きな違いは確認できず、遺構検出に多くの時間を費やすこととなった。最終的に、土坑11基、性格不明遺構1基、土器集中3か所を検出した。遺構プランを検出できなかったものは土器集中区として捉え、土器の出土状況を記録した。また、土器の伴わない遺構は検出できなかった。



第14図 包含層掘削作業

#### b 遺構検出状況の分類

遺構の検出状況を整理すると第15図のようになる。

		基本層序	A類	B類	C類
検出方法	Ⅲ-2a層	暗オリーブシルト			
	Ⅲ-2b層	明黄褐色～にぶい黄色 粘質シルト			
	Ⅲ-2c層	にぶい黄色砂質シルト			
	Ⅳ・V層	粗砂			
色調			・復土と確認面の色調に大きな差異なし。	・遺構覆土は濁りがあり、暗い色調。 ・確認面Ⅲ-2b層は明るい色調。	・復土と確認面の色調に大きな差異なし。
土質			・遺構覆土に砂粒子を顯著に含む。	・遺構覆土は削るとさらさらするシルト。 ・確認面は粘性高い。	・遺構覆土は削るとさらさらするシルト。 ・確認面は粘性高い。
遺構		SK5・6・32 SK2a'・V層まで掘込ます)	SK11・25・26・29	SK7・12・14・30	

第15図 弥生時代遺構の検出方法分類

**A類**

遺構覆土に砂を含む点が特徴である。色調は確認面であるIII-2b層と大差はない。砂を顕著に含むため比較的平面プラン検出は容易であり、トレチチを入れ遺構断面を観察すると、遺構はIII-2b・c層を貫通し、粗砂層であるIV・V層を掘込んでいる様子が確認できた。基本層序III-2a～III-2c層は、どの地点の層位確認ベルトでも砂を含む様子は見られない。遺構覆土に砂の混入が顕著なのは、土坑を掘る際に砂層のIV・V層を掘込み、埋め戻す際に掘上げた砂が覆土に混入したものと推定される。これらの遺構はSK5・6・32、SX2である。遺構検出が容易であったため、切合い関係のあるSK32を除き、調査前半に遺構掘削を完了した。

**B類**

遺構覆土が濁った色調を呈す点が特徴である。土器出土地点を中心に周囲を広く精査すると、土器周辺はややオリーブ色がかった暗い色調であることが観察された。この色調は、III-2a層に類似するかあるいはこれよりもやや薄いものであった。また土質は、両刃鎌で薄く削っていくとさらさらとした感触のシルト質であった。これに対しIII-2b層はより明るい明黄褐色であり、土質は両刃鎌の刃に引っ掛かりが感じられる相対的に粘性の高いものであった。これを手掛けりに検出した遺構は、SK11・25・26・29である。

A類に比べ、遺構覆土の色調や土質の違いが微妙であり、一度プランを引き数日おいた後に再検討すると、微妙に細部が食い違うといった状況も見られ、遺構プラン確定にはより多くの時間を要した。断面より平面の方が、また晴れの日より降雨翌日の土が湿り気を帯びた日の方が、より明確に遺構検出できた。SK26・29は調査中盤に遺構掘削を完了、他遺構との切合い関係を検討したSK25や、平面で確認できる部分が少なく層位確認ベルトでの遺構検出を主体としたSK11は、終盤までかかった。

**C類**

遺構覆土と基本土層との対比で遺構検出を行った。遺構プラン内と想定される土器集中の部分と、その周囲との土質や色調に大きな違いが認められず、遺構検出により多くの時間を費やした。そのため層位確認ベルトを元に基本層序を丹念に追いかけて直すこととした。遺構が土器集中地点を中心に存在するとすれば、周辺部から土器集中地点に向かい基本層序を追いかけていくと、いずれかの地点で乱れが生じるであろうと推測したからである。しかし、識別は困難であり、厚さ15cmで設定したベルトが5cmほどの薄さになるほど観察を繰り返した。下層が砂層であるため、設定ベルトが崩壊することもあった。観察の結果、相対的に粘性の高い基本層序III-2b・c層が、土器出土地点に近づくとよりさらさらとしたシルト質に変わっていることが確認された。これをもとに各ベルトで遺



第16図 SK12検出状況

構断面形を確認し、ベルト間をつなぐ形で平面プランを推定していった。

このタイプの遺構はSK7・14・12・30であり、期間終盤に調査を終了した。参考までに第16図SK12遺構検出状況を掲載した。上の写真は、遺構プランを入れない状態のものであり、下は遺構プランを引いた状態である。色調では全くといっていいほど判別できない。

## 2) 遺構各説

上記のように遺構検出が難しい状況であったため、遺構掘込み面は定かではない。土器が出土した時点で上部をすでに掘削してしまい、底部のみを検出した可能性が高い。そのため、遺構の計測値は確認面からの計測値を記載する。また平面プランが部分的にしか残存せず、土層觀察ベルト間の断面プランをつなぎ合わせて推定したような遺構は、その計測値に＊印を付して記した。また、小グリッドを1m単位で4分割し、小グリッド北隅から南東方向に「a, b」、小グリッド西隅から南東方向に「c, d」と記号を付して「22K1b」等と称し、より詳細な記述の一助とする。

### SK5 (図版18・36)

22J17グリッドで検出した。平面形は長軸1.51m、短軸1.38mの方形である。方向はN-10°-Eを示し、北東一南西方向を向く。断面形は半円状で深さは0.31mである。覆土は黄色褐色シルトと砂の混入が顕著なオリーブ褐色シルトである。遺構検出分類はA類である。

まず土器(2)が22J17aと22J17dの2地点に分かれて、その場につぶれたかのような状態で出土した。周囲を精査したところ、この2つの土器出土地点を中心し砂の混入を伴う円形の平面プランを検出した。次に平面プラン中央部を北東一南西方向に貫通するようにトレンチを設定し断面を観察した。その結果、平面プランに対応し、V層が弧状に落ち込んでいる様子が確認された。遺構覆土は砂の混入が顕著であり、平面プラン・断面プランを容易に検出できた。土器出土状況を記録後、遺構の半裁・完掘・記録を行った。北西隣にSK6が近接するが、重複関係は確認できなかった。

土器(2)は遺構中央及び南側の2か所にまとまって出土している。土器出土レベルは11.35～11.46mで、遺構底面から0.31～0.42mの高さである。またSK5の約0.6m東に位置するH18年度試掘調査の8Tからは、土器(2)の底部が出土している。SK5の遺構プランが東側に伸びる可能性も考えられたが、調査時には検出できなかった。土器(1)は遺構中央と遺構北側から出土した。土器出土レベルは11.44mで、土器(2)とほぼ同じである。土器(1)は、体部上側1/3ほどの復元にとどまり、中～底部は出土していない。

### SK6 (図版18・34・36)

22J16グリッドで検出した。平面形は長軸0.8m、短軸0.48mの楕円形である。方向はN-24°-Wを示し、やや北西一南東方向を向く。断面形はU字状で深さ0.32mである。覆土は暗灰黄色砂質土、黄褐色シルト、オリーブ褐色シルトである。遺構検出分類はA類である。

まず土器(4)が22J16bから出土し、遺構の可能性を検討することとなった。土器出土レベルで平面を精査したところ、砂の混入が顕著な溝状のプランを検出した。南北方向を主軸とした長さ0.8m、幅0.3mのプランで、土器(4)は北側に位置した。続いて中央部にトレンチを1本設定したところ、土器(4)の下から土器(3)が出土した。続いてプラン南側にトレンチを入れたところ土器(6)の底部が下層から出土し、SK6はV層を掘り込んでいる状況が確認できた。遺構掘削を進めたところ、遺構中央部下層から土器(5)が出土した。

これらの土器は、4個体がほぼ同サイズの器高10cmほどの小型土器であり、口縁部が若干欠けるものの、全体的に割れや欠けがほとんど見られない良好な状態で残存していた。土器の位置関係は、SK6北側から土器(4)・(3)・(5)・(6)と並んで出土している。また土器の出土レベルは、土器(4)11.35m、土器(3)11.26m、土器(5)11.04m、土器(6)11.07mである。これは遺構底面からの高さ0.03～0.43mであり、4個体の土器が上層～下層にわたって出土した。調査時の所見では、土器(4)・(3)、土器(5)・(6)が対を成すかのような印象を受けた。土器(3)がやや斜めに倒れた状態で立っており、そこに土器(4)が口と口を合わせるかのように横倒しの状態で出土した。土器(5)・(6)はこれより遺構南側に位置し、高さは一段と下がり横倒しの状態で出土した。

#### SK7・SK14（図版18・35・37）

SK7は21J24、21K4グリッドで検出した。平面形は長軸1.12m、短軸0.86mの梢円形である。方向はN-51°-Wを示し、北西～南東方向を向く。断面形は台形状で、深さは0.45mである。覆土はにぶい黄橙色シルトを主体とする。遺構検出分類はC類である。

SK14は21J24、21K4グリッドで検出された。土器(16)が下層から出土するまで、遺構の存在が認識できなかった。結果、遺構周辺を平面的に下げてしまい、層位確認ベルトでしか遺構検出できなかった。そのため全体形は不明である。断面形は弧状または半円状と想定されるが、底面の一部のみの検出のため特定できない。深さは確認面から0.3mである。覆土はにぶい黄橙色シルトを主体とする。SK7と14は重複関係にあり、SK7がより新しい。遺構検出分類はC類である。

包含層掘削時、21K4a（SK14中央やや西側）から土器(16)が、21K4b（SK7西端）から土器(7)が出土した。この土器周辺に遺構が存在するものと想定し、層位確認ベルトを24K4a-bグリッド間（図版18遺構別図SK7・14C-C'）に設定したところ、ベルト下部V層直上から土器(8)が出土した（SK7中央底面直上）。層位確認ベルトではSK7・14間に若干の土層の乱れが観察でき、これら3個体の土器が一つの遺構に納まるのか、2つの遺構に分かれるのか、検討に多くの時間を要した。結果、（新）SK7>SK14（旧）の関係が確認できた。その後、SK7の掘削作業に入ったところ、層位確認ベルト上部（SK7中央上層）から土器(9)が出土した。

土器の出土レベルは、SK7では土器(9)11.50m、土器(7)11.43～11.47m、土器(8)11.16mである。遺構底面からの高さ0.04～0.4mに位置し、上層～下層にわたって出土している。このうち底面直上から出土した土器(8)は、欠損が無くほぼ完全な状態であり、出土状況はやや斜めに正立した状態であった。

SK14の土器(16)は11.41～11.50mの位置で出土し、遺構底面からの高さ0.05～0.14mである。土器はその場に押しつぶされたかのような状態で、1か所に集中して出土した。土器の脚部と体部の一部が欠損しているものの、ほぼ一個体が接合・復元できた。

#### SK11（図版18・37）

22J6・7・11グリッドで検出した。平面形は長軸1.8m、短軸1.1mの梢円形である。長軸方向はN-73°-Eを示し、やや東西方向を向く。断面形はおおむね弧状で、深さは0.25mである。覆土はオリーブ砂質シルトを主体とする。遺構検出分類はB類である。

まず土器(10)が、その場に押しつぶされたかのような状態で出土した。遺構の可能性を検討したが、土器出土レベルでの平面精査では、遺構プランは検出できなかった。次にA-A'、B-B'の2本の層位確認ベルトで遺構プラン検討を行ったところ、基本層序III-2b層を切る、やや暗みを帯びる遺構覆土を検出し

た。III-2b層は相対的に粘性が高く、精査すると両刃鎌に引っ掛かりが感じられるのに対して、造構覆土は削るとさらさらした感触のものであった。これを手掛かりに再度平面プランを検討し、造構検出を行った。

この時点で、平面的に土器出土レベルから掘下げた状態にあった。そのため上層での平面プランは確認できず、造構底面のプラン検出を行えたのみにとどまる。本来の造構サイズは底面形より一回り大きくなるものと想定される。2本の層位確認ベルトで検出できたものを参考にして、造構上層はベルト間をつなぐ推定線で、造構図版では破線で表記した。

土器(10)は、造構中央部北側と南側に約0.25m離れて出土した。特に北側は、土器がその場でつぶれたかのような出土状況を示し、多くの破片が重なり合って出土した。土器出土レベルは11.42～11.49mであり、これは造構底面から高さ0.23～0.3mにあたる。また土器(10)は、平成18年度試掘調査出土の土器と接合する。試掘調査の土器出土地点は22J7c・d間であり、SK11の北端にかかるか否かといった地点であるため、造構内かどうかは断定できない。試掘調査の出土状況写真では、土器がまさに出始めたという状況であり、重機のツメに引っ張られて土器が移動した可能性は低いと考えられる。また土器(12)は上記試掘調査土器出土地点から一個体が出土している。また土器(11)も同地点とSK11と近接する2地点から出土したものが接合している。このことから、SK11の造構プランが北側に延伸する可能性や別造構が存在していた可能性も考えられる。

#### SK12 (図版18・38)

21J25、22J21、21K5、22K1グリッドで検出した。平面形は長軸2.36m、短軸1.05mの楕円形である。長軸方向はN-3°-Wを示し、ほぼ南北方向を向く。断面形は弧状で、深さは0.38mである。覆土は明黄褐色シルトを主体とする。造構検出分類はC類である。

調査当初、21J21c(造構中央部)から土器(13)・(14)・(15)が出土した。土器出土レベルの平面で造構検出を試みたが、プランは検出できなかった。次にA-A'方向の層位確認ベルトで、基本層序III-2bと土器出土地点周辺の土質を検討した。結果、粘性のより高い基本層序III-2b層が、土器出土地点周辺で途切れる地点がある事、土器出土地点を中心とする造構覆土は、比較的さらさらとしたシルト質であることを確認し、これを手掛かりにベルト上で造構断面プランを検出した。SK12は最後まで調査が難航した造構であり、造構周囲の平面はすでに底面レベル近くまで下がってしまった。しかし、平面上で粘性の有無に着目して精査したところ、層位確認ベルトで検出したプランと対応する形で、平面プランが検出された。底面はV層を掘込んでおらず、III-2d層直上と判断された。

土器はほぼ造構上層、造構底部から高さ0.1m～0.37mから出土している。土器(15)は造構北側から、一個体がそのまま正立した状態で出土し、出土レベルは11.46mである。土器(14)は造構中央部から出土し、出土レベルは11.30～11.54mである。ほぼその場につぶれた状態である。土器破片の中心は造構中央部であるが、そこから約0.9m離れた南側と約0.3m離れた東側にも土器は散らばっている。土器(13)は造構中央東側、出土レベル11.32～11.55mで出土した。その場で割れてつぶれたというより、やや四散したような出土状況を示す。

#### SK25 (図版19・38)

21J15グリッドで検出された。平面形は長軸1.5m、短軸0.73mの楕円形である。長軸方向はN-28°-Eを示し、北東～南西方向を向く。断面形は弧状で、深さは0.08mである。覆土はにぶい黄色シルトであり、確認面よりやや暗みを増す。造構検出分類はB類である。造構底部から土器(17)(18)・(19)が

出土した。SK32と重複し、平面上の切合い関係から（新）SK32 > SK25（旧）といえる。北側0.12mの近接した位置にSK30が存在するが、確認面での重複関係は認められない。

土器は劣化を防ぐため、出土状況を記録し早期に取上げた。遺構検出には多くの時間を要し、基本層序の再確認や他遺構の覆土分類が進んだ調査終盤までかかった。結果、次のような特徴が明らかとなった。まず、遺構の主軸と土器の並びとは同一方向ではないことが挙げられる。遺構の長軸がN-28°-Eに対して、土器の並びはN-51°-Eであり23°のズレがある。土器は土坑のやや東側に偏って配置され、南から土器（18）・（17）・（19）が並んでいる。間隔は（18）・（17）間が0.1m、（17）・（19）間が0.55mである。土器の出土レベルは（18）・（17）・（19）の順に、11.33、11.37、11.36mであり、遺構底面から0.06～0.1mの高さである。したがって遺構底面直上に置かれていたことが明らかとなった。また調査初期から3つの土器の出土状況を注目していたが、土器（19）は口縁部に多少の欠損はあるものの、体部に割れがなくほぼ正立した状態で出土した。土器（17）は西方向に斜めに倒れた状態で出土し、これもほぼ完形をとどめる良好な出土状況であった。土器（18）も正立した状態で置かれており、上方の口縁部に一部欠損が見られるものの、体部の中～下部は良好な状態で出土している。

#### SK26（図版19・39）

21J4・9グリッドで検出した。平面形は長軸1.48m、短軸0.72mの楕円形である。長軸方向はN-42°-Eを示し、北東～南西方向を向く。断面形は弧状で、深さは0.06mである。覆土は黄褐色シルトを主体とする。1層から土器（20）が出土した。遺構検出分類はB類である。

調査当初、21J3～5のエリアに土器（21）（SK29）、土器（20）（SK26）、土器25（土器集中4）の一部が連続して見つかった。そのためこれら土器を含む広い範囲での遺構の可能性を検討した。しかし、精査を繰返すうちに、それぞれの土器の周辺は周間に比べ、やや暗みを帯びる色調で、粘性が弱い傾向にあることが確認してきた。最終的に土器（20）を中心に、北東～南西方向に楕円形の平面プランが検出された。これにトレンチを入れ断面で確認したところ、この暗みを帯びた遺構覆土は深さ0.06mを残すのみであり、遺構底部のみの検出となった。土器（20）は逆さまに伏せた状態で置かれており、底部の1/3ほどが欠損していた。土器出土レベルは11.29mで、遺構底面から0.07mの高さである。遺構底部に逆さまの状態で置かれていたと推測される。

#### SK29（図版19・39・40）

21J3・4・8・9グリッドで検出した。平面形は長軸1.53m、短軸0.68mの楕円形である。長軸方向はN-36°-Eを示し、北東～南西方向を向く。断面形は台形状で、深さは0.2mである。覆土はにぶい黄褐色シルトを主体とする。遺構北側で土器（21）が逆さまに伏せたような状態で出土した。遺構検出分類はB類である。

SK29の0.6m東側にはSK26が存在する。この2つの遺構は多くの共通点をもつ。まず、第一に長軸方向が同じこと、第二に楕円形の平面形態や長軸1.5mほどのサイズを同じくすること、第三に遺物が逆さまに置かれた状態で出土していることである。

土器（21）は底部と口縁部の一部が欠損するもののはぼ一個体が接合できた。土器出土レベルは11.38mで、底面からの高さは0.16mである。

#### SK30（図版19・40）

21J9・10・15グリッドで検出した。平面形は長軸1.26m、短軸0.86mの楕円形である。長軸方向はN-25°-Wを示し、北西～南東方向を向く。断面形は弧状で、深さは0.33mである。覆土は黄褐色シル

トを主体とする。遺構中央から、土器（22）がその場につぶれた状態で出土した。遺構検出分類はC類である。南東0.12mの位置にSK25が存在する。確認面での重複関係は見られない。しかし、確認面が両遺構とも底部に近い状態であり、遺構の掘込面での状態を推定すると、これだけ接近した遺構であれば切り離し関係が生じるものと考えられる。

土器（22）は、体部側面の一部分を欠損するが、ほぼ一個体の接合が可能であった。また底部には打ち欠きが見られる。出土レベルは11.31～11.39mで、遺構底面から0.19～0.27mの高さである。

#### SK32（図版19・39）

21J15、22J11 グリッドで検出した。遺構検出分類はC類である。SK25と重複関係にあり、SK32の方が新しい。SK25の東側を切り、砂を含む半円状の平面プランが検出された。次に21J11aから21J11cにかかる層位確認ベルトで断面を検討した結果、本来水平に堆積すべきはずのIII-2b、2c層が大きく乱れ、明黄褐色砂質シルトを主体とする層の堆積が見られたほか、V層への掘り込みが確認され、SK32を検出した。SK32の東側は層位確認ベルトにかかる一部しか検出できなかったため、全体のプランは特定できないが、長軸1.4m<sup>2</sup>、短軸0.9m<sup>2</sup>の梢円形の遺構であると推定される。長軸方向は推定でN-67°-Wを示し、ほぼ東西方向に向くと考えられる。断面形は台形状で、深さは0.48mである。覆土は明黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色砂を主体とする。1層から土器（23）が出土した。

土器（23）は、SK32東縁から土器の脚部と体部が約15cm離れ、二分した状態で出土した。土器体部は逆さになった状態で、脚部は底部を東に向け横倒しになった状態だった。出土レベルは体部・脚部ともに11.39mで、遺構底面から約0.4mに位置する。当初、土器の形状から蓋が2個体出土したと認識したが、接合の結果、1個体の高杯となることが確認された。

#### SX2（図版19・40）

21J20、22J16 グリッドで検出した。21J20～22J16 グリッド間に設けた層位確認ベルト部分で検出した。幅0.7m、深さ0.14mのやや不整形な弧状をなす。覆土はにぶい黄褐色砂質シルトで、底面から土器（24）を出土した。出土レベルは11.42mであり、遺構底面から0.03mの高さである。遺構検出分類はA類である。層位確認ベルトに、わずかに遺構底部断面が残る形でしか検出できなかつたため、遺構の全体形は特定できない。

北東に1mほど離れ、SK5・6が検出された。これらとは遺構覆土に砂粒子を含む点で共通するが、SX2についてはIV・V層まで掘り込んだ跡は見られなかった。むしろ遺構の底面が、SK5・6の確認面の高さにあたり、これらの遺構より一段高い位置にあった。

#### 土器集中4（図版19・40）

21J4・5 グリッドに位置する。長軸1.66m、短軸1.23mの梢円形の範囲に土器が散らばって出土した。土器（25）は集中区中央から南側に広く四散した状態で出土し、出土レベルは11.34～11.47mである。土器（26）は集中区東側に割れて四散した状態で出土し、レベルは11.32～11.40mであった。土器（27）は集中区西側、土器（25）に近接した位置で出土した。残存状況が良好で、体部下部に打ち欠きがみられるものの大きな割れや欠けがなかった。出土レベルは11.34mで、西向きに横倒しになった状態で出土している。平面での遺構プランは検出できず、土器出土状況を記録後、21J5 グリッドに幅広くトレーンチを設け断割ってみたが、断面でも遺構プランは確認できなかつた。

#### 土器集中10（図版19・40）

22K2・3・7・8 グリッドに位置する。長軸2.42m、短軸2.03mの梢円形の範囲で土器が集中して

出土した。土器の出土レベルは11.43～11.56mである。22K2cから土器（28）が横倒しになり、上になつた片側半分が欠損した状態で出土した。22K7bから土器（29）が逆さに伏せられ、その場につぶれた状態で出土し、片側約半分が欠損していた。遺構プランは検出できなかった。

#### 土器集中31（図版19・40）

20J5bグリッドに位置する。長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形の範囲で土器（30）が散乱した状態で出土している。出土レベルは11.46～11.53mである。21J22Jを中心とする遺構集中地帯からやや離れて見つかった。確認面はIII-2c層とIV層の漸移層であり、黒い渦りの見られる砂質土から土器が出土している。土器集中の中央にトレンチを入れてみたが、IV層への掘込みは認められず、平面・断面で遺構プランを確認できなかった。

## 4 遺 物

本遺跡出土遺物には上層の古代～中世の土器・石製品・金属製品・木製品、下層の弥生時代の土器がある。ここでは中世遺構出土遺物、弥生時代の土器について報告する。

#### A 中世遺構出土遺物（図版20・25・41）

本遺跡の中世遺構からは須恵器、青磁、珠洲焼、古瀬戸、砥石、鉄製品、木製品が出土している。当該期の遺物量が少なく、時期幅があることから遺跡全体の時期を決定するのは困難であった。

1はSK237出土の須恵器の甕である。外面には平行線状のタタキ目痕、内面には同心円状のあて具痕が認められる。2はSX123の1層出土の青磁碗で、14世紀に属するものである。3～6は珠洲焼・珠洲系陶器である。3はSD133出土で、吉岡編年〔吉岡1994〕によるⅢ期以前のものである。4はSE173出土で吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期に属する甕である。5・6は片口鉢である。5はSK237の1層出土で吉岡編年Ⅰ期に属する。卸し目は認められない。胎土には長石等の小礫が多く含まれ、海綿骨針は認められない。珠洲系陶器と思われる。6はP198及びP215出土で吉岡編年Ⅳ期後半に属する。7～9は古瀬戸である。7はSE173出土で、藤澤良祐氏の編年〔藤澤2005〕による古瀬戸前期に属する瓶子である。8・9はSE236出土の藤澤編年の後Ⅰ～Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）に属する平椀である。9の体部下半は釉薬が掻き取られている。10はSK235の2層出土の砥石である。凝灰岩製であり、四面が使用されている。11はSK101の1層出土の鉄製品である。釘の可能性があるが判然としない。

SE236からは、多数の井戸側部材と曲物を利用した水溜が出土している（第3表）。1・2は隅柱である。1は東・内隅のもので板目材が用いられ、2は北・内隅のもので柾目材を角柱状に加工したものである。3・4は桟木である。3は南東2段目のもので、板目材の端部を凹状に作出している。4は南西3段目のもので、柾目材の端部を凸状に作り出している。いずれも側板との擦痕がみられる。5・6は側板で、いずれも板目材を使用している。上端は朽ちて残存していない。5は南外縦側板No.5である。6は北西内側板No.1である。6には桟木との擦痕が2か所見られる。7は水溜の曲物である。柾目板が用いられており、樹皮によって縛られているが曲物の両端は縦に塗布されたタールによって固定されている。内面にケビキがなされている。長径58.0cm、短径50.8cm、高さ51.2cmで、底板は抜かれている。

## B 弥生時代の土器 (図版 20~24・42~46)

### 1) 概 要

本遺跡出土の弥生土器は中期後半の土器のみ31個体分である。接合率が高く、接合しなかった破片で個体識別できなかった破片はごくわずかである。弥生時代の遺物包含層は明確に存在せず、土坑墓の可能性が高い土坑11基から出土したものと、掘り込みが確認できず土器集中区として取り上げたもの3か所、性格不明遺構1基から出土したものがすべてで、後世の搅乱をうけ遺構から離れた地点に散布したもののが少數ある。石器はまったく出土していない。

弥生時代中期後半の土器は、東北地方北部の沈線文系=宇津ノ台式（秋田県大曲市宇津ノ台遺跡を標準とする）と東北地方南部の沈線文系=川原町口式（福島県会津若松市川原町口遺跡を標準とする）、北陸地方に広範に見られる櫛描文系=小松式（石川県小松市八日市地方遺跡を標準とする）が主体である。上記3系統のほかに中部高地の栗林式（長野県中野市栗林遺跡を標準とする）系統が1点のみある。いずれも純粹な土器ではなく、宇津ノ台式と小松式の折衷、宇津ノ台式と川原町口式の折衷、3系統の要素が含まれるもの、系統不明等がある。胎土は系統によって使い分けている。宇津ノ台式と小松式の折衷土器は灰白色系の粘土を使用し、川原町口系は明黄色系の粘土を使用している。

### 2) 器種分類

土器の器種は甕、壺、蓋、台付鉢、鉢、高杯として大別し、器種ごとに施文方法でI類：沈線文系、II類：櫛描文系、III類：そのほかとした。全体の器形が分かる甕、壺、蓋、台付鉢については器形で細分し、アルファベット大文字A、B、Cで現した。法量は算用数字で大きいものから1、2、3で現した。

#### 甕

##### I類 沈線文系

- A 体部径と口径がほぼ同じである。口縁部は端部に向かい薄くなるものが多い。口縁部と頸部境は「く」の字に外傾する。頸部内面に稜を持つものが多い。
- B 口径が最大径となる。口縁部は端部に向かい薄くなるものが多い。口縁部と頸部境で「く」の字に外傾する。頸部内面に稜を持つものが多い。

##### II類 櫛描文系

- A 体部径と口径がほぼ同じである。口縁部は端部に向かい薄くなる。口縁部と頸部境は「く」の字に外傾する。頸部内面に稜を持つ。
- B 口径が最大径となる。口縁部は端部に向かい薄くなる。頸部内面に稜を持つものがある。

##### III類 そのほか

- A 体部が最大径となる。口縁部は短く外反する。器壁が厚い。
- B 口径が最大径となる。口縁部は端部に向かい薄くなる。口縁部と頸部境で「く」の字に外傾する。頸部内面に稜を持つ。

〔法量〕 高さで細分した。I~III類共通である。

- 1 高さ8.0~11.0cmのもの。
- 2 高さ13.0~16.0cmのもの。
- 3 高さ24.0~26.0cmのもの。

## 壺

## I類 沈線文系

- A 体部は丸みを持ち、内湾気味に外傾する口縁部がつくもの。頸部の短いものと長いものがある。  
B 倒卵型の体部に長い頸部と短く外反する口縁部がつくもの。

## II類 柳描文系

- A 体部は丸みを持ち、内湾気味に外傾する口縁部がつくもの。頸部の短いものと長いものがある。  
B 頸部がつかない無頸壺。

## 蓋

## I類 沈線文系

- A ツマミが外傾し、体部は「ハ」の字に開くもの。

## II類 柳描文系

- A ツマミがほぼ直立し、体部は「ハ」の字に開くもの。

## 台付鉢

## I類 沈線文系

- A 口縁部が外傾し、鉢と台の境に凸帯がつくもの。

## III類 その他

- A 口縁部が内湾し、台に凸帯がつくもの。

## 3) 各 説

土器は遺構（SK、SX、土器集中区）ごとに報告する。文様等の詳細は観察表を参照願いたい。

**SK5 (1・2)** 2個体出土している。1は土坑の上部にあり、後世の搅乱で破壊され周辺に破片が散布していただけ復元率が低い。SK5からは口縁部片が1点のみ出土した。柳描文系の壺である。頸部の「く」の字の屈曲、口縁部が端部に向かって薄くなる等は宇津ノ台式の要素が入る。胎土はにぶい黄褐色でチャートの混入率が高い。2は沈線文系の壺である。頸部は筒状に長く、縦文施文後、通常は重菱形文が施されるところであるが、ここでは重菱形文がかなりくずれて矢羽状のような文様となっている。波状文も間隔が一定ではない。口縁部内面に弧線文が施される。底部に製作時に敷いた笠の葉脈の痕跡が残る<sup>1)</sup>。内外面にスス、炭化物が付着し浅黒い。

**SK6 (3~6)** 4個体出土した。いずれもほぼ完形で、高さは10cm前後と小型である。すべて使用痕はなく、胎土、施文の様子が同じことから、同一人物が埋納用に製作したものと推測される。4は土坑の最上位から口縁部をやや下に向けて横倒して出土した。柳描文系（小松式）壺で、宇津ノ台式との折衷と見られる。底部は直立するように立上がり、体部は筒状で頸部に至ってわずかに内湾する。口縁部は強く外傾し、口縁端部に向かい薄くなる。頸部内面に稜を有する。口縁部の一部と体部下半の欠損部（3.8×2.8cm）は、出土時に上を向いていた面で破損と考えられる。3は口縁部を上方や斜めに4の壺と合わせ口のような状態で出土した。出土時に、上を向けていた口縁部を一部欠損している。柳描文系の壺であるが、ほかの2系統の要素も持つ。最大径が体部中央になる。口縁部の外面はやや内湾気味に外傾する。器形は川原町口系に近く、柳描き（3本描き）の施文方法は小松式、文様モチーフは宇津ノ台式系である。

1) このように笠を敷くのは、阿賀野川流域の縦文晩期から続く伝統である（石川日出志氏ご教示）。

体部の縄文は中央に部分的に施文される。5は沈線文系の甕である。体部の整形は縦方向のヘラケズリの跡をナデ消しているが、難である。内面は横方向のヘラケズリである。口縁部は一部欠損している。6も沈線文系の甕である。甕の中では最小の高さ8.7cmである。口縁部は一部欠損している。

**SK7 (7~9)** 3個体出土した。7は沈線文系の甕である。全体にスス、炭化物が付着し黒変している。2本描きの平行沈線がわずかに残る。8は栗林系の影響がみられる完形の甕である。口縁部にモミ殻痕が残る。口縁部は強いナデ、体部から底部まで丁寧なナデを施す。体部の文様帯は栗林式のコの字重ねを思わせるような文様であるが、かなり変形している。描き方は最上部の横線(1本描き)を左から右へ引き、続けて下に引いて単位の区画を行う。その後、区画の中に横線を引いた後に縦線を引いている。単位は4単位である。1単位目は横線10条、縦線4条、2単位目は横線12条、縦線7条、3単位目は区画の右(3-1単位)左(3-2単位)で本数が違い、3-1単位は横線13条、縦線4条、3-2単位は横線15条、縦線2条である。沈線の始めの区画の線は1本描き、基本は2本描きである。横線の一部は3本描きの櫛描きもある。栗林系の影響が見られるのは、この1点のみである。9は櫛描文系の蓋であるが、蓋に文様を入れるのは宇津ノ台式の影響である。蓋の内面にも3本描きの櫛描波状文が施される。

**SK11 (10~11)** 2個体の出土である。10は壺でSK11出土分32片と試掘8T出土分23片と接合している。倒卵型の体部に長い筒状の無文の頸部が付く。頸部の形態は宇津ノ台式の要素であるが、全体の器形は宇津ノ台式には見られないもので在地のものか。体部はハケの後に縄文LRが施されるが、条が横になるクセが見られる。厚い口縁部は短く外傾する。口径は13.5cmである。11は沈線文系の蓋である。2本描きの平行沈線と山形文が施文される。ツマミ上部にも平行沈線が施文される。裾部径が11.7cmである。10と11はセットの可能性がある。

**試掘8T (12)** 12の甕はすべて試掘8Tからの出土である。ほかの試掘8T出土土器がSK11出土土器とすべて接合しており、この12もSK11の土器である可能性が残る。櫛描文系の甕である。器形は宇津ノ台式、ハケメで体部全体を調整するのは小松式である。底部の直線的な立ち上がりは在地のものである。

**SK12 (13~15)** 3個体の出土である。13は沈線文系の甕である。口縁部内面にも1本描きの沈線1条と矢羽状文が施文される。頸部文様帯は2本描きの平行沈線文と矢羽状文、崩れた波状文が施文される。底部には4×4cmの欠損部があり、穿孔の可能性が高い。14は櫛描文系の甕である。頸部施文の櫛描文、櫛目列点は小松式で、器形は川原町口系である。両系統の折衷はこれまで確認されていない。体部にある欠損部は穿孔の可能性がある。15はほぼ完形の鉢である。底部は内湾しながら立上がり、口縁部は強く外反する。底部と体部の境には稜ができる。体部の縄文は3段に施文され、底部にまで縄文が施文される。宇津ノ台式の流れを汲む在地の土器である。

**SK14 (16)** 1個体の出土である。16は台付鉢で台の裾部は一部欠損する。鉢部の口縁部は内湾する。円形浮文が口縁部、体部、台裾部に多数貼付けられる。口縁部、体部の貼付けが偶数であることから、裾部の貼付けも偶数の6か所と推測した。口縁部2か所の大きな円形浮文のみ本体まで孔が貫通し、そのほかの小さな円形浮文は先端の尖った工具、あるいは細い管状の工具で中央に孔を開けている。この台付鉢も倒位の状態で出土したが、赤彩はされていない。

**SK25 (17~19)** 3個体の出土である。17は沈線文系の甕で口縁部がわずかに欠損している。7条の平行沈線は1本描きである。波状文は間隔が均等でなく、かなり崩れています。18も沈線文系の甕でゆがみが大きい。表面は被熱して剥落が顕著である。底部に箇痕が残る。19は沈線文系の甕である。口縁部が欠損し、底部は口縁部から入れた工具で穿孔(2.6×3.3cm)されている。出土時、全体に暗赤褐色の色

調であったが、洗浄により文様も明瞭でなくなってしまった。暗赤褐色が彩色や付着物によるか否かは不明である。胎土、器形は川原町口系であるが、文様モチーフの渦巻き文・重三角文は川原町口系、波状文が宇津ノ台式と折衷している。

**SK26 (20)** 1個体の出土である。20は沈線文系の壺である。宇津ノ台式と川原町口式の折衷土器である。外面は摩滅が著しい。2本描きの平行沈線が体部中ほどまで施文されている。体部下半は縄文が施される。

**SK29 (21)** 1個体の出土である。21は沈線文系の台付鉢で、台の裾部はほとんどが欠損している。外面体部から台部にまでススが付着していることから、煮炊きに使用している。台の内面が赤彩されているが、通常の使用では台の内面は見えないことから赤彩は不要と考えられる。しかし、倒置の状態で出土したことから、土坑に設置した後に、上に向いている台内面に赤彩したものと考えられる。

**SK30 (22)** 1個体の出土である。22は櫛描文系の壺である。全体をハケメ調整するが、口縁部の形態は宇津ノ台式の要素である。底部が欠損しているが、穿孔の可能性もある。

**SK32 (23)** 1個体の出土である。23はミニチュアの高杯である。手づくねで脚部に指頭圧痕が明瞭に残る。杯部と脚部の境で破壊された後、土坑に入れられた可能性もある。

**SX2 (24)** 1個体の出土である。櫛描文系の無頸壺である。宇津ノ台式と折衷し、口唇部には縄文が施される。口縁部にある2個の孔は蓋を結ぶ紐を通すための孔である。3条の櫛描文は直線文も波状文も雑な描き方である。

**土器集中4 (25~27)** 3個体の出土である。25は系統不明の壺であるが、宇津ノ台式の影響（頸部と体部の作り分け、口縁部内面の稜、直線的に外側に伸びる口縁部）が残る。体部の調整はケズリである。26は櫛描文系の壺である。口縁部から体部の器形は小松式の系統で、直線的に立ちあがる底部のつくりは在地のものである。底部に箇痕が残る。27は沈線文系の壺である。胎土は川原町口式系の明黄褐色の粘土を使用している。文様は本来、川原町口式系であれば渦巻き（または同心円文）が施されるところに波状文が施される等、宇津ノ台式の文様が混在している。体部下半の孔は口縁部から棒状のものを差し込んで穿孔している。

**土器集中10 (28~30)** 3個体の出土である。28は沈線文系の壺である。体部のハケメ調整は小松式の影響が残る。波状文は2本描きで緩やかである。29も沈線文系の壺である。口縁部は2段に外傾している。平行沈線は2本描きで6条であるが、部分的に7条になっている。山形文も2本描きである。体部下半は縄文が施される。30は最も残りが悪く、口縁部から体部の破片が1点のみである。沈線文系の壺である。

**土器集中31 (31)** 1個体のみの出土である。31は沈線文系の壺である。胎土及び器形は川原町口式であるがやや頸部が長い。文様は宇津ノ台式と小松式、川原町口式の要素が混じる。

## 5 リン酸・カルシウム分析

### A はじめに

本遺跡から検出された土坑は、土器の出土状況等から弥生時代中期後半の土坑墓の可能性が考えられる。土坑の性格をよりくわしく検討するために、自然科学分析調査を実施することとした。土坑墓の可能性の検討を主目的とするため、分析方法は土壤中に含まれるリン酸及びカルシウム含量の測定を選択した。リン酸は、とくに骨に多量に含まれ、土壤中では比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況から遺体埋納を判断する方法として含量を調べることは有効な手法とされている。カルシウムもリン酸とともに骨の主成分であることから、その濃集状況も遺体埋納の手がかりとなる。ここでは特に、遺構覆土の土壤成分に着目し、各土壤における土壤成分の特徴、成分量の比較検討を行う。

### B 試 料

#### 1) 試料採取地点

第17図に示すとおり、土坑10基（SK6・7・11・12・14・25・26・29・30・32）、土器集中2か所（土器集中4・31）の遺構内任意地点から試料を採取した。また遺構とは別に比較対照試料として、基本上層（II～V層）の試料も採取した。採取地点は、遺構検出エリアから近い2119グリッドの調査区外壁（第IV章1 第12図③地点）とした。こうして、土壤試料計80点を分析することとした。

#### （2）分析方法

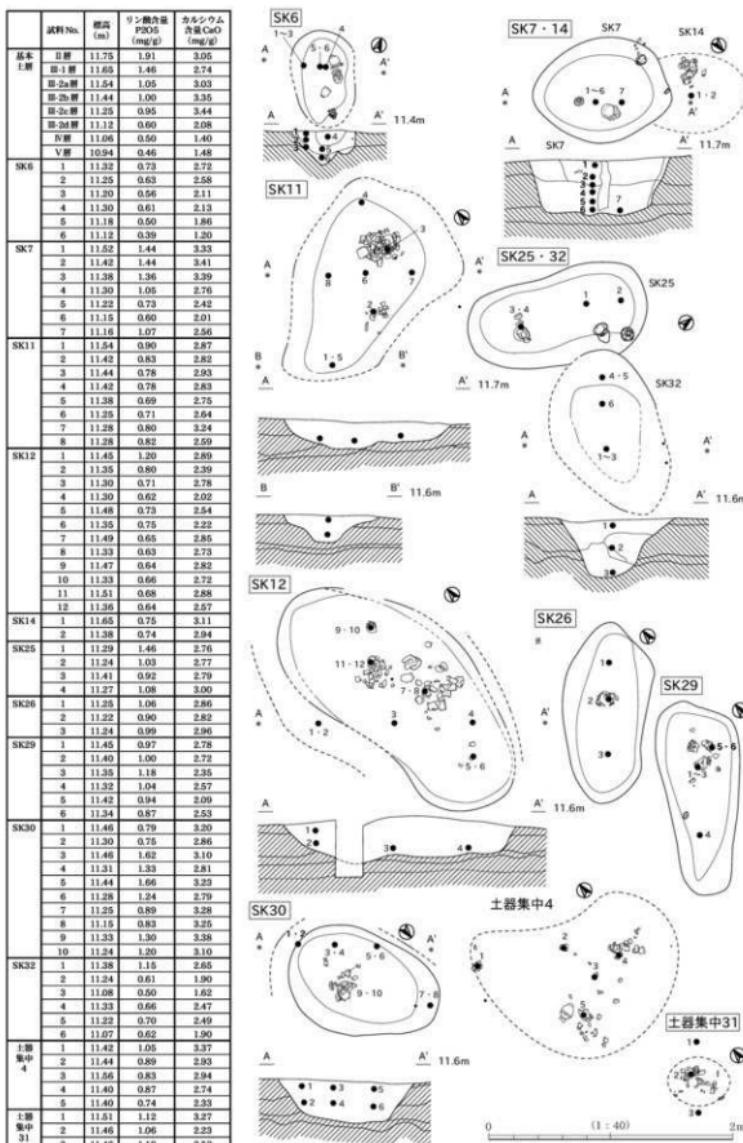
リン酸は硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解一原子吸光度法でそれぞれ行う〔土壤養分測定法委員会1981〕。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mm篩を通して（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計でリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

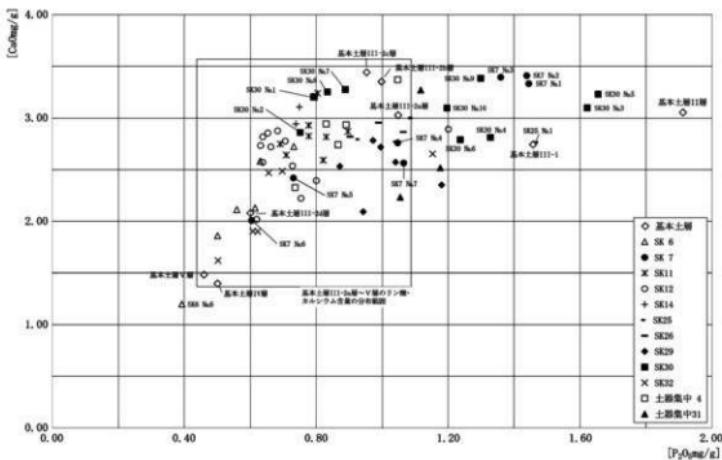
### C 結 果

結果を第17図に示す。遺構覆土の対照試料とした基本土層のリン酸含量は1.91～0.46（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）の範囲にある。含量変化の特徴として、II層から下層へリン酸含量は減少し、分析対象とした最下層のV層で最も低くなる。カルシウム含量は3.44～1.40（CaOmg/g）の範囲にあり、含量変化はリン酸とやや異なり、III-2b層、III-2c層で最も高くなる。

一方、土坑及び土器集中では、リン酸含量の最大値は1.66（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）、最小値は0.39（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）、平均値は0.90（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）、標準偏差0.28、CV値（標準偏差/平均値）30.64%である。カルシウム含量の最大値は3.41（CaOmg/g）、最小値は1.20（CaOmg/g）、平均値は2.69（CaOmg/g）、標準偏差0.44、CV値（標準偏差/平均値）16.35%である。いずれも、基本土層の最も高いリン酸含量（II層の



第17図 試料採取地点及び土壤理化学分析結果



第18図 リン酸・カルシウム含量分布図

1.91P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g)、カルシウム含量(III-2c層の3.44CaOmg/g)の範囲内に分布するが、CV値による土壌や土器集中試料における含量のばらつきは、リン酸含量の方がカルシウム含量よりも2倍弱大きい。

## D 者 察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが〔Bowen 1983, Bolt・Bruggenwert 1980, 川崎ほか 1991, 天野ほか 1991〕。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約 3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>Os<sub>mg/g</sub>程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>Os<sub>mg/g</sub>〔川崎ほか 1991〕という報告例があり、パリノ・サーヴェイエ株式会社におけるこれまでの分析調査事例では、骨片等の痕跡が認められる土壤では 6.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>Os<sub>mg/g</sub>を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は、普通 1～50CaO<sub>mg/g</sub>〔藤賀 1979〕といわれ、含量幅はリン酸よりも大きい傾向にある。

これら天然賦存量は、遺体の痕跡を検討する目安として重要であるが、天然賦存量以下であったとしても遺体埋納をすべて否定するものではない。遺体が土壤中に分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流し、その結果天然賦存量の範囲となってしまうことも推測される。したがって、天然賦存量との比較による検討のほか、遺構覆土と同質で、かつ人為的影響が低いとされる基本土層との比較、同一遺構内覆土における含量変化による検討も必要となる。

今回の結果では、各遺構覆土のリン酸、カルシウム含量は、ともに上記した天然賦存量の範囲内にあることから、天然賦存量を目安とした遺体埋納の痕跡の有無を判断することは困難であった。そのため、ここでは基本土層及び遺構覆土の相対比較によって検討する。相対比較するための成分として、ここではリン酸を対象とする。その理由としては、何れの試料も天然賦存量範囲の低い含量であることから、遺体埋納を直接的に示唆するリン酸カルシウム（骨の主成分）がそのまま残存している可能性は低く、土壌中の化合物種はリン酸、カルシウムでそれぞれ異なり、比較がより小さいリン酸の有無が相対的違いを把握しやすくなる。

やすいことに拘る。

基本土層のリン酸含量分布（第17図）は、II～III-1層、III-2a～2c層、III-2d層～V層の3つに大別される。リン酸含量が最も高い値を示すII～III-1層は、下位の含有量と差異は明らかであり、人為的な影響が示唆される。III-2a～2c層とIII-2d～V層は、調査所見で土坑や土器集中の検出面及び土坑掘り込みが及ぶ土層とみられ、土質は各遺構から採取された試料の土性、土色分類と対比される。そこで、III-2a層～V層の含有量幅で区分を広げてみると、土坑及び土器集中から採取された試料の殆どがこの分布範囲に存在する。ただし、リン酸含量においては、分布範囲からはずれる試料が認められた。これらの試料は、土性・土色が何れもIII-2a～V層の土性・土色と類似し、土質的に同質土壤と判断される。その中でSK7は覆土上層（No.1・2）と覆土下層上部（No.3）、SK25は覆土中央底部付近（No.1）、SK30は覆土最上部（No.3・5）でリン酸含量がほかの遺構より高く、概してカルシウム含量も高い傾向が認められる。したがって、試料間の比較では、リン酸、カルシウムが相対的に集積していると推測される。

また、今回の調査対象とした遺構には土器集中も含まれており、調査時には掘り込み等遺構プランは検出されていない。これらの試料のリン酸・カルシウム含量は、基本土層のIII-2a層～III-2c層のリン酸、カルシウム含量分布と比較的類似し、IV・V層と明らかに異なる。したがって、土器集中4・31試料については、基本土層における含量を反映しているようにみられる。

以上の結果、リン酸及びカルシウム含量は相対比較においても、遺体埋納を示唆しうる成分の明瞭な集積を示す試料の存在は認められなかった一方、上記したようにリン酸・カルシウム含量の特徴的高まりが認められる土坑（SK7・SK25・SK30）の存在が明らかとなった。特にSK30は、上記した覆土最上部（No.3・5）のほか、同覆土中部（No.4・6）、土器No.9直下（No.9）でもややリン酸含量が高い傾向が示唆され、ほかの遺構に比べリン酸含量の高まりが特徴的と言える。

ところで、本遺跡の立地や基本土層の土色・土性の変化を概観すると、V～III-2層は上方細粒化が認められる堆積物、II～III-1層は遺構の検出状況からその後に堆積した比較的細粒の堆積物の累重と推測される。また、上・下層2面の遺構検出面が確認されていることを考慮すると、III-2層及びその上位の堆積物については、擾乱や植生の発達に伴う土壤成分の富化といった影響も推定される。今回、相対比較の材料としたリン酸は、植物遺体に由来するものも含まれる可能性がある。そのため、基本土層や土坑覆土については、植物遺体や植物遺体の分解過程で生成される腐殖（炭素）の挙動についても検討する必要がある。また、リン酸含量の高まりが特徴的であったSK30については、遺体等の存在を直接示唆しうる試料の抽出を目的とした調査等も行い、総合的に評価・検討することが望まれる。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 農林水産省農林水産技術会議事務局編 28-36
- Bowen H.J.M. 1983 『環境無機化学-元素の循環と生化学』 浅見輝男・茅野充男訳 博友社 297p
- Bolt G.H.・Bruggenwert M.G.M. 1980 『土壤の化学』 岩田進午・三輪寅太郎・井上隆弘・陽 捷行訳 学会出版センター 309p
- 土壤養分測定法委員会編 1981 『土壤養分分析法』 義賢堂 440p
- 藤眞 正 1979 「カルシウム」『地質調査所化学分析法』 52 57-61
- 川崎 弘・吉田 謙・井上恒久 1991 「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 農林水産省農林水産技術会議事務局編 23-27
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 『新版標準土色帖』
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外土性の判定」『土壤調査ハンドブック』 ペドロジスト懇談会編 博友社 39-40

## 6 まとめ

### A 弥生時代中期後半の遺構について

本遺跡では弥生時代中期後半の遺構が15基検出された。遺物の出土状況から墓の可能性が高い土坑11基、掘り込みが検出できず土器集中区としたもの3か所と性格不明遺構1基である。土坑11基については木棺の痕跡は検出していない。最終的には、本調査で検出した15基と試掘調査8Tで一括土器(12)が出土した地点1か所を含め、16基が土坑墓になる可能性が高いと考えている。以下、土坑墓であるということを前提に、若干の検討を行う。

#### 1) 遺構配置

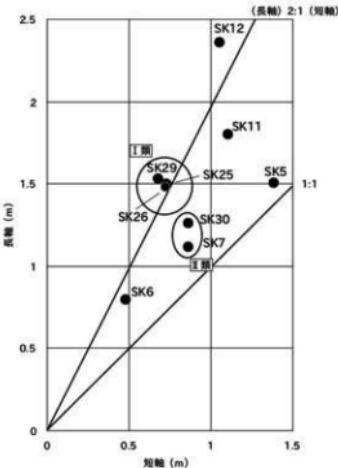
土坑墓の配置を見ると個別の土坑の長軸方向は、後述するように4方向のまとまりが見られるが、遺構全体の配置は約10×10mの狭い範囲に、おむね南北方向を意識して並んでいる。これは南北方向に形成された自然堤防上の縁に沿って、1段低い位置(図版16参照)に墓域が形成されたことに起因するものと考えられる。

#### 2) 平面形態

土坑墓の平面形は方形が1基(SK5)、ほかは梢円形である。第19図は規模が計測可能(計測値の一部には推定値も含まれる)な土坑9基の長軸・短軸をグラフ化したものである。9基の土坑のうち、同規模と分類できるのは、I類としたSK25・26・29の一群と、II類としたSK7・30の一群である。I類の土坑は長軸1.5m、短軸0.7m前後で、長軸・短軸比は2:1である。I類の土坑は平面形態及び主軸方向でも似た傾向を示している。II類の長軸・短軸比は1.5:1でやや円形に近い梢円形となる。このI・II類に分類されない最小のSK6や最大のSK12、方形のSK5と本遺跡の土坑形態は5種類認められる。土坑規模による分類は、遺構上面で検出できた遺構と底面で検出できた遺構では、同じ計測値でも実際の土坑規模と同じとは言いがたい。例えば、底面の長軸・短軸計測値で比較するとSK11はI類のSK26(ほぼ底面で検出)に近い数値を示す。この点でも厳密な比較分類とはいかないであろうが、長軸・短軸の比率等、全体の傾向はここから見て取れる。

#### 3) 長軸方向

第20図は土坑の長軸方向を示したもので、直線の長さが土坑長軸の長さを表わす。ほぼ北を長軸とするものをI群、北東を長軸とするものをII群、東北東を長軸とするものをIII群、北西を長軸とするもの

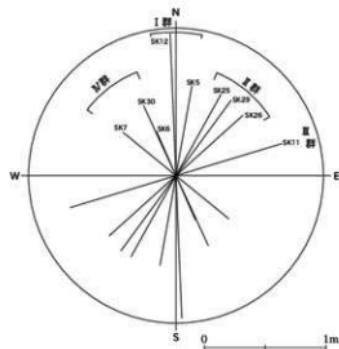


第19図 土坑の規模

をIV群とする。I群のSK12は長楕円形であるが、SK5は方形の土坑であるため北向きとは断定できない。II群としたSK25・26・29は前述したとおり、規模も同分類となり、その共通性が注目される。

#### 4) 土器出土数と器種

次に土器の出土数・器種と遺構の関係を第4表にした。土器が1個体のみ出土した遺構は8基(試掘8T出土土器(12)も含む)で、全体の50.0%で半数を占める。出土した8個の土器は、全体の中でもないし2個体のみしか出土していない器種(台付鉢、高杯、無頸壺など)が多い。副葬品(あるいは副葬品を入れる容器)として特定の器種を選択して収めていると想定さ



第20図 土坑の長軸方向

れる。2個体出土した遺構は3基で、全体の18.8%となる。壺のセットが2か所、壺と蓋のセットが1か所(SK11)である。SK11の壺と蓋は口径が合うので、本来は壺の口に蓋をしていたと見られる。壺は高さ(33.5cm)が最大で、ほかの土器は高さ10~20cm前後が主体であるため、同じ副葬品といえるか問題があろう。土器棺との指摘もあるが、土器は底面から20~30cm浮いた状態で出土しており、なお詳細な検討が必要である。3個体出土した遺構は4基で全体の25.0%となり、壺2個と蓋のセット1か所、壺・鉢・壺のセット1か所、壺2個と壺のセット2か所である。蓋は別として最も遺跡から多く出る壺・壺の器種で構成される。4個体出土した遺構は1基・SK6のみで全体の6.2%、壺1個と壺3個のセットである。このSK6の特異性が際立つ。SK6は検出された土坑墓の中で最も小規模ながら、最多の4個体の土器が出土している。この土器は副葬品として特別に作られており、すべて高さ10cm前後の小型土

遺構番号	規模(長軸×短軸×深さ)cm	平面形	断面形	方向	土器番号	器種	高さ	穿孔	2次造成	備考
SK5	151×138×31	方形	半円形	N-10°-E	1	壺	(8.7)	-	-	
					2	壺	15.5	-	○	
					3	壺	10.7	-	-	
					4	壺	10.8	-	-	
					5	壺	10.0	-	-	
					6	壺	8.7	-	-	
					7	壺	-	-	○	SK14を切る
					8	壺	11.0	-	○	
					9	壺	4.1	-	-	
					10	壺	(33.5)	-	-	
					11	壺	5.7	-	-	
試掘8T	-	-	-	-	12	壺	25.2	-	○	
SK7	II類 112×86×45	楕円形	台形状	IV群 N-51°-W	13	壺	24.2	○?	○	
SK11	180×110×25	楕円形	弧状	III群 N-73°-E	14	壺	15.0	-	-	
SK12	236×105×38	楕円形	弧状	I群 N-3°-W	15	鉢	7.3	-	-	
SK14	-×-×0.3	-	弧状or半円	-	16	台付鉢	12.1	-	-	SK7に切られる
SK25	I類 150×73×8	楕円形	弧状	II群 N-28°-E	17	壺	13.7	-	-	
SK26	I類 48×72×6	楕円形	弧状	II群 N-42°-E	18	壺	14.7	-	○	
SK29	I類 153×68×20	楕円形	台形状	II群 N-36°-E	19	壺	(12.4)	○	-	
SK30	II類 126×86×33	楕円形	弧状	II群 N-25°-W	20	壺	(9.3)	-	○	
SK32	140×90×48	楕円形か不明	台形状	IV群 N-67°-W	21	台付鉢	(12.6)	-	○	
SX2	-×70×14	-	弧状	-	22	壺	13.2	○?	-	
土器集中4	-	-	-	-	23	高杯	4.9	-	-	
土器集中10	242×203	楕円形	-	-	24	壺	6.5	-	-	
土器集中31	50×40	楕円形	-	-	25	壺	(9.7)	-	○	
					26	壺	13.4	-	○	
					27	壺	15.9	○	-	
					28	壺	11.1	-	○	
					29	壺	10.8	-	○	
					30	壺	-	-	○	
					31	壺	(12.8)	-	-	

第4表 弥生時代遺構観察表

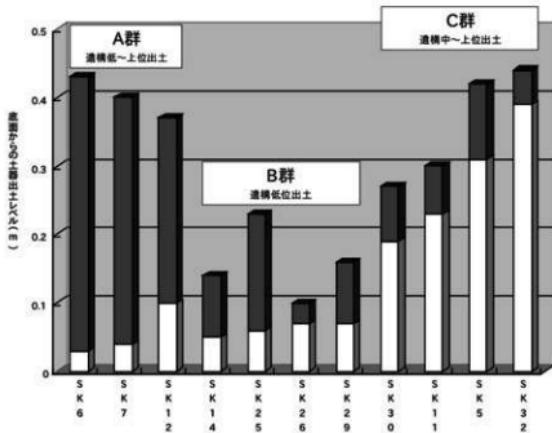
器である。ほかの土坑墓が日常使いの糞を副葬していることが多いのとまったく様相が異なる。副葬品として土器を作るに当り、台付鉢や高杯・無頸壺を作らなかつたことは、また別の意味があるのかもしれない。土坑の長軸が0.8mということからいえば、現在の乳幼児の身長に相当するが、SK6を乳児用の墓とするにはこれ以上の根拠はない。土坑墓に収める土器の器種（煮炊具、貯蔵具、供献具等）の違い、数量の差が時期差を反映しているのか、階層差につながるのかは重要な問題であるが、現段階では判断しえない。

### 5) 土器出土レベル

第21図は土坑底面に対し土器がどのレベルから出土したかを示したものである。柱状図のうち着色してある部分が土器の出土レベルを示す。上限は、最上位出土土器の上部レベル、下限は最下位出土土器の下部レベルを示し、遺構最低部からどの高さに位置するかを図式化した。柱状図のうち白い部分が短いほど遺構底部から土器が出土し、長いほど遺構底部から離れて出土したといえる。また、柱状図のうち着色してある部分が長いほど、土器は下層から中・上層にわたって位置していたと考えられる。なお、土器出土上面が遺構確認面であるケースが多いため、本来の遺構掘り込み面は不明である。そのため必ずしも遺構上層からの土器出土とは言い切れないが、ここでは分類上、遺構低位・中位・上位の3段階で遺物出土状況を分類した。

A群はほぼ遺構底部から上層にわたって土器が出土したケースである。SK6は、遺構確認面で土器が1個体出土し、これが指標となって検出された。遺構の長軸に沿って、斜めに4個体の土器が出土し、最下部の土器は遺構底部付近から出土している。SK7も遺構上位・中位・下位にかけてそれぞれ3個体の土器が出土している。SK12は、遺構上位から中位にかけて土器の大半が出土しているが、一部底面に近い位置からも土器片が出土している。

次にB群であるが、遺構底面に近い位置でまとめて土器が出土したもので、逆に言えば、土器が出土し遺構確認を行ったところ、遺構はほぼ底部を残すのみの状態であったという検出パターンである。



第21図 土坑底面からの土器出土レベル

SK26・29は土器1個体の出土である。SK25は土器3個体が出土したが、土器出土レベルの範囲が上下に長いのは、土器が完形で正位に近い状態で出土したためである。

C群は、土器出土面=遺構検出面から明らかに遺構底面が深いところに位置していたパターンである。SK5は、土器が出土した面より約0.3m下がった面に底面が検出された。遺構確認面の更に下層の砂層まで掘りこんで形成していることが確認できた。SK32は遺構の平面形は不確定な部分があるが、層位確認ベルト上で深さ約0.4mの断面プランを検出できた。SK5と同じく砂層を掘りこみ、掘り返しの砂が埋め土に混入していた点が特徴的であった。

このように土器が底面から出土したものが少ないと考えられる。

SK14・29から出土した台付鉢は逆位で出土したため、頭部へ被せた可能性を考えたが、ほぼ底面から出土しており、遺体の頭部付近または足元に置いた可能性のほうが高いようである。更にSK29出土の台付鉢は、本来煮炊具ではないにも関わらず、ススが付着していること、台内面が赤彩されていること等は埋葬に関わる儀式の一端を窺わせる。

## 6) 土坑墓の特徴

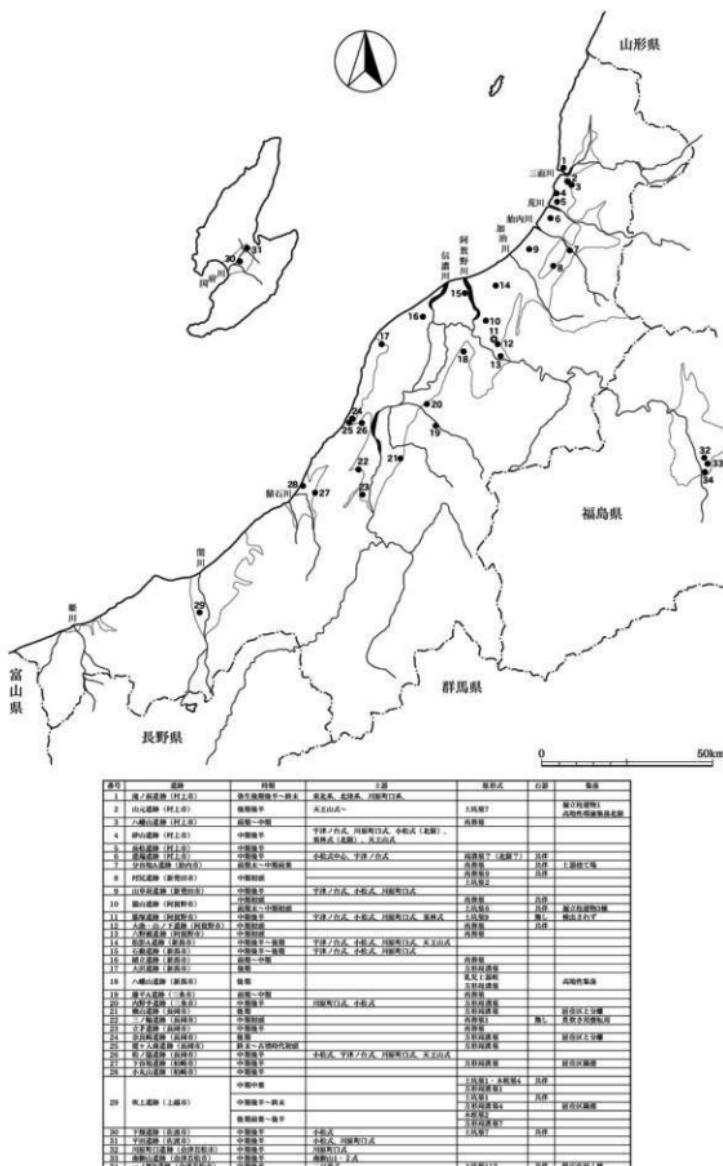
本遺跡の土坑墓の特徴をまとめると以下のようになる。

- ① 狹い範囲（約10×10m）に集中し、地形に影響されていると思われるが全体として南北方向を意識して並ぶ。墓標は無い。
- ② 土坑墓には1～4個の小型土器を収めるが、石器は無い。木棺は検出していない。
- ③ 土器の一部には、体部あるいは底部に穿孔するものがあるが、全体を打ち欠き削ったものは無い。一点のみ台付鉢の脚内面を赤彩するものがある。
- ④ 土器はほかの土坑墓出土土器と接合するものはほとんど無い。
- ⑤ 土器の時期から弥生時代中期後半の短期間に形成された墓域である。
- ⑥ 遺跡の位置が阿賀野川流域に所在することから、これまで土器は東北南部の影響が強い地域であると考えられていたが、東北北部を主体に東北南部、北陸、中部高地の影響も見られ、広範な交流の様子が窺える。
- ⑦ 墓域を形成した集落の位置は不明である。

## B 弥生時代の墓制

県内及び隣県の弥生時代の墓制と中期の主要遺跡を確認する（第22図）。ここでは、木棺を伴わない土坑墓と伴うものを区別して前者を土坑墓、後者を木棺墓と呼ぶこととする。本遺跡の前の段階から見ていくと前期～中期中葉に東日本に分布する壺棺再葬墓（以下、再葬墓とする）が約30例あり、そのうち新潟県内には10例<sup>1)</sup>が確認されている。最北の村上市八幡山遺跡（3）、胎内市分谷地A遺跡（7）[伊東2003]、新発田市村尻遺跡（8）[関ほか1982]、新潟市緒立遺跡（16）、三条市藤平A遺跡（19）、最南の長岡市立矛遺跡（23）、三ノ輪遺跡（22）[駒形1991]と本遺跡が所在する阿賀野市に六野瀬遺跡（13）

1) 再葬墓は縄文時代晚期中頃の糸魚川市寺地遺跡や縄文時代晩期末の新潟市鳥屋遺跡等に再葬の例が見られるが、ここでは弥生時代に限定した。



第22図 弥生時代主要遺跡と墓制

【杉原 1968】、猫山遺跡（10）【上原 1959、古澤 2003】、大曲・山ノ下遺跡（12）【北越考古学研究会 1989、石川 2000】である。

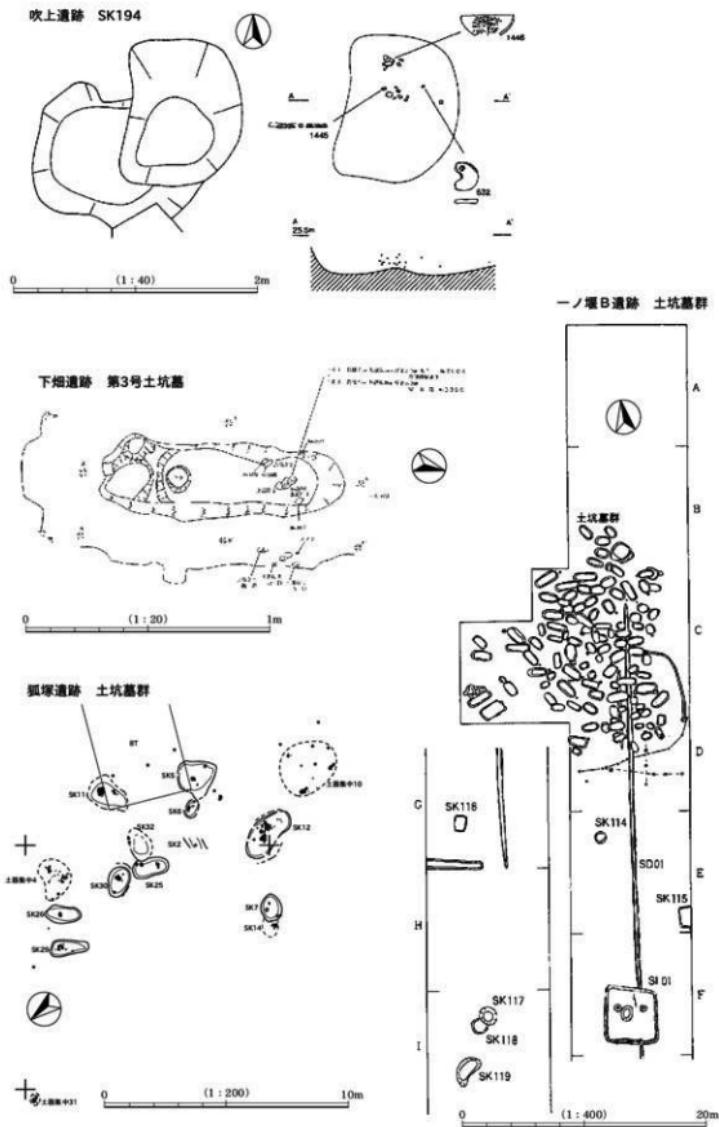
本遺跡と同時期の中期後半以降の墓制は、北陸系の小松式土器が定着する頃から方形周溝墓となる【石川 1999】。柏崎市下谷地遺跡（27）【高橋 1979】、三条市内野手遺跡（20）【金子 1999】等である。阿賀野市内には方形周溝墓は発見されていない。村上市道端遺跡（6）【前川ほか 2006】は小松式を中心とする中期後半の遺跡であるが、2基の墓及び可能性のある土坑が検出された。1基は3号周溝の木棺墓で小松式の土器が出土した。楕円形の周溝の長径は10.6m、短径は4.0m、土坑の長径は3.4m、短径1.5m、確認面からの深さ0.24m、木棺の長径は1.56m、短径0.8m、確認面からの深さ0.2mである。もう1基墓の可能性があるのは2号周溝1号土坑である。土坑直上から管玉と土器集中（小松式、宇津ノ台式）が検出され、土坑内から石鐵が出土している。隣接して竪穴住居も検出されている。この2例は方形周溝墓が楕円形に崩れたものであろうか。方形周溝墓の類とすれば北限の可能性があるが、類例を待って再検討が必要である。方形周溝墓は後期後半にも新潟市八幡山遺跡（18）等で検出されている。

次に土坑墓を確認する（第23図）。土坑墓は縄文時代以降の最も一般的な葬法であり、再葬墓の時期にも村尻遺跡で1次葬と見られる土坑墓1基（12号土坑）と猫山遺跡で土坑墓6基が検出されている。つづく中期後半の土坑墓は、佐渡市下畠遺跡（30）で1基（第3号墓）検出された。平面形は長楕円形で長軸1.94m、短軸0.6m、深さ0.85mで土器片と碧玉片が出土している。北端の壁には墓標と見られる川原石が2個出土している。頭部の位置を表している可能性もある。ほかに上越市吹上遺跡（29）で中期後半から終末の土坑墓1基（SK194）が方形周溝墓と共に検出された。SK194は平面形が楕円形で長軸1.20m、短軸0.92m、深さ0.18mで栗林式の赤彩土器と蛇紋岩製の勾玉が出土した。現時点での本遺跡と同時期の類例は、下畠遺跡の第3号墓、吹上遺跡のSK194の2基に限定されるようである。中期後半の墓制は、中部高地では木棺墓が採用され、会津地方では再葬墓はすでになく、土坑墓に乳児用土器棺が伴う墓制となっている。福島県会津若松市の一ノ坂B遺跡（34）【芳賀ほか 1988】では、112基の土坑墓と隣接して竪穴住居1棟が検出されている。112基中26基に近接して丸太杭を打ち込んだ墓標と見られるピットが検出されている。土器型式が二ツ釜式期であることから本遺跡より1段階古い様相を示す。土坑墓の上面を覆って土器が密集して出土し、土器は土坑墓間での接合が多数確認されている。また、土器は日常使用していたものを利用し、それを土坑内に収めるときに底部に穿孔しており、本遺跡との共通性が見られる。土器以外では、床面から管玉や勾玉が出土したものもある。

本遺跡は、数少ない弥生時代中期後半の土坑墓として貴重な調査例となったが、集落との関係性が全くつかめなかった。しかし、阿賀野バイパス関係の調査は継続されるため、類似の墓域や集落が発見される可能性も残されており、今後の調査の進展に期待したい。

### C リン酸・カルシウム分析結果について

本遺跡の下層で検出した遺構は、土器の出土状況等から弥生時代中期後半の土坑墓の可能性が高い。このことから遺構16基中12基について土坑覆土をサンプリングし、リン酸・カルシウム分析を行い、土坑墓の可能性を探った。詳細は第IV章5節を参照願いたいが、結果的にSK7・SK25・SK30で基本層と比較し、高い数値を示す地点があった。しかし、相対的に低い数値を示す地点も多く、SK7・SK25・SK30のみの結果を取上げて土坑墓であることが裏付けられたとするには、問題があろう。したがって、遺体の埋葬状況を推測するのも慎重でなければならない。



第23図 弥生時代中期後半土坑墓の例

## 要 約

### 庚塚遺跡

- 1 庚塚遺跡は、新潟県阿賀野市大字寺社字庚塚3221-1番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川右岸の沖積地上、標高約11mに立地する。
- 2 調査は、一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、平成19年8月6日～10月22日まで実施した。調査面積は3,327m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、古代の旧河川跡1条、旧河川に伴う古代の溝状遺構1条、古代の土坑3基、ピット2基、中世以降の溝状遺構4条、性格不明遺構2基を検出した。

### 狐塚遺跡

- 1 狐塚遺跡は、新潟県阿賀野市大字熊居新田字狐塚742番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川右岸の沖積地上、標高約12mに立地する。
- 2 調査は、一般国道49号阿賀野バイパス建設に伴い、平成19年10月1日～12月26日まで実施した。調査面積は2,067m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、上層・下層の2面にわたって遺跡が存在することが明らかになった。上層からは中世の遺構・遺物が、下層からは弥生時代の遺構・遺物が検出された。
- 4 上層で検出された遺構は、掘立柱建物7棟、井戸6基、土坑17基、溝状遺構14条、性格不明遺構6基、ピット340基である。遺構は調査区北西、南東に集中した。
- 5 中世遺構に伴う遺物は少ないが、遺物から遺跡の年代は12～14世紀と考えられる。
- 6 下層からは、弥生時代中期後半の土器を作った土坑11基、性格不明遺構1基、土器集中3か所を検出した。
- 7 土坑からは、1～4個体の土器が出土し、正立した状態や直線状に並んだ状態での出土状況が注目される。
- 8 土坑は土器の出土状況から、土坑墓の可能性が高いと考えられる。
- 9 土器は小型の壺、甕、鉢、蓋であり、割れや欠けがほとんど見られない土器もあった。土器が大きく四散したものはまれで、ほぼ一個体がその場につぶれた状況が多かった。
- 10 器形や文様には、東北北部系（宇津ノ台式）、東北南部系（川原町口式）、北陸系（小松式）といった各地方の特色が見られる。一地方の影響のみを色濃く残している土器ではなく、一つの土器に複数地方の影響がみてとれる。
- 11 土器は全般に高い完形率を誇るが、底部が打ち欠かれ欠損している土器も存在した。石器は出土していない。

## 引用・参考文献

- 相沢 央 2003 「第2項出土文字資料」『笛神村史資料編1 原始・古代・中世』新潟県笛神村
- 阿部泰之 2006 「大屋敷遺跡」『東浦原都史資料編1原始』東浦原都史編さん委員会編
- 荒川隆史 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡』新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 1999 「第3章第5節墓制」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 石川日出志 2000 「山ノ下遺跡」新潟県安田町
- 石川日出志 2003 「関東・東北地方の土器」『考古学資料大観1 弥生・古墳時代土器!』武末純一・石川日出志編 小学館
- 石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号
- 伊東 崇 2003 「分谷地A遺跡!」『新潟県黒川村教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 上原甲子郎 1959 「新潟県猪山遺跡調査の概要」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』
- 遠藤孝司 2003 「第2章第1節考古」『笛神村史資料編1 原始・古代・中世』新潟県笛神村
- 小田由美子 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第99集 堀越館跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子・高橋保雄 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第117集 赤坂山中世窯跡・赤坂山B遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真美 1999 「第4章第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 金子正典 1999 「内野手遺跡」『新潟県三条市内野手遺跡・経塚山遺跡市内遺跡発掘調査報告書』三条市教育委員会
- 川上真夫 1991 「堀久遺跡」新潟県笛神村教育委員会
- 川上真夫 2002 「笛神村文化財調査報告13 慶應遺跡」新潟県笛神村教育委員会
- 甲元真之 1984 「第六章弥生時代の墓制と社会」『弥生時代の知識』東京美術
- 駒形敏郎 1991 「三ノ輪遺跡」「瓜削遺跡・三ノ輪遺跡六右エ門清水遺跡・三貫梨遺跡」長岡市教育委員会
- 五頭山のおいたち編集委員会 1984 「五頭山のおいたちー地学ハイキングー」新潟日報事業社出版部
- 坂上有紀・田海義正・高橋保 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 平田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笠澤正史 2003 「吹上遺跡」新潟県上越市教育委員会
- 佐藤友子 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第164集 野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会
- 品田高志 1999 「中世土師器」『新潟県の考古学』高志書院
- 杉原莊介 1968 「新潟県・六野瀬遺跡の調査」『考古学集刊』第4卷第1号
- 閔 雅之 1982 「村尻遺跡!」新発田市教育委員会
- 鈴木郁夫 1986 「I 地形分類図」『新潟県下越地域土地分類基本調査 津川』新潟県農地部総合整備課
- 須藤 隆 1970 「秋田縣大曲市宇津ノ口遺跡の弥生土器について」『文化第33卷第3号』
- 高桑 登 1998 「山形県平田町新留窯跡出土の須恵器系中世陶器」『山形考古第6卷2号』
- 高橋 保 1979 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19 下谷地遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 保 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集 鴨深甲遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵

文化財調査事業団

- 高瀬信行・野崎 保 1981 「新潟平野東縁、五頭山地西麓の土石流発達史」『地質学雑誌第87号』
- 滝沢規則ほか 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相―村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心にして」『三面川流域の考古学』第2号 奥三面を考える会
- 田中 靖・丸山一昭 1999 「第3章第2項弥生中期後半」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 田村 裕 1989 「第三編八二 蒲原郡段鉄帳」『新津市史資料編第一巻原始・古代・中世』新津市史編さん委員会
- 鶴巻康志 2004 「土師器からみた中世の小地域図 新潟県阿賀北地方を中心に」『中近世土器の基礎研究XVII』日本中世土器研究会
- 寺村光晴ほか 1972 『下畠玉作遺跡第一次緊急調査概要』新潟県佐渡郡畠野町教育委員会
- 寺村光晴ほか 1973 『下畠玉作遺跡第二次緊急調査概要』新潟県佐渡郡畠野町教育委員会
- 中川成夫・倉田芳郎 1962 「新潟県北蒲原郡における二室址の調査」立教大学文学部史学研究室
- 中川成夫・川上貞夫・土井義夫 1973 「猿輪窯址群の調査」新潟県筆神村教育委員会
- 中澤 肇 1998 「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成9年度（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 芳賀英一ほか 1988 「第2編 一ノ坂B遺跡」『福島県文化財調査報告書第191集 一ノ坂A・B遺跡』福島県教育委員会
- 福海貴子 2005 「小松市八日市地方遺跡」『石川考古学研究会会誌第48号 弥生中期の集落』石川考古学研究会
- 藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表資料集』実行委員会
- 藤田 等 1987 「3.土壤墓—北部九州一」『弥生文化の研究8 祭りと墓と装い』金闇旭・佐原真編 雄山閣
- 藤巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟県考古学講話会会報』第3号 新潟考古学講話会
- 古澤妥史 2003 「第3編 猫山遺跡」『京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 大割遺跡・猫山遺跡・大曲川端遺跡』新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 北越考古学研究会編 1989 「新潟県安田町・大曲遺跡弥生時代再葬墓群の発掘調査」『北越考古学』第2号
- 前川雅夫ほか 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 道端遺跡V」新潟県教育委員会（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 前田清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学III』石川考古学研究会会誌第42号 石川考古学研究会
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して—」『北陸の考古学II』石川考古学研究会会誌第32号 石川県考古学研究会
- 丸山一昭 1998 「松ノ脇遺跡」和島村文化財調査報告書第6集 新潟県三島郡和島村教育委員会
- 水澤幸一・鶴巻康志 2003 「至徳寺遺跡」『上越市史叢書8 考古－中近世資料－』上越市史専門委員会考古部会新潟県上越市
- 水澤幸一 2001 「中条町埋蔵文化財調査報告第22集 船戸桜田遺跡2次」新潟県中条町
- 水澤幸一 2002 「中条町埋蔵文化財調査報告第24集 船戸川崎遺跡4次」新潟県中条町
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館
- 渡邊裕之 1999 「第3章第2節土器第1項弥生前期・中期前葉」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院

## 標準試験

断面 A : 穴心式<sup>a</sup> / 直方体

断面 B : 直方体 (小粒)

断面 C : 宽津ノ台式

断面 D : 川原町口高

石英 : 黑 : 金 : 金雲母 : 金 : 金雲母 : 金 : 金 : 长石 : 灰 : 灰 : 白云母 : 斜长石 : 斜长石

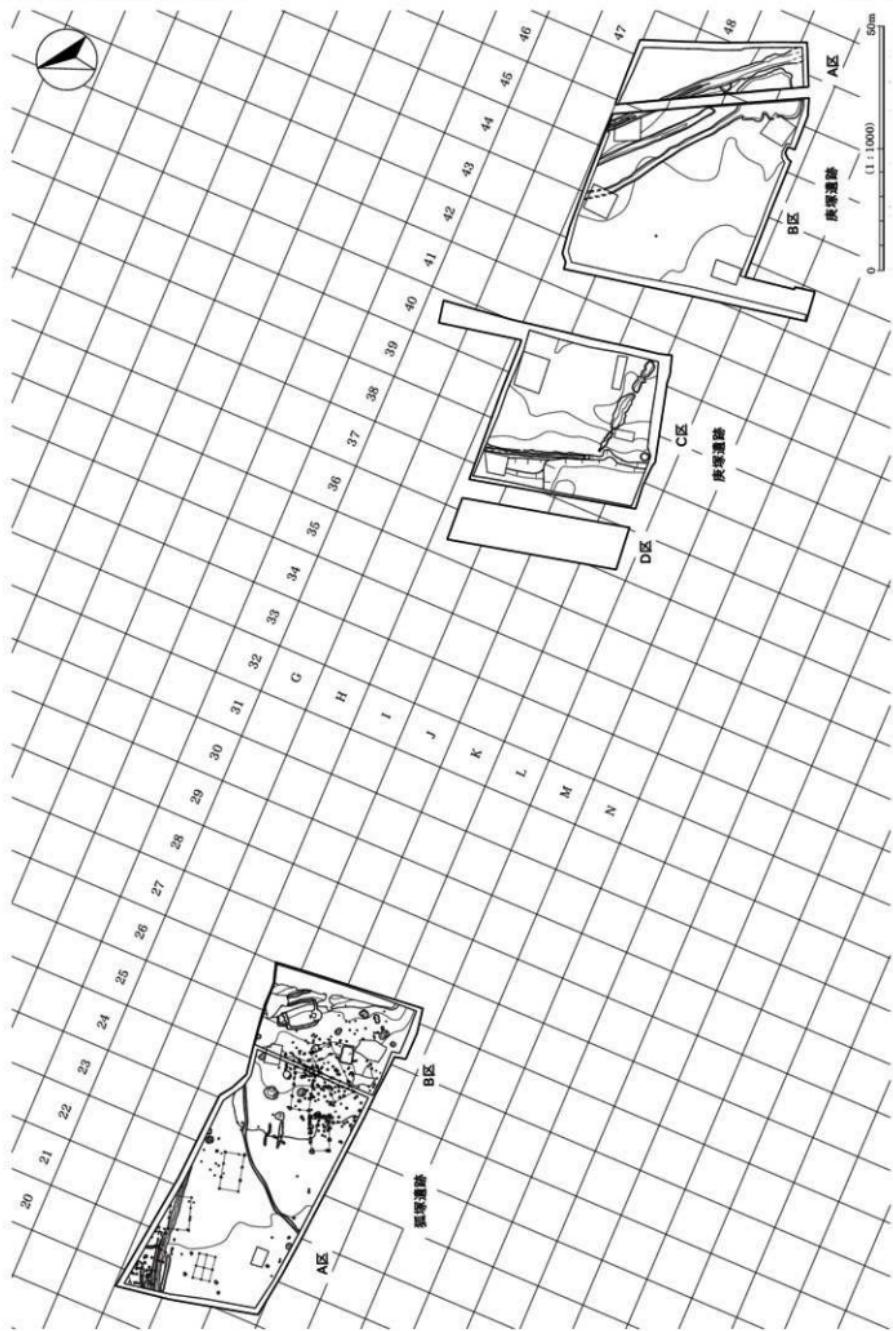
番号	直径	高さ	壁厚	底面	側面	分類	鉱物	目録	表面	測量・文種		備考	
										横幅	高さ		
1 22117- 21・22	SK 5	2.3 16.3 三. 20	1. 三.	要 II A B 手. 手.	要 I II C	金. 金. 金. 手.	10.4 (8.7)	—	浅褐色 01YH6/3	—	浅褐色 01YH6/3	ハケタのギザス、織田鉄文4號、ハケタ	
2 22117	SK 5	1.5 ~ 14. 通称NT	1	要 II A	C	長	14.5 14.5	6.0	褐色 01YH6/6	—	褐色 01YH6/3	淡褐色文、平行淡褐色文、矢印鉄文、斜鉄文、外表面：黒色、又々、内面：鐵化物付近。	
3 22116	SK 6	1. 4	1	砂 II A	A	金. 手.	6.6	10.7	4.0	褐色 01YH6/2	褐色 01YH6/2	褐色鉄文3號、織田鉄文4號（日本語）、織田鉄文3號、織田鉄文4號（日本語）、織田鉄文3號、織田鉄文3號、織田鉄文3號、織田鉄文3號	
4 22116	SK 6	3	1	要 II B I	A	—	8.8	10.8	4.0	褐色 01YH6/4	—	褐色 01YH6/4 9	淡褐色文3號、織田鉄文3號、織田鉄文4號、織田鉄文5號、織田鉄文4號、織田鉄文3號、外表面：平行鉄文1本透かす近、ケズ
5 22116	SK 6	5	1	要 I A I	A	金. 手.	8.2	10.0	4.2	褐色 01YH6/3	—	褐色 01YH6/3	平行鉄文2號、ケズ
6 22116	SK 6	6	1	要 I A I	A	金. 手.	7.5	8.7	4.2	褐色 01YH6/2	—	褐色 01YH6/2	平行鉄文2號、ケズ
7 2184	SK 7	2	1	要 II	C	長、英	—	—	5.0	褐色 01YH6/3	—	褐色 01YH6/3	外表面：黒色、又々、内面：鐵化物付近。
8 2184	SK 7	3	—	要 III A I	E	長	11.9	11.0	6.6	明褐色 01YH6/6	—	明褐色 01YH6/6	上細部にはモミガタがあり、外表面、黒色、又々、内面：鐵化物付近。
9 22111・12	SK 7	1	1	通 II A	B	金. 手.	ツマ ツマ	4.1	7.8	浅褐色 01YH6/3	—	浅褐色 01YH7/3	平行鉄文、平行淡褐色文3號、内面：手形、織田鉄文3號、平行鉄文、ナメル
10 22111・12	SK 11	通称NT	—	通 I B	—	金. 手.	3.6	—	ナメル	—	ナメル	ナメル	
11 22111・12	SK 11	通称NT	1. 三. ~ 25.	通 III - 25.	A	長	35.3	—	ナメル	—	ナメル	ナメル	
12	通称NT	—	—	通 III A	D	長	4.0	6.7	11.7	浅褐色 01YH6/3	—	平行鉄文10號 12.4 x 1.00、圓文RL、ハゲタ	平行鉄文4條（12本組）、浅褐色、平行鉄文10號 12.4 x 1.00、圓文RL、ハゲタ
13 21225- 22261	SK 12	12.22 ~ 30.34 ~ 30.41 ~ 44.4 ~ 47.14 ~ 54 ~	1	要 I B II	B	長	18.9	25.2	8.2	褐色 01YH6/4	—	褐色 01YH6/4	外表面：赤色、内面：平行淡褐色文、平行鉄文、ナメル
14 21225- 2281	SK 12	11 ~ 49. ~ 52. 55. 65. 67. 68	—	要 D. 通 III A	D.	長	—	—	5.8	浅褐色 01YH6/4	—	平行淡褐色文、ナメル	内面：多筋に付有り、内面：波状骨付有り、長部穿孔（4 x 4cm）
15 21225- 2281	SK 12	52	—	通 B	—	—	9.3	7.3	4.5	浅褐色 01YH7/1	—	—	外表面：赤色、内面：平行鉄文、ナメル
16 21224-	SK 14	—	—	平行B	III A	金. 手.	15.4	12.1	8.0	浅褐色 01YH8/3	—	浅褐色 01YH8/3	内面：明褐色付有り、内面：波状骨付有り、長部穿孔（4 x 4cm）
17 21115	SK 25	2	—	要 I II C	A	金. 手.	12.0	13.7	4.7	褐色 01YH6/2	—	褐色 01YH6/2	平行鉄文、手形、ナメル
18 21115	SK 25	3	—	要 I II C	A	金. 手.	13.3	14.7	6.1	平行 01YH6/3	—	平行 01YH6/3	平行鉄文、手形、ナメル
19 21115	SK 26	1	—	通 I	D	長	—	(12.4)	5.6	褐色 01YH7/8	—	褐色 01YH7/8	平行鉄文、手形、ナメル

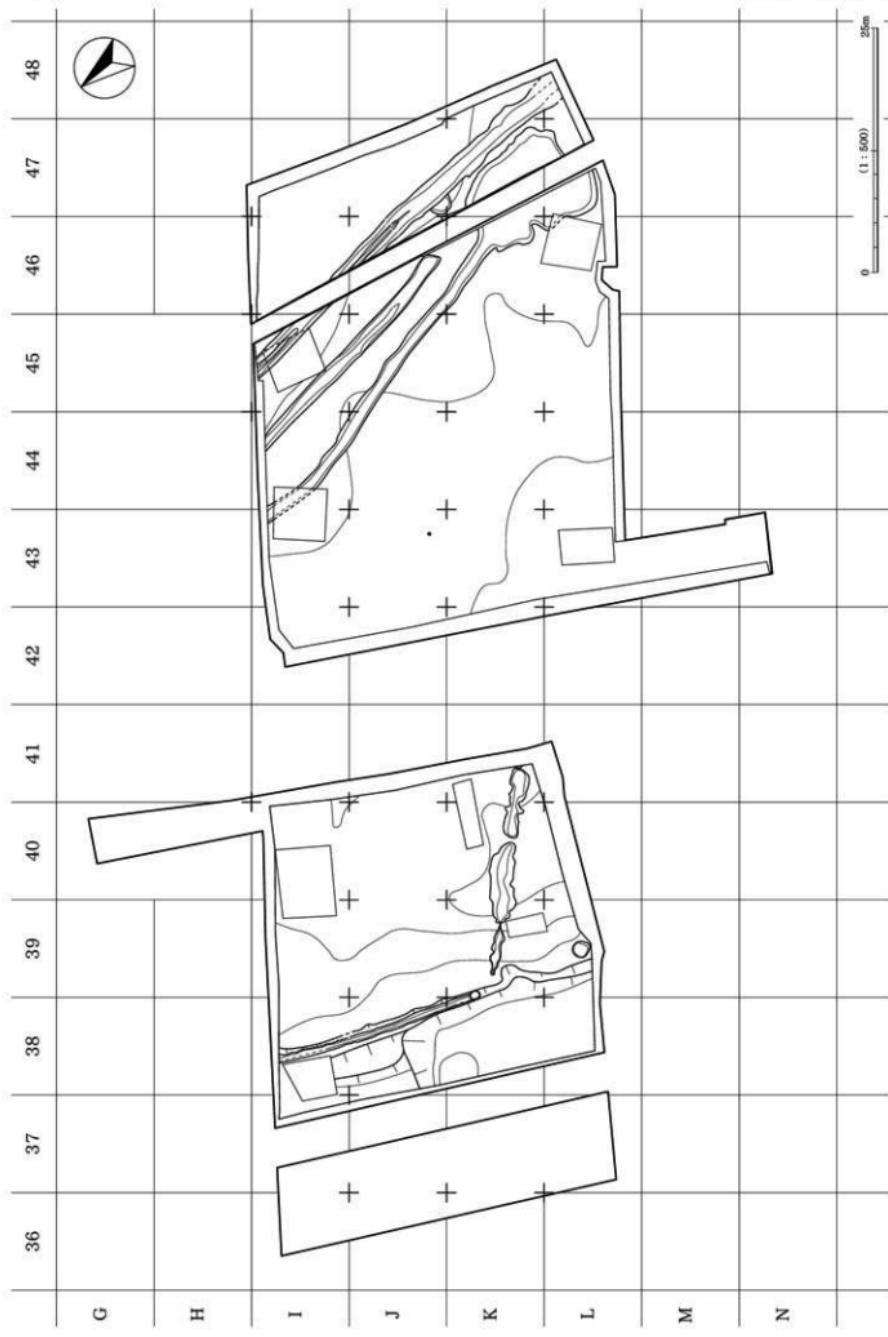
番号	グリッド番号	測量上浮標番号	所位	面積	分類	形状	植物	法量	面積	底質	測量・植生	備考
20	2114・9	SK5	26		裏	I A	D	葉、長	11.6 (9.3)	—	沈眠植物文1条、平行流植物文2条、(2本筋)、 裏色、5YR7/6、 底質:砂質土、5YR7/4 葉文2、ハサツア	裏色、5YR7/6、 底質:砂質土、5YR7/4 葉文2、ハサツア
21	2113・4	SK	29	1~9	台地	I A	C	葉、E	17.0 (12.6)	—	沈眠植物文1条、平行流植物文14条、 裏色、5YR7/6、 底質:砂質土、5YR7/4 葉文2、ハサツア	沈眠植物文1条、平行流植物文14条、 裏色、5YR7/6、 底質:砂質土、5YR7/4 葉文2、ハサツア
22	8・9		30	1~6、10~	裏	II A2	H	葉、E	10.4 (12.6)	—	葉文2、5YR8/2 底質:砂質土、5YR7/6 葉文2、ハサツア、タツノイ	葉文2、5YR8/2 底質:砂質土、5YR7/6 葉文2、ハサツア、タツノイ
23	10・15	SK5	30	20	裏	II A2	H	葉、E	4.8 (12.6)	—	葉色 SYR6/8 底質:砂質土、5YR7/6 葉文2、5YR7/6	葉色 SYR6/8 底質:砂質土、5YR7/6 葉文2、5YR7/6
24	22111	SK5	32	1、2	森林	—	金、E	4.2 (9.7)	—	浅緑葉色 10YR8/4 葉面正直	浅緑葉色 10YR8/4 葉面正直	
25	22115	SK5	2	1	樹	II B	A	金、E	7.1 (9.7)	—	緑植物文3条、(3本筋)、 葉面正直	緑植物文3条、(3本筋)、 葉面正直
26	22120		1~8	2、5、7、 集中	葉	III B	A	金、E	6.5 (9.7)	—	浅緑葉色 10YR7/3 葉面正直	浅緑葉色 10YR7/3 葉面正直
27	2114・6	1~8	4	~15、22、 42、43	葉	III - 2b	葉	III B	—	金、E 葉色 SYR6/6	金、E 葉色 SYR6/6	
28	2114・6	1~8	4	17、19、20、 25~32~ 34、36~ 38	葉	III - 2b	葉	II B2	R	金、E 葉色 SYR6/6	金、E 葉色 SYR6/6	
29	2114・6	1~8	4	~15、22、 42、43	葉	III - 2b	葉	III B	—	金、E 葉色 SYR6/6	金、E 葉色 SYR6/6	
30	2114・6	1~8	4	17、19、20、 25~32~ 34、36~ 38	葉	III - 2b	葉	II B2	R	金、E 葉色 SYR6/6	金、E 葉色 SYR6/6	
31	20310	1~8	4	~15、22、 23~28	葉	III - c	葉	I A	D	葉、長	— (12.8)	— (12.8)
											平行流植物文2条、 葉色 5YR7/6、 葉文1、ハサツア、 葉文1、タツノイ	平行流植物文2条、 葉色 5YR7/6、 葉文1、ハサツア、 葉文1、タツノイ

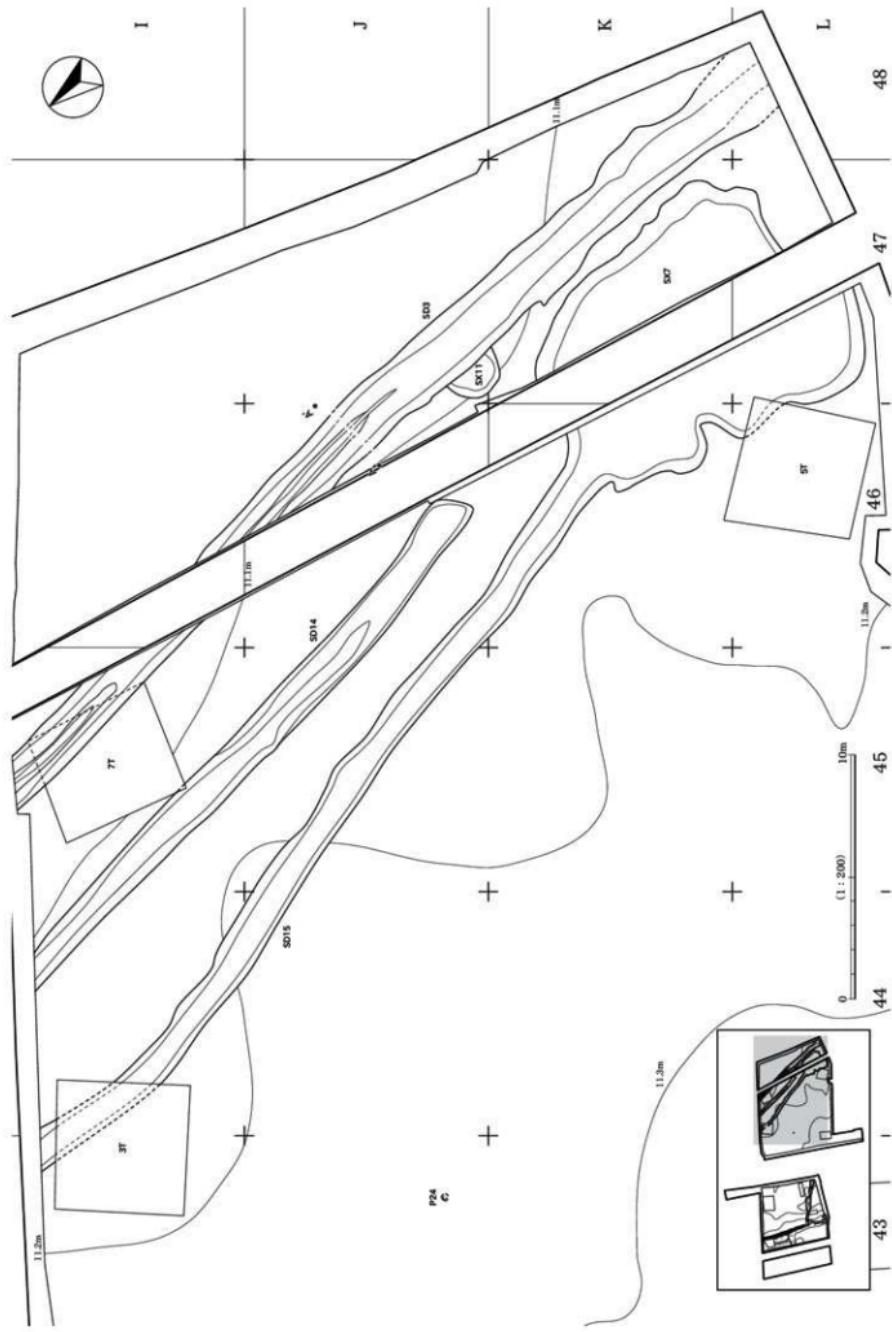
図 版

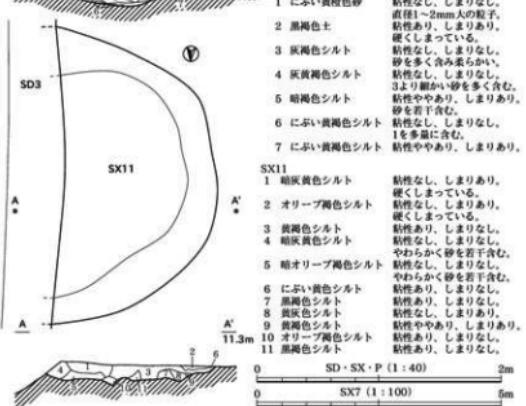
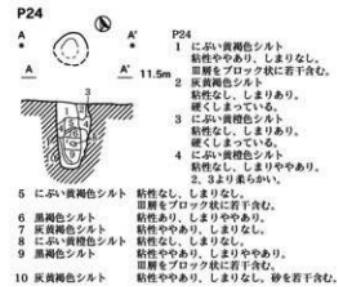
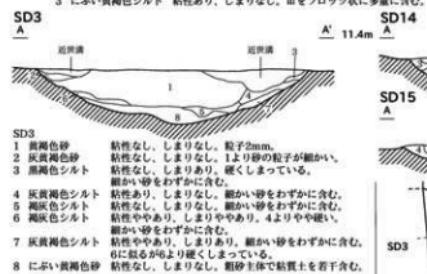
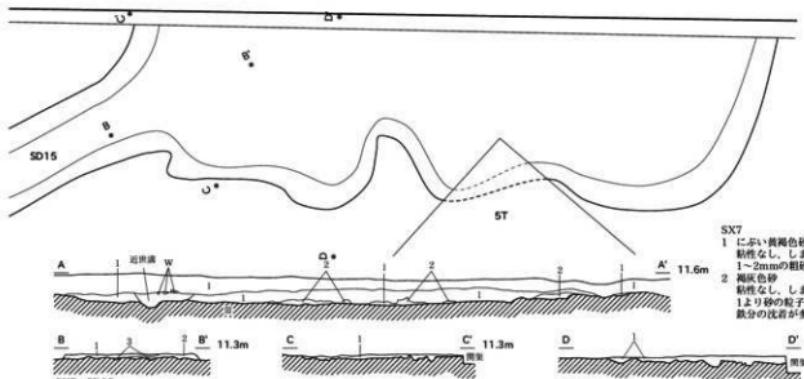
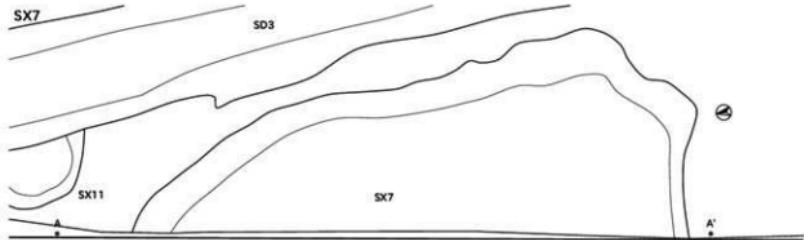
庚塚遺跡・狐塚遺跡 調査範囲図

図版 1





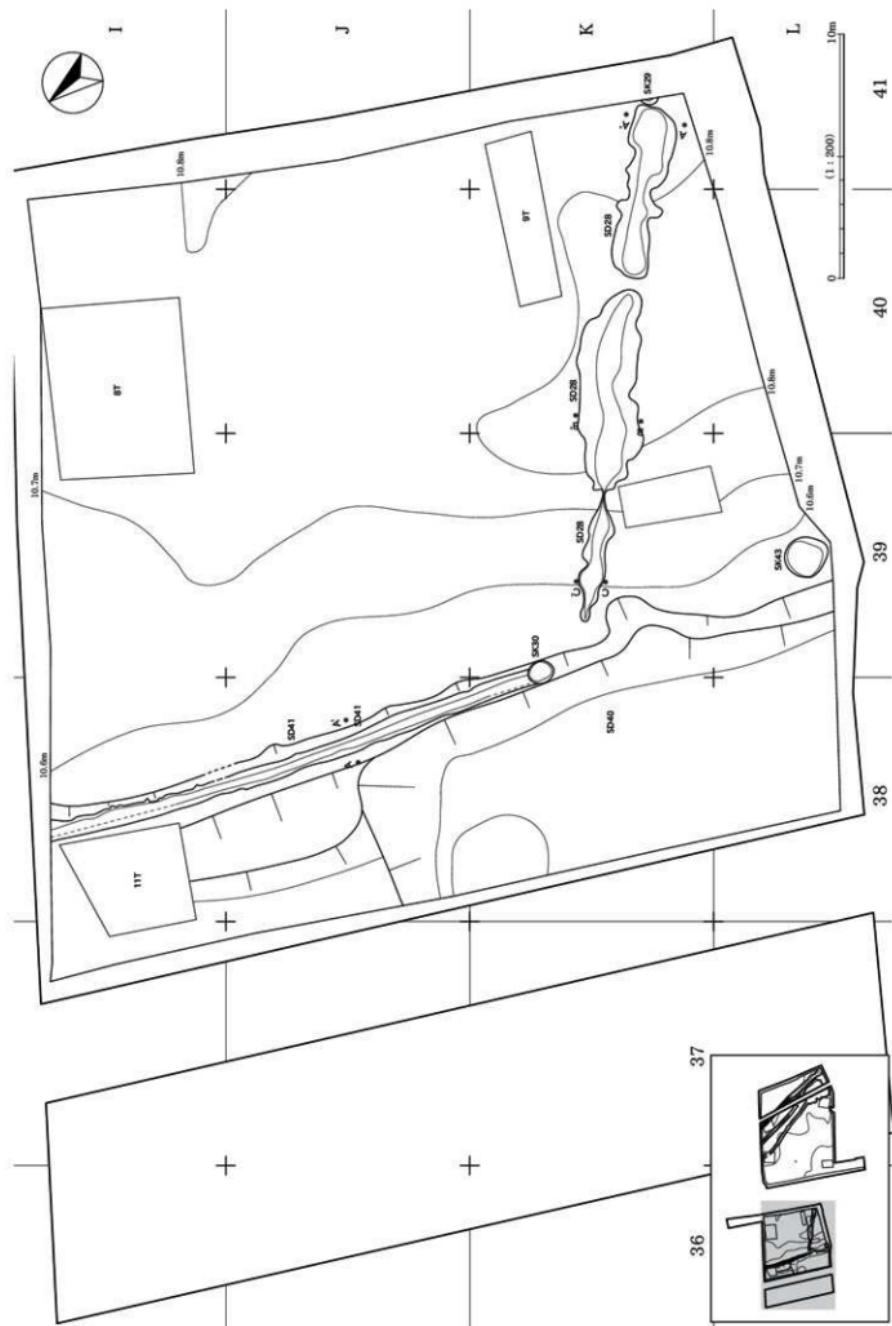


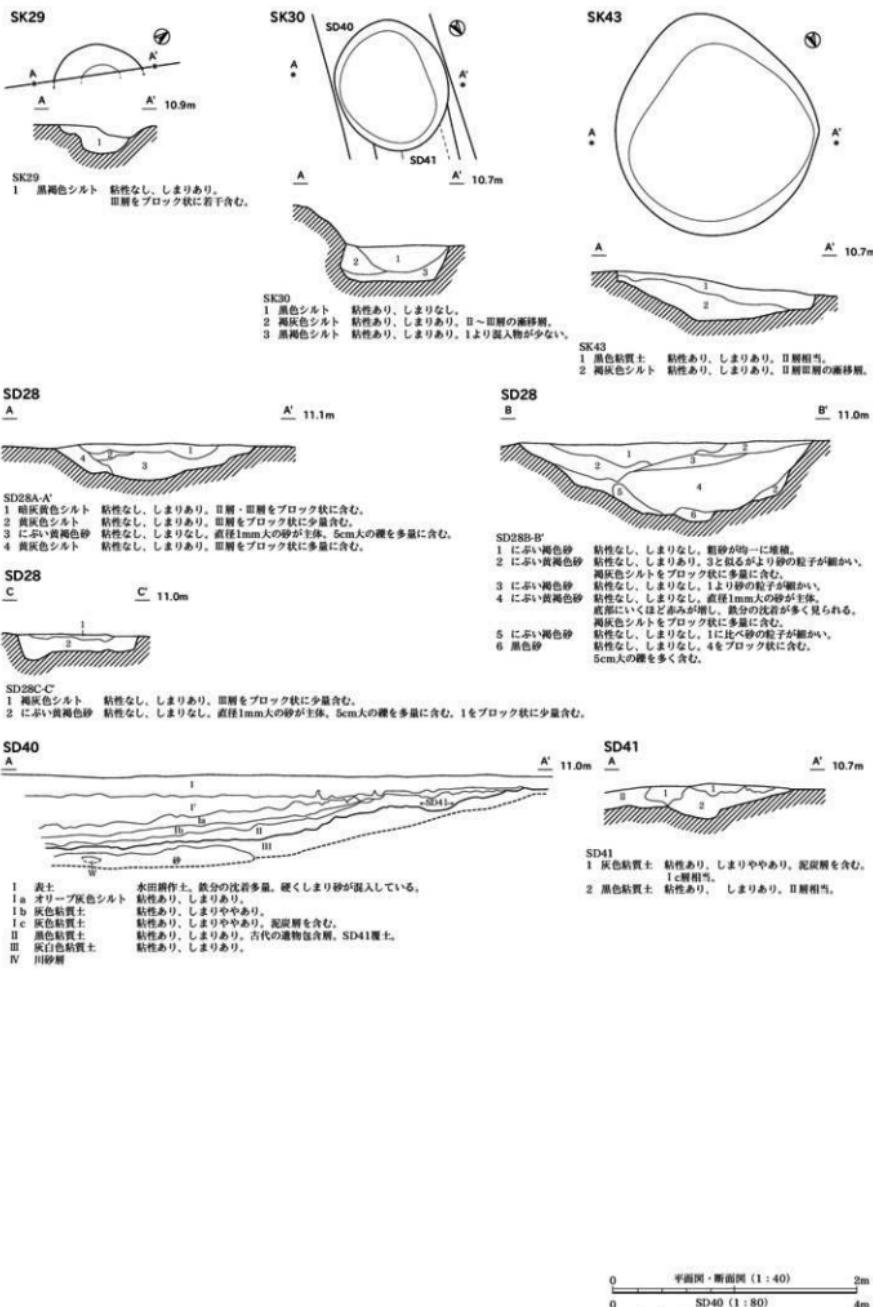


10 黄褐色シルト 粘性ややあり、しまりなし。砂を若干含む。

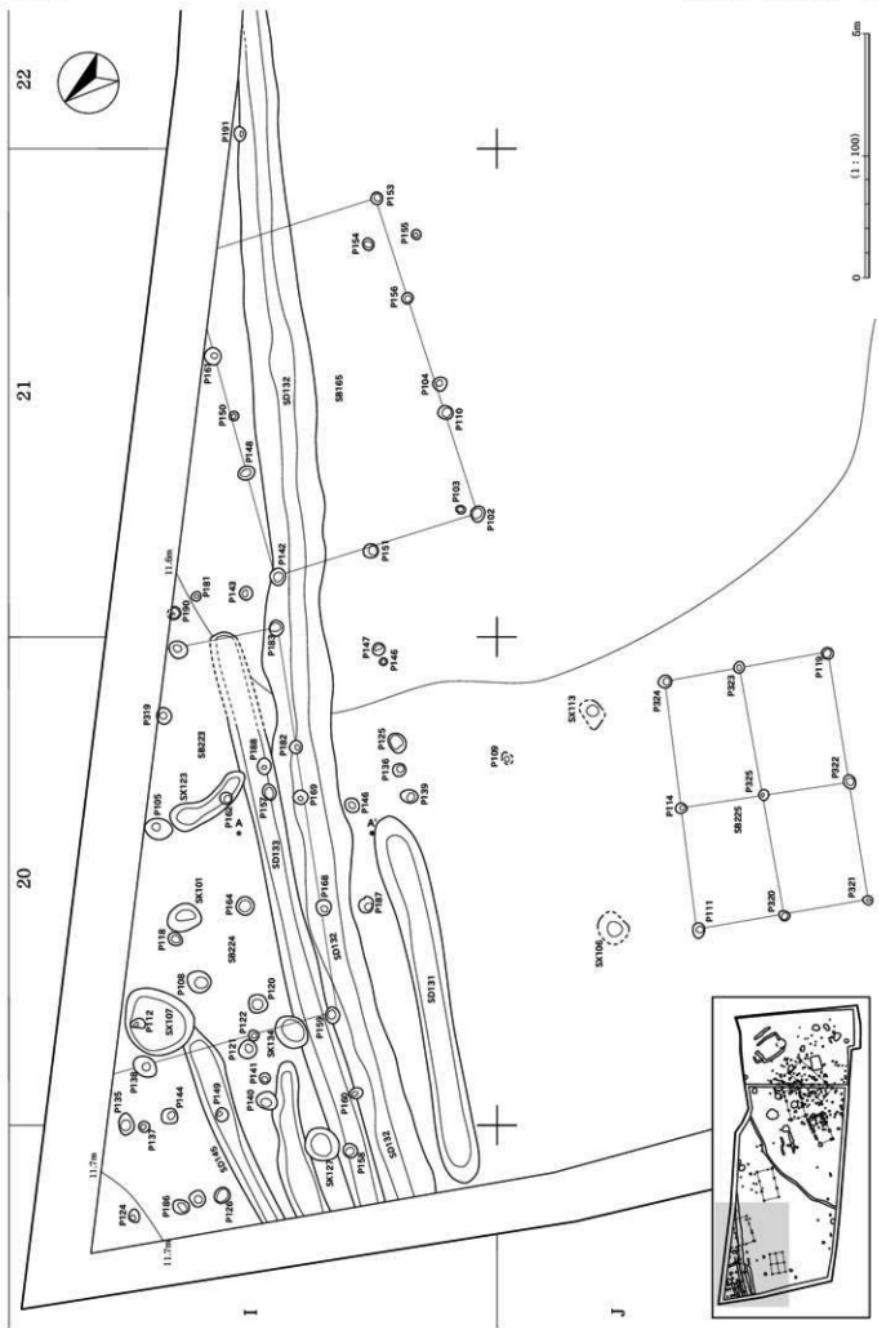
0 SD・SX・P (1:40) 2m

0 SX7 (1:100) 5m

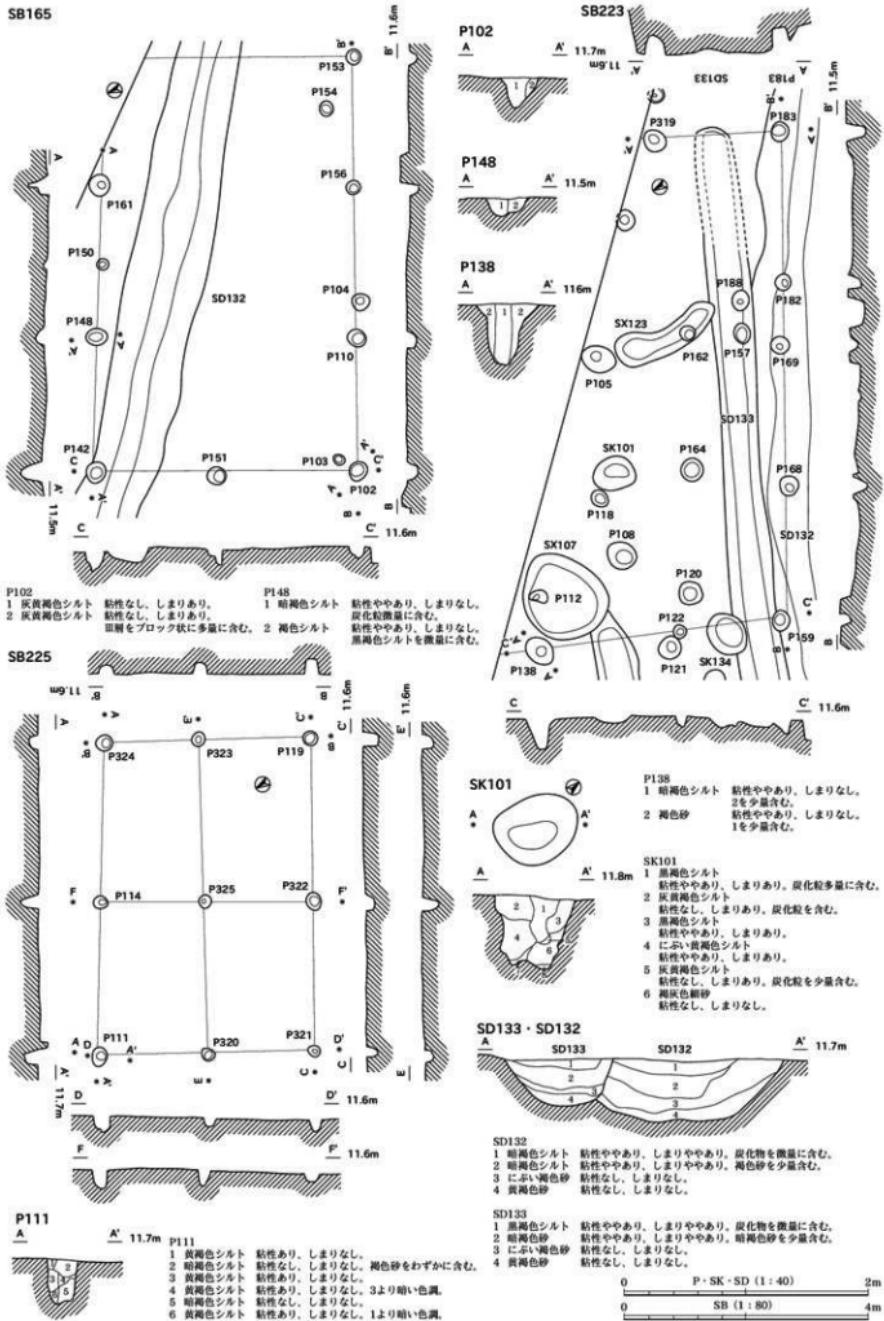






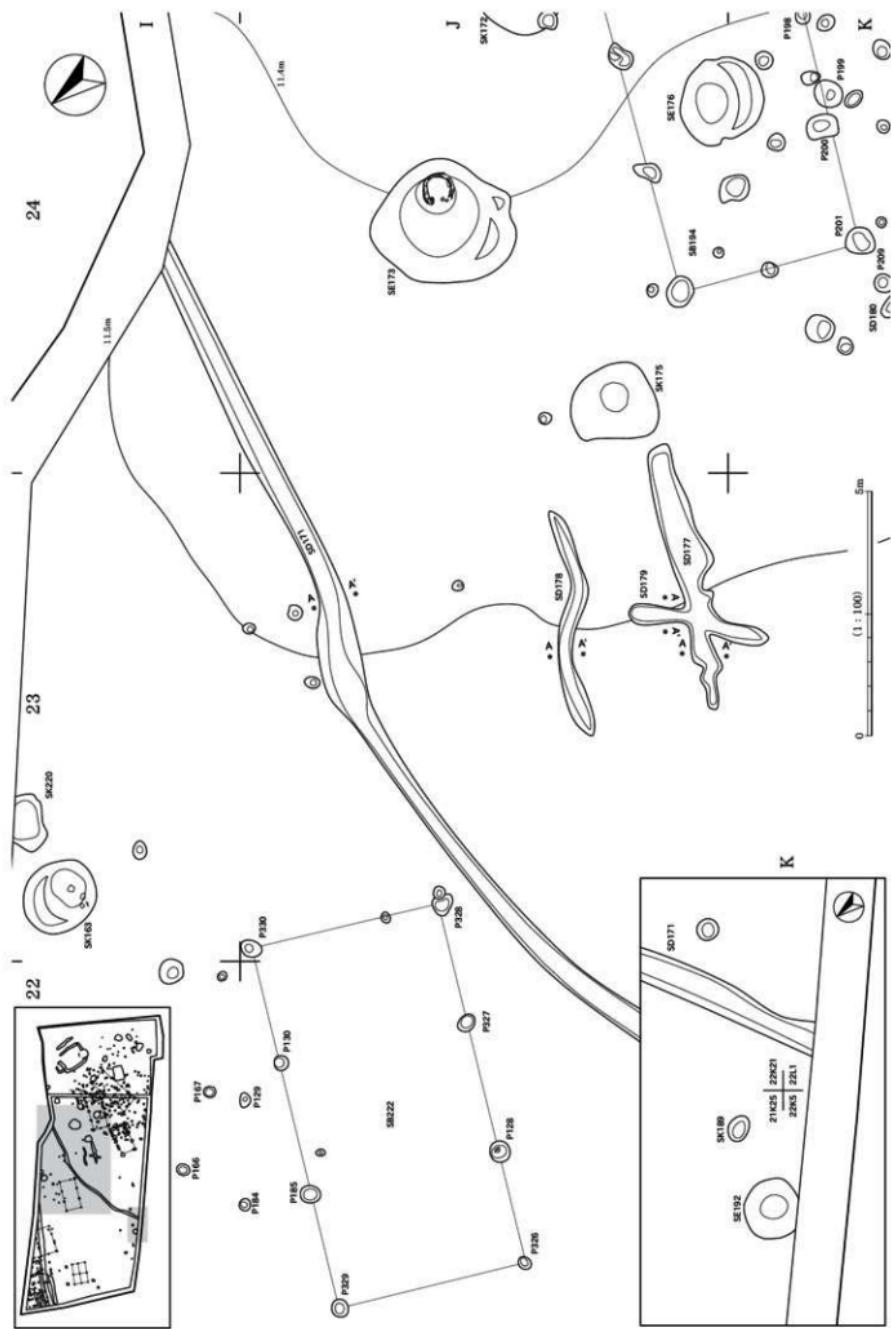


SB165

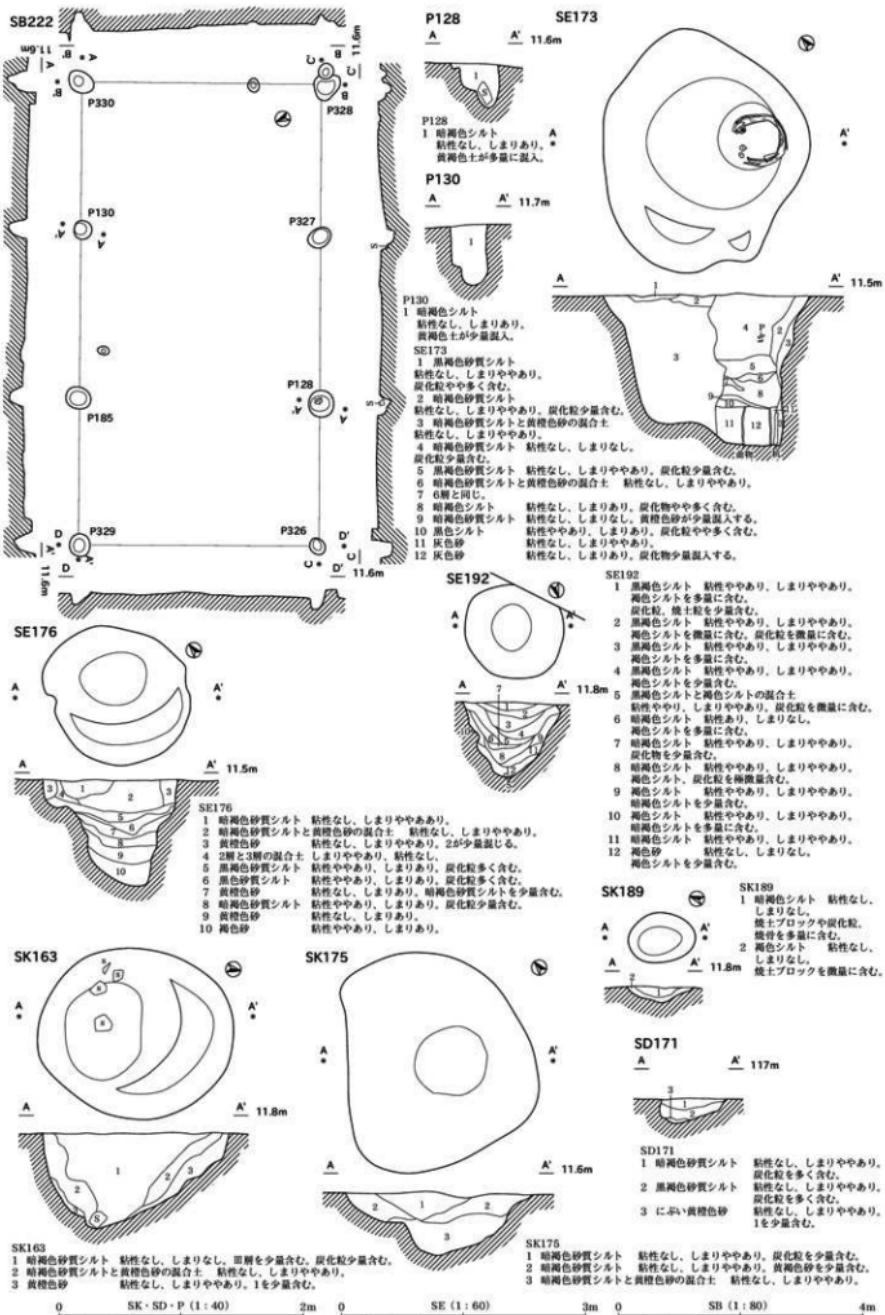


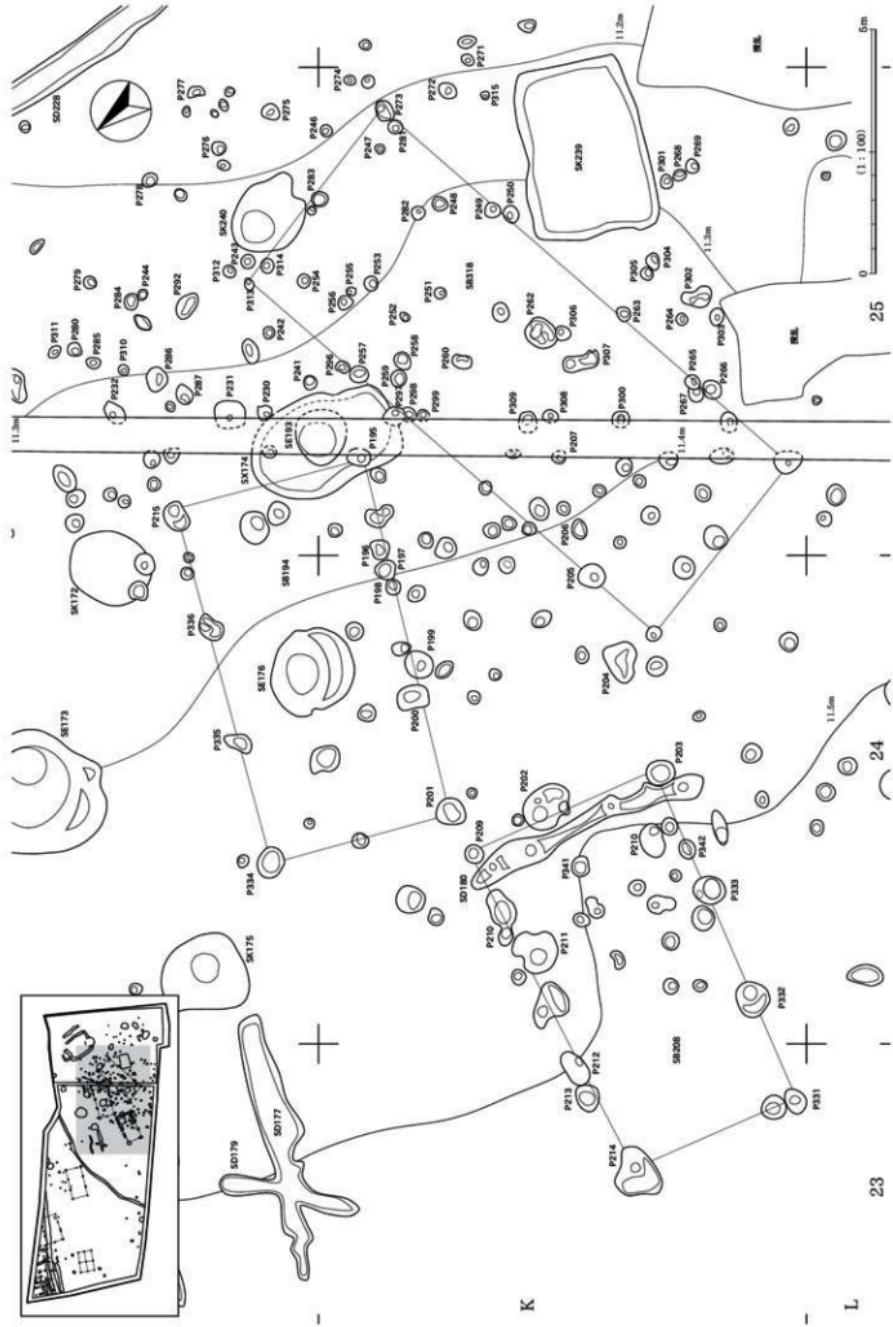
図版 10

狐塚遺跡 遺構分割図・中世(2)

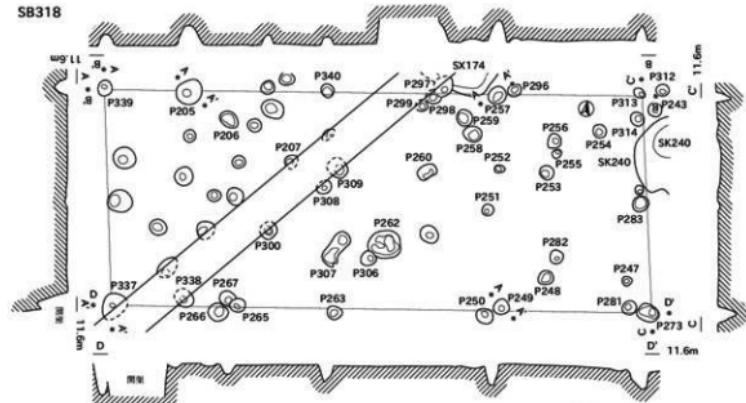


## 福塚遺跡 遺構個別図・中世(2)





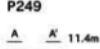
SB318



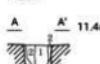
P205



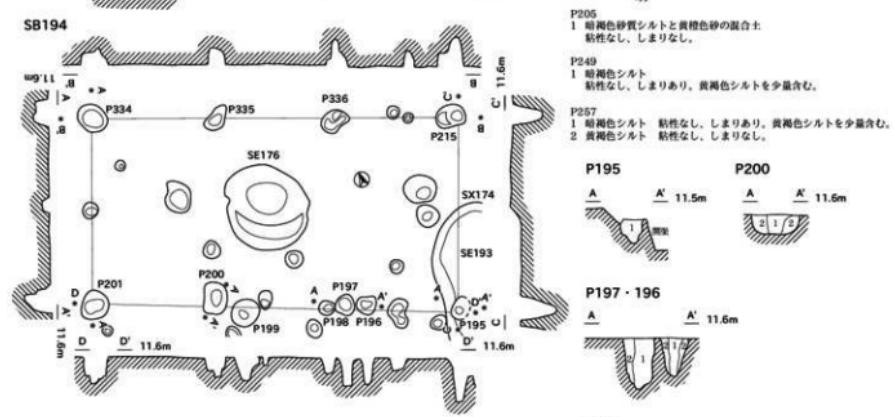
P249



P257



SB194

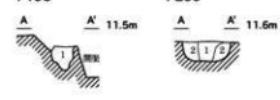


P205  
1. 黄褐色砂質シルトと黄褐色砂の複合土  
粘性なし、しまりなし。

P249  
1. 黄褐色シルト  
粘性なし、しまりあり。黄褐色シルトを少量含む。

P257  
1. 黄褐色シルト  
粘性なし、しまりあり。黄褐色シルトを少量含む。  
2. 黄褐色シルト  
粘性なし、しまりなし。

P195 P200



P197・196

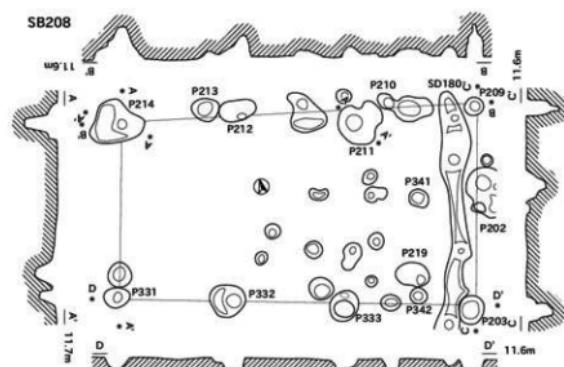


P195  
1. 黄褐色砂質シルト  
粘性なし、しまりなし。  
黄褐色砂を小ブロック状に含む。  
炭化粒少量含む。

P196・197  
1. 黄褐色砂質シルト 粘性なし、しまりなし。炭化粒少量含む。  
2. 1と黄褐色砂の複合土 粘性なし、しまりなし。

P200  
1. 黄褐色砂質シルト 粘性なし、しまりなし。炭化粒少量含む。  
2. 1と黄褐色砂の複合土 粘性なし、しまりなし。

SB208



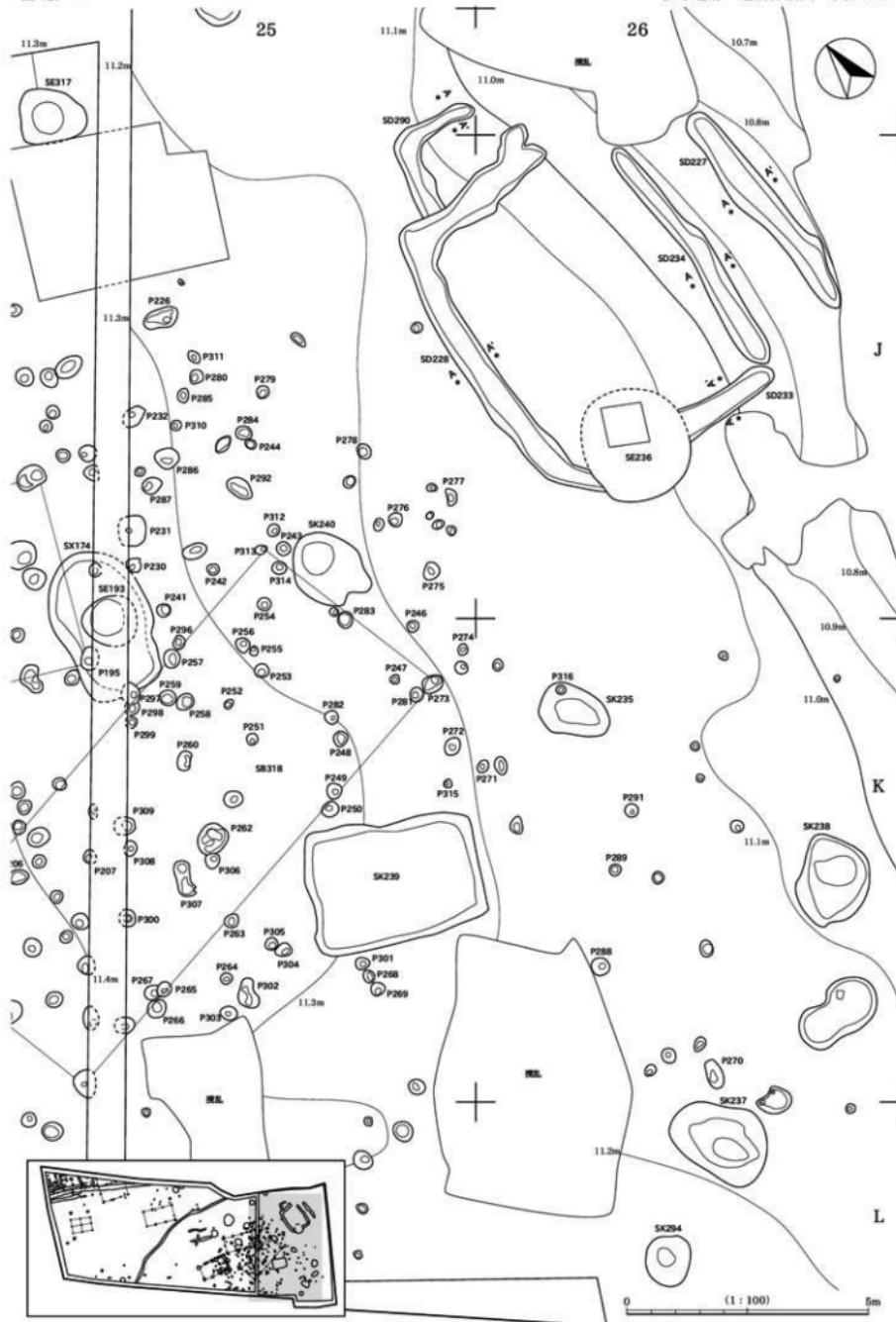
P211  
1. 黄褐色砂質シルト 粘性なし、しまりなし。炭化粒少量含む。

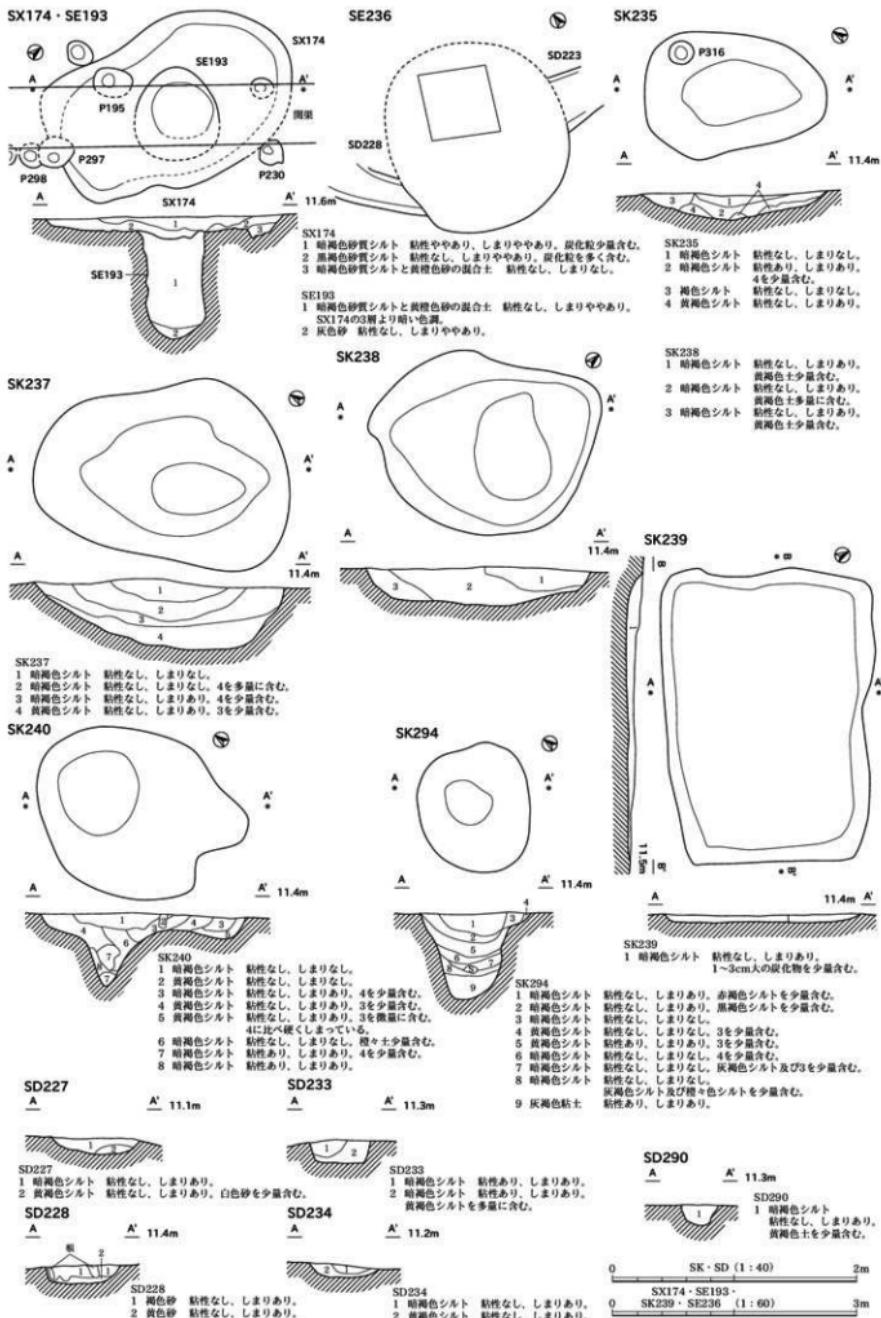
P214  
1. 黄褐色砂質シルト 粘性なし、しまりなし。炭化粒少量含む。

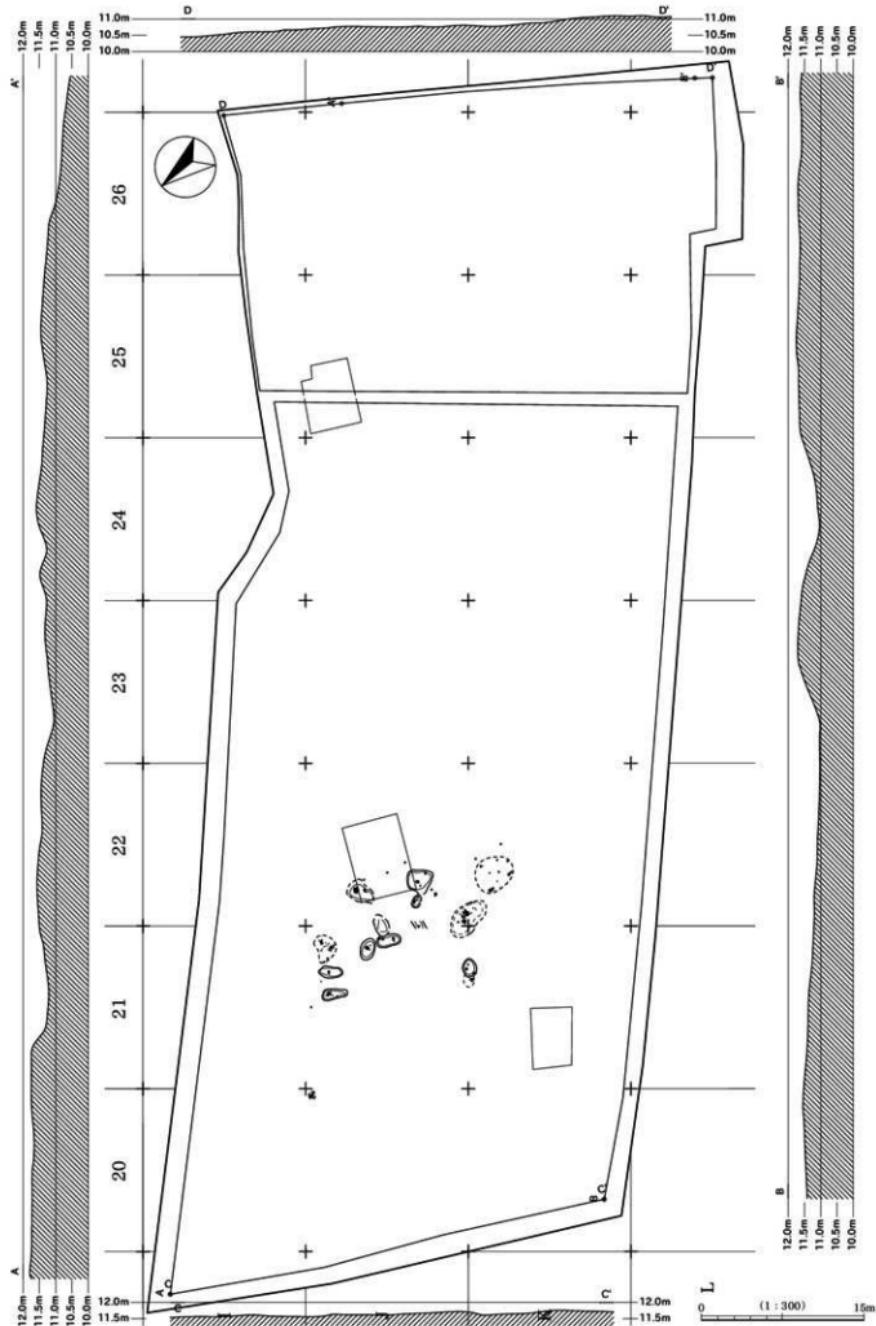
0 P (1:60) 3m

0 SB (1:100) 5m

図版 14







I

23

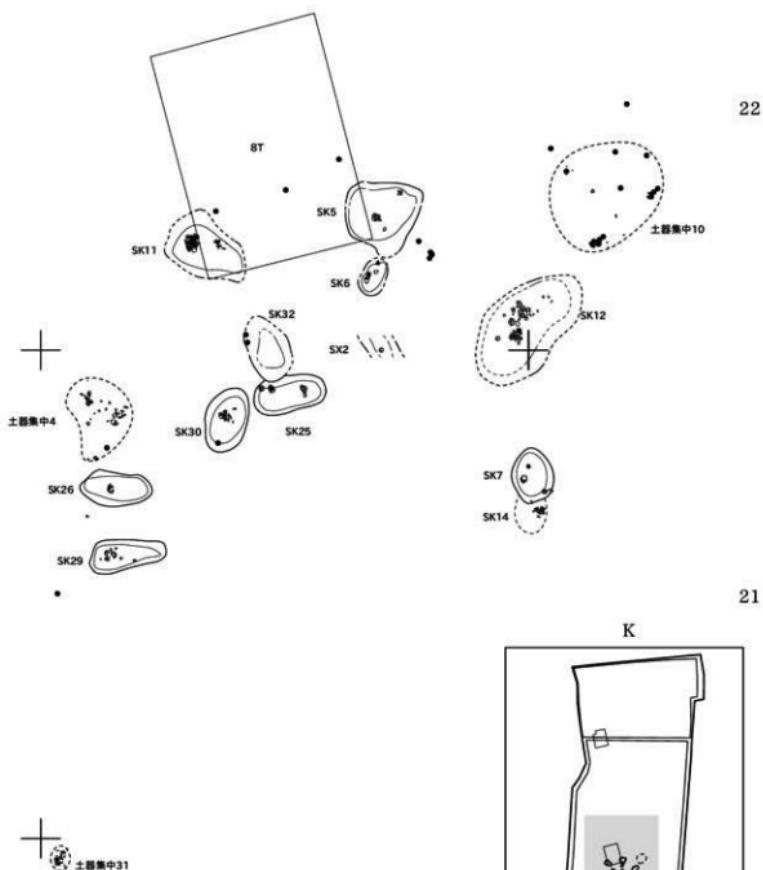


J

K



22



20

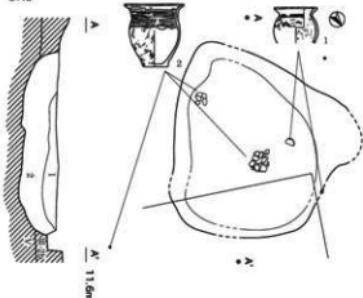
I

J

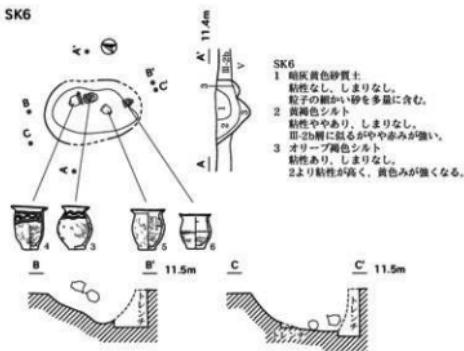
K

0 (1 : 100) 5m

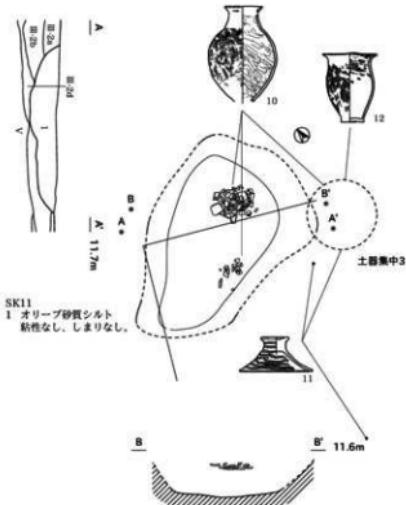
SK5



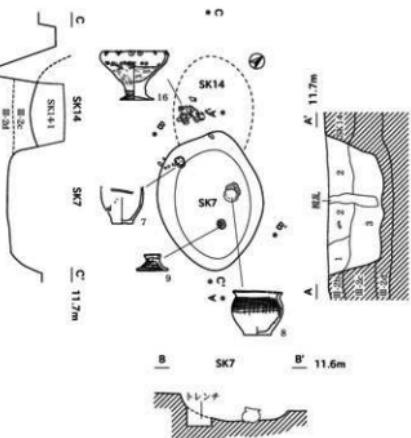
SK6



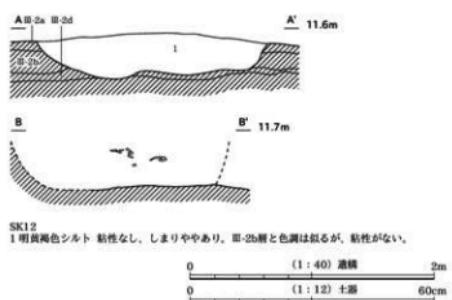
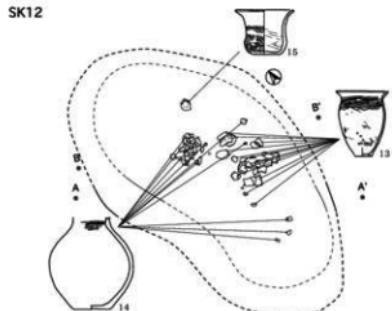
SK11



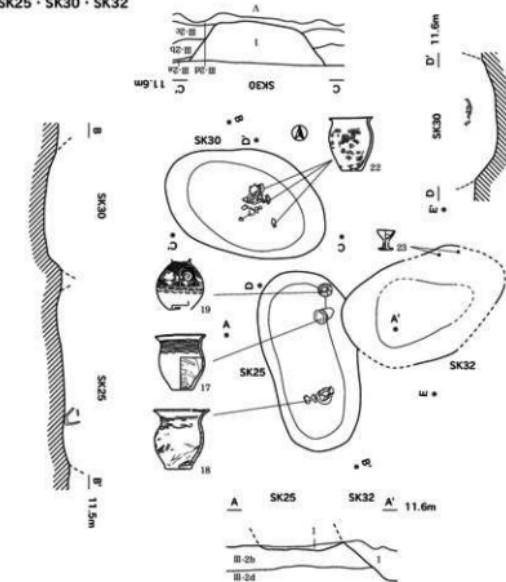
SK7・SK14



SK12



## SK25・SK30・SK32



## SK30

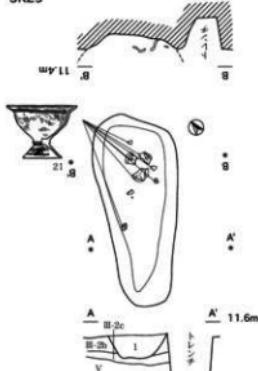
- 1 黄褐色シルト 粘性なし、しまりやあり。  
褐色土や黄褐色土をまばらに含む。Ⅲ-2b層と比べ粘性がない。
- 2 淡褐色シルト 粘性なし、しまりやあり。  
褐色土を多く含む。Ⅲ-2b層と比べ粘性はない。
- 3 黄褐色シルト 粘性ややあり。しまりなし。  
Ⅲ-2b層によく似る土質。
- 4 オリーブ褐色砂 粘性なし、しまりなし。  
均一な砂層。5mmの大粒砂を若干含む。

## SK25

- 1 に赤い黄色シルト 粘性なし、しまりあり。  
Ⅲ-2b層に比べ粘みが強くやや濃い色調。



## SK29



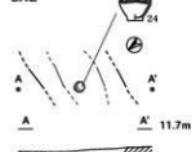
## SK29

- 1 に赤い黄褐色シルト  
粘性ややあり、しまりあり。

## 土器集中31



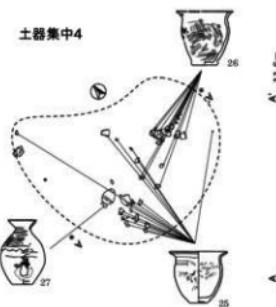
## SX2



## SX2

- 1 に赤い黄褐色砂質シルト  
粘性なし、しまりなし。  
炭化物少量含む。砂を多量に含む。

## 土器集中4



## 土器集中10

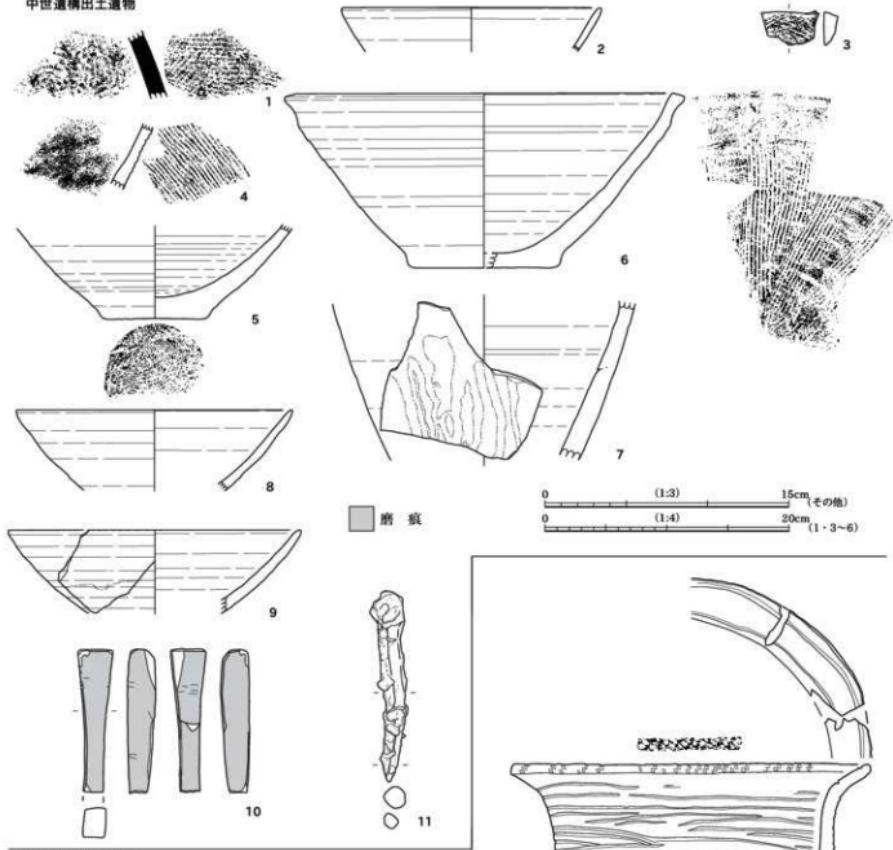


0 (1:40) 通構 2m  
0 (1:12) 土器 60cm

図版 20

中世遺構出土遺物（土器・石製品・金属製品）弥生時代の土器（1）

## 中世遺構出土遺物

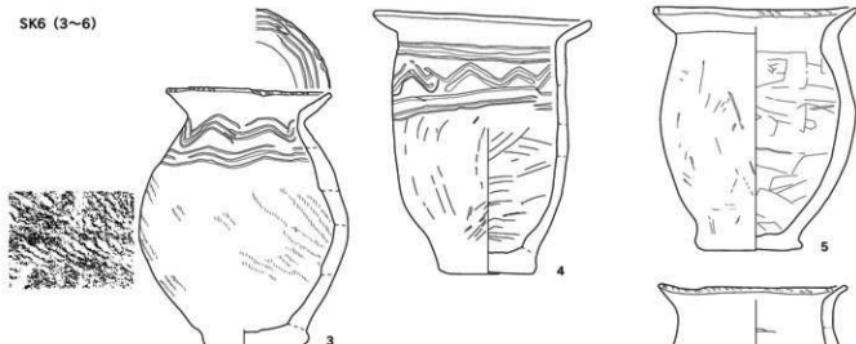


## 弥生時代中期の土器

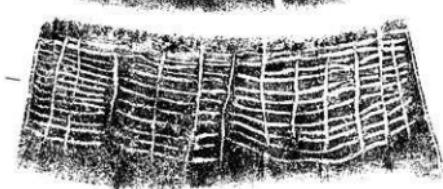
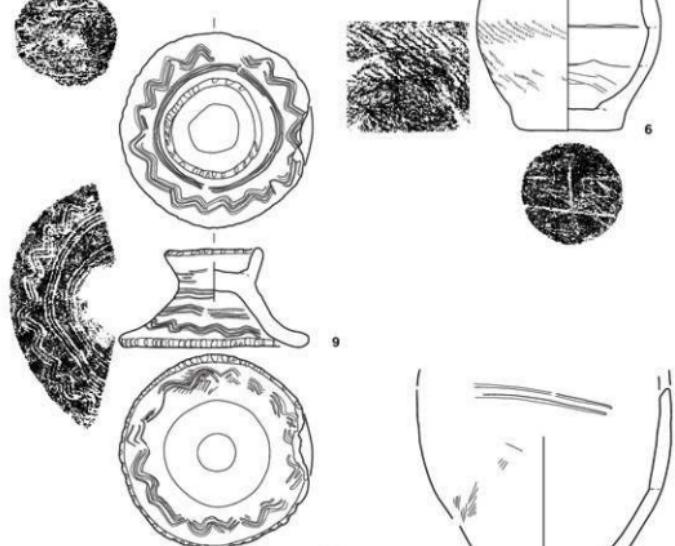
SK5(1・2)



SK6 (3~6)



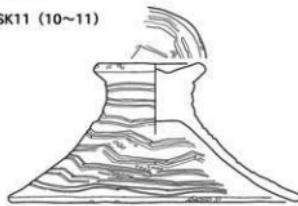
SK7 (7~9)



0 (1:2) 10cm (3~9)

8

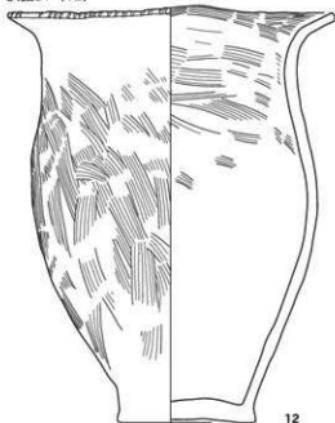
SK11 (10~11)



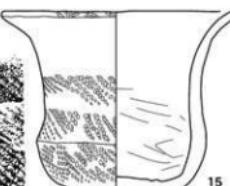
11



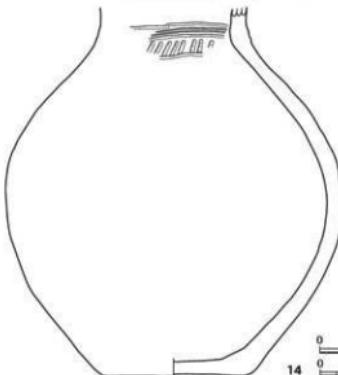
試掘8T (12)



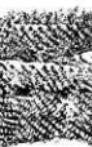
12

SK12  
(13~15)

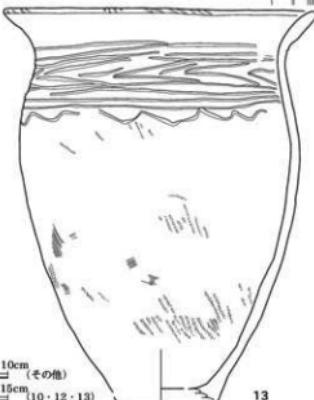
15



14



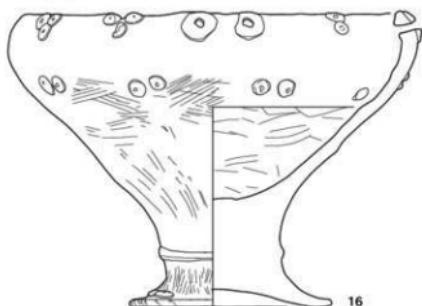
10



13



SK14 (16)

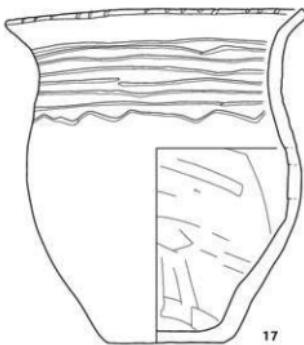


SK25 (17~19)



16

19



17



18

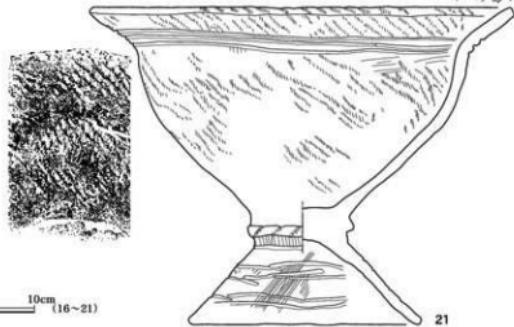


SK26 (20)



20

SK29 (21)



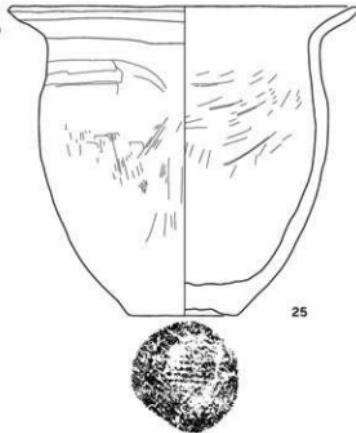
21

0 (1:2) 10cm (16~21)

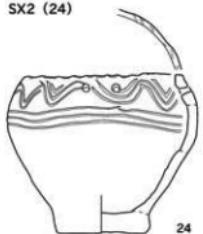
SK30 (22)



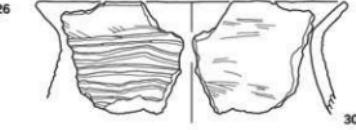
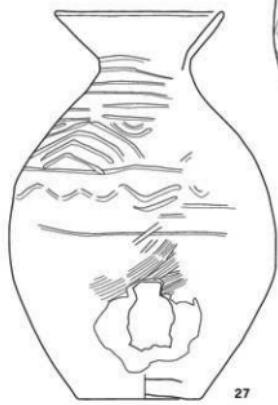
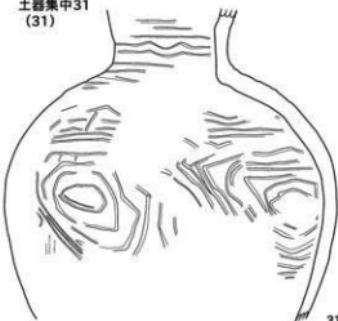
SK32 (23)

土器集中4  
(25~27)

SX2 (24)



土器集中10 (28~30)

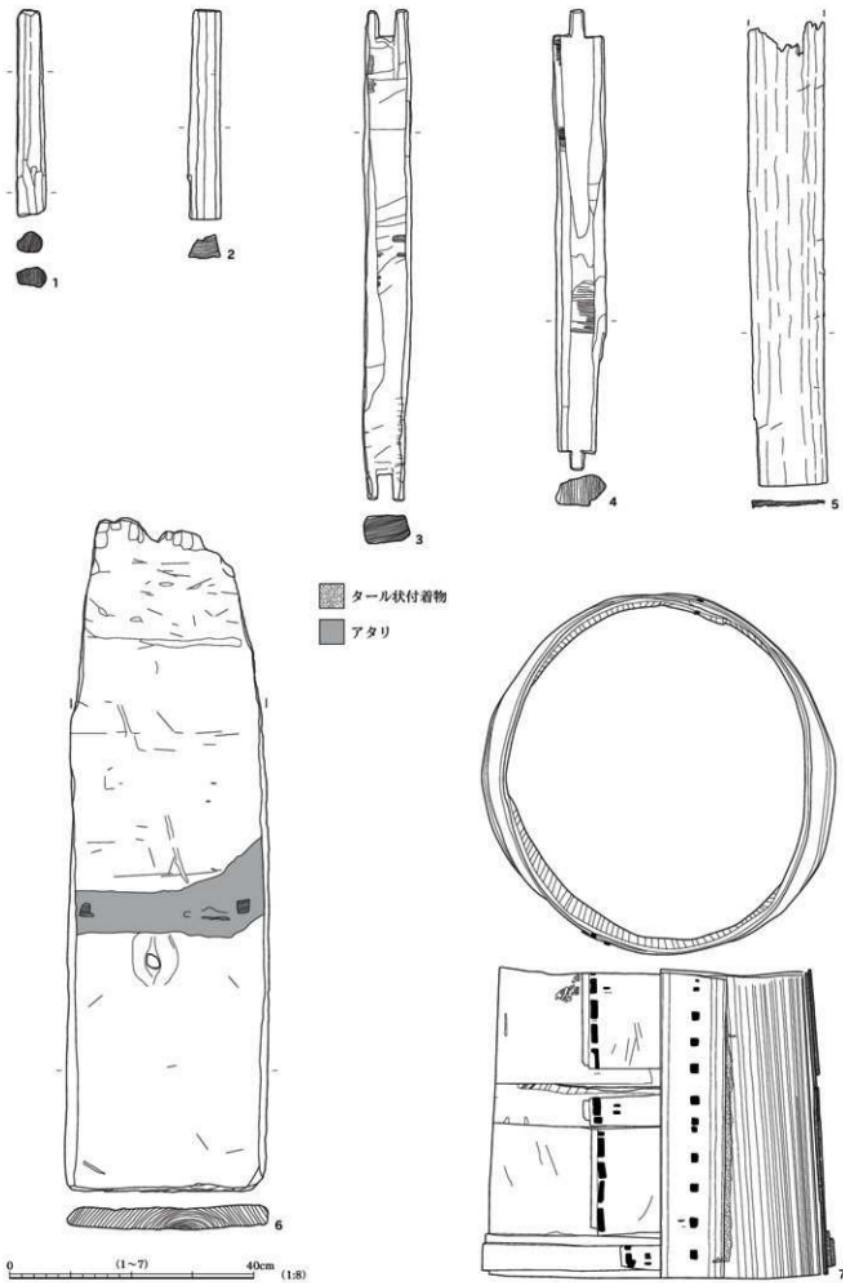
土器集中31  
(31)

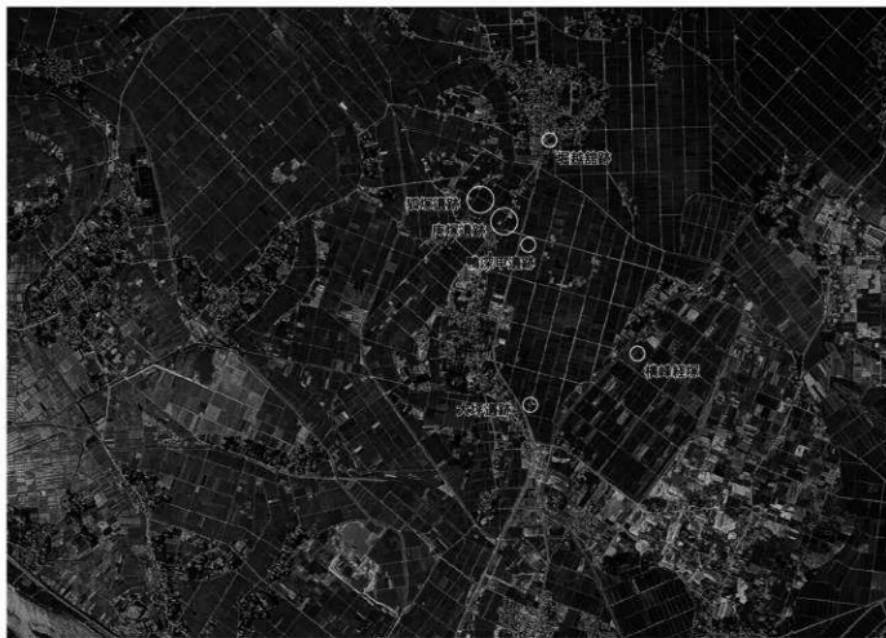
0

(1:2)

10cm

(22~31)





遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院平成5年5月16日撮影 空中写真）



B区42～46グリッド 完掘（南東から）



基本層序44IIグリッド（南西から）



SD14 断面（南から）



SD15 断面（南から）



SD3、14、15 完掘（南から）



SX11 断面（北から）



C区 完掘（北西から）



基本層序 3812 グリッド（南西から）



SD28 断面（北西から）



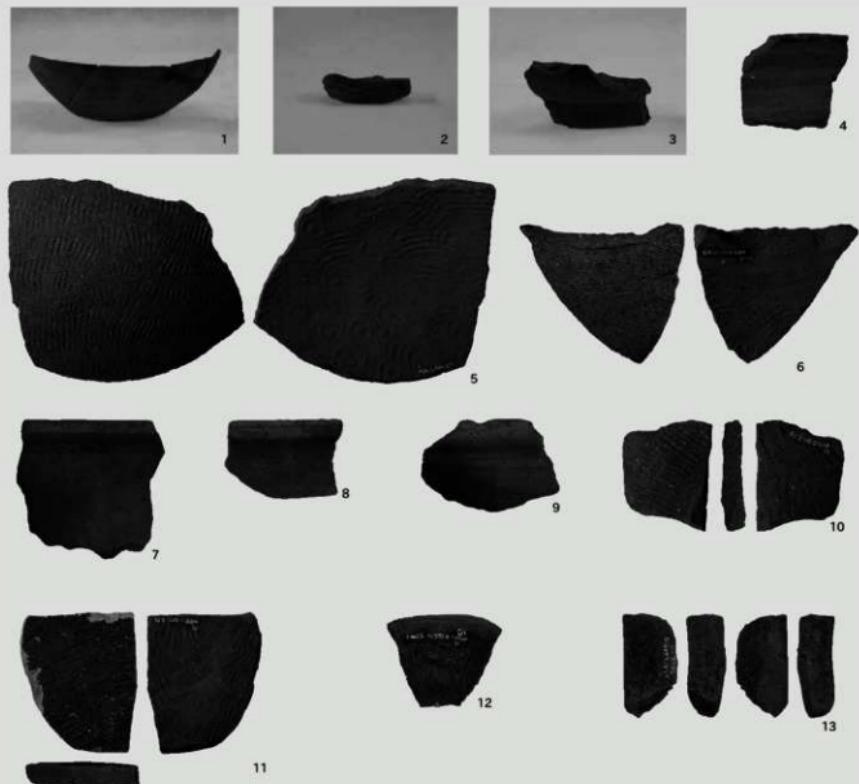
SD28 完掘（北西から）



SD40 完掘（南西から）



SK30 断面（北から）





狐塚遺跡上層完掘（南東から）



狐塚遺跡上層完掘（北西から）



SB165 完掘 (西から)



SB165 - P102 断面 (西から)



SB194 完掘 (西から)



SB194 - P197 断面 (南から)



SB208 完掘 (西から)



SB208 - P214 断面 (東から)



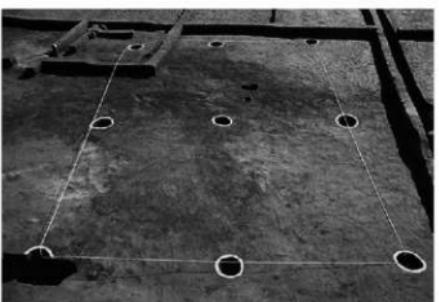
SB222 完掘 (西から)



SB222 - P128 断面 (西から)



SB223 完掘（西から）



SB225 完掘（西から）



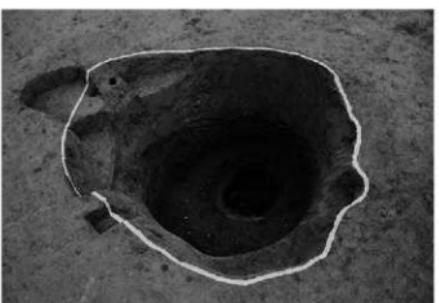
SB225-P111 断面（北西から）



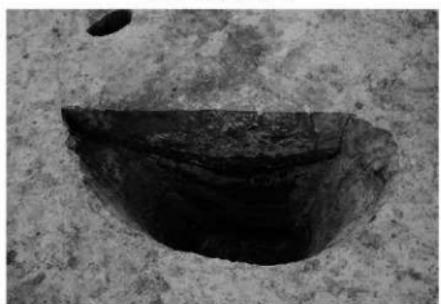
SB318 完掘（東から）



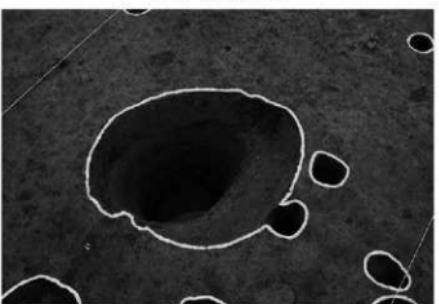
SE173 断面（南西から）



SE173 完掘（西から）



SE176 断面（南西から）



SE176 完掘（南西から）



SE193 断面（南東から）



SE193・SX174 完成（南東から）



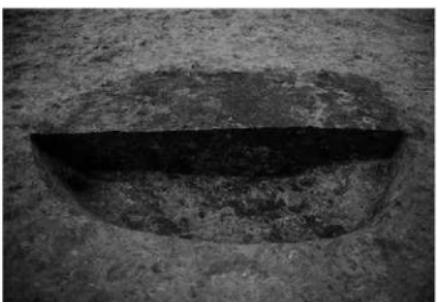
SE236 断面（南西から）



SE236 出土状況（北東から）



SE236 出土状況（北東から）



SK238 断面（南西から）



SD132 断面（西から）



SD133 断面（西から）



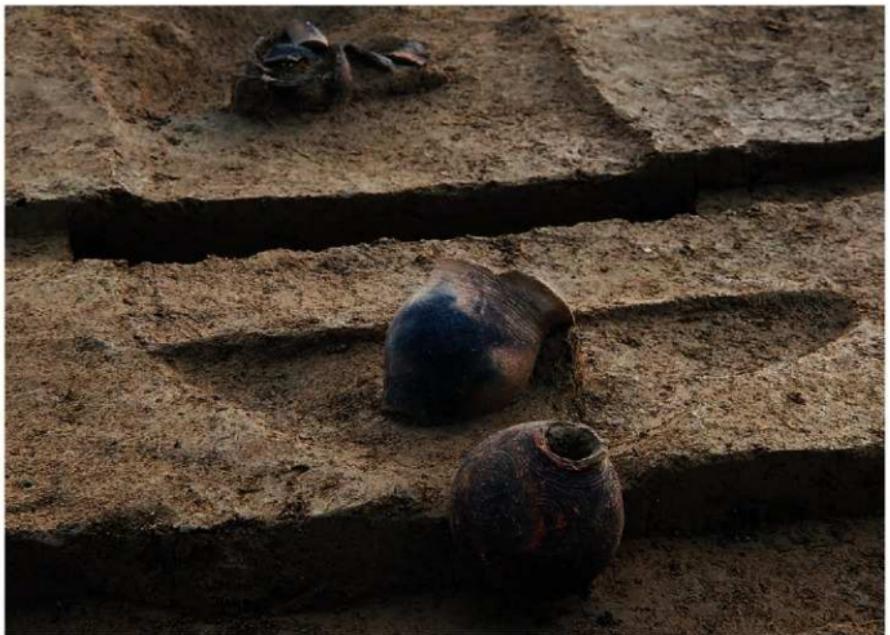
出土した弥生土器



狐塚遺跡下層完掘（北東から）



SK6 出土状況（東から）



SK25 出土状況（北東から）



基本層序 (2111) (南西から)



基本層序 (2115) (南西から)



SK7 出土状況 (南西から)



SK14 出土状況 (南西から)



SK11 断面 (南西から)



SK12 断面 (南西から)



SK29 出土状況 (西から)



土器集中4 出土状況 (北西から)



下層完掘（南西から）



SK5 出土状況（南東から）



SK5 新面（南東から）



SK5 完掘（南東から）



SK6 出土状況（北から）



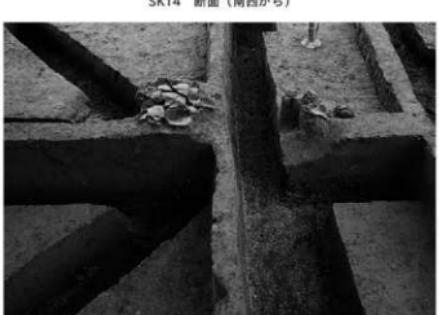
SK6 出土状況（南から）



SK6 出土状況（南から）



SK6 断面（南から）





SK12 出土状況（北西から）



SK12 出土状況（東から）



SK12 出土状況（東から）



SK12 出土状況（東から）



SK12 完掘（東から）



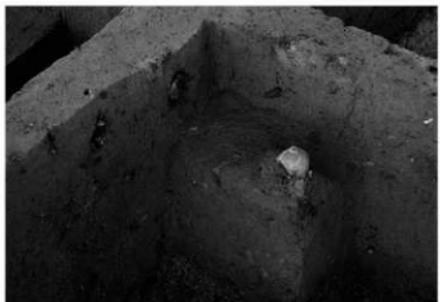
SK25 出土状況（南から）



SK25 断面（南西から）



SK25 完掘（南西から）



SK32 出土状況（南から）



SK32 新面（南東から）



SK32 完掘（東から）



SK26 出土状況（南西から）



SK26 新面（南西から）



SK26 完掘（南西から）



SK29 断面（南西から）



SK29 出土状況（西から）



SK29 完掘（南西から）



SK30 出土状況（東から）



SK30 断面（北東から）



SK30 完掘（北西から）



SX2 断面（北西から）



土器集中4 出土状況（北西から）



土器集中10 出土状況（南から）



土器集中31 出土状況（南西から）

## 弥生時代中期後半の土器



1



3



2



4



6



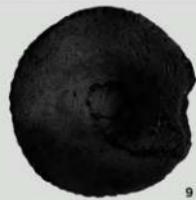
7



5



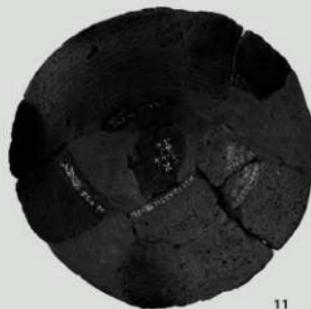
8



9



10



11



12

10・12 (1:3)  
その他 (1:2)



15



14



16



17



13

13 (1:3)  
その他 (1:2)





25



26



27



28



30



29



31

全て (1:2)

## 中世遺構出土遺物



1・3~6 [1:4] その他 [1:3]

## SE236出土木製品



全て [1:8]

## 報告書抄録

ふりがな	かのえづかいせき・きつねづかいせき							
書名	庚塚遺跡・狐塚遺跡							
副書名	一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書							
卷次	I							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第203集							
編著者名	佐藤友子・杉田和宏・高橋保雄（埋文事業団）、安西雅希（株式会社帆苟組）、中根秀二（パリノ・サーヴェイ株式会社）							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2009(平成21)年2月27日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
庚塚遺跡	新潟県阿賀野市大字寺社字庚塚 3221-1番地ほか	15223	392	37度 47分 51秒	139度 13分 49秒	20070806～ 20071022	3,327	道路（一般国道49号阿賀野バイパス）事業
狐塚遺跡	新潟県阿賀野市大字熊住新田字狐塚 742番地ほか	15223	395	37度 47分 55秒	139度 13分 42秒	20071001～ 20071226	2,067	道路（一般国道49号阿賀野バイパス）事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
庚塚遺跡	散布地	古代	溝状造構1条・旧河川跡1条・土坑2基	土師器・須恵器				
	散布地	中世	溝状造構4条・土坑2基・ビット1基	土師器・珠洲焼・石製品				
狐塚遺跡	墓域	弥生時代中期後半	土坑墓11基・性格不明造構1基・土器集中3か所	弥生土器				
	集落跡	中世	掘立柱建物7棟・井戸6基・土坑17基・溝状造構14条・性格不明造構6基・ビット340基	珠洲焼・青磁・古瀬戸・石製品・鉄製品・木製品				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第203集 一般国道49号阿賀野バイパス関係発掘調査報告書 庚塚遺跡・狐塚遺跡	
平成21年2月26日印刷	編集・発行 新潟県教育委員会
平成21年2月27日発行	〒956-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025(285)5511
	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986
	印刷・製本 北越印刷株式会社 〒940-0034 長岡市福住1丁目6番27号 電話 0258(33)0306

## 新潟県埋蔵文化財調査報告書 第203集『庚塚遺跡 狐塚遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	庚塚遺跡 北緯	3 7 度 4 7 分 5 1 秒	3 7 度 4 8 分 0 2 秒
抄錄	庚塚遺跡 東経	1 3 9 度 1 3 分 4 9 秒	1 3 9 度 1 3 分 3 6 秒
抄錄	狐塚遺跡 北緯	3 7 度 4 7 分 5 5 秒	3 7 度 4 8 分 0 6 秒
抄錄	狐塚遺跡 東経	1 3 9 度 1 3 分 4 2 秒	1 3 9 度 1 3 分 3 0 秒